

平成16年度 陵墓関係調査報告

陵 墓 調 査 室

調査の概要

当調査室では、「周知の遺跡」となっている陵墓において、保全・整備のための土木工事などを実施するにあたり、施工区域・箇所の遺構・遺物の有無を確認し、工法の決定に資するために事前調査・立会調査を実施している。平成16年度も各陵墓監区事務所や京都事務所などの関係機関と協力し、以下の区域・箇所において調査を行った。その概要を記すことにする。

〔事前調査〕 3件

- 1 武蔵陵墓地内(東京都八王子市長房町：多摩監区)埋蔵文化財の調査

2月・3月実施、担当：徳田誠志・有馬伸・加藤一郎

武蔵陵墓地は、昭和天皇陵ほか三陵が所在し、今後とも新陵が営建される可能性の高い箇所である。当地では、今までIV次にわたる事前調査を実施しているが、今回V次調査を行った。平成17年度以降にも実施する調査と併せて、報告の予定である。

- 2 雲部陵墓参考地(兵庫県篠山市東本荘：月輪監区)墳塋裾護岸その他整備工事区域の調査

10月～12月実施、担当：徳田誠志・有馬伸・加藤一郎

報告文は後掲する。

- 3 黄金塚陵墓参考地(奈良市田中町：歛傍監区)石室前面部の調査

9月実施、担当：清喜裕二・寺本公通・三井朋宏

報告文は後掲する。

〔立会調査〕 30件

- 4 豊島岡墓地内(東京都文京区大塚五丁目：多摩監区)竹田宮墓内陥没箇所復旧工事箇所の調査

4月実施、担当：徳田誠志・福尾正彦

陵墓地内を巡回中、竹田宮墓地内で陥没箇所が発見された。陥没した箇所を中心に、東西1.0m、南北2.0mのトレンチを設定して掘削した。その結果地表下0.7m付近において地下蔵に通じる豊穴を検出した。この豊穴を地表下約1.7mまで掘削したところ、掘削面から20cmほど上で南側に延びる横穴の入口を検出した。横穴内は空洞になっており、江戸時代の地下蔵であると判断した。出土遺物としては、肥前産の磁器、美濃産の陶器、泥人形等の破片8点が出土した。いずれも18世紀後半から19世紀にかけての時期に属する、日用雑器を中心とする。江戸時代における豊島岡墓地は、隣接する護国寺の境内地であり、今回の遺構も護国寺に関連した遺構である可能性が高いように思われる。調査終了後は、埋め戻した。豊島岡墓地は周知の遺跡とはなっていなかったが、竹田宮墓地はこのことにより東京都教育委員会により平成17年12月20日をもって、周知の遺跡に認定されることになった。

- 5 豊島岡墓地(東京都文京区大塚五丁目：多摩監区)参集所ガス管理設替え工事箇所の調査

11月実施、担当：徳田誠志

掘削箇所は、過去に駐車場として整備された部分である。掘削箇所は過去の埋め戻し土であり、江戸時代以前に遡るような遺構・遺物は出土しなかった。

- 6 明治天皇伏見桃山陵(京都市伏見区桃山町古城山：桃山監区)一般拝所正面駒寄改修工事箇所の調査

8月・9月実施、担当：福富彰・宮田一弘

掘削箇所の土層は、既設駒寄施工の際の埋め戻し土であった。遺物も検出されなかった。

- 7 北川陵墓参考地(宮崎県東臼杵郡北川町大字長井：桃山監区)冠木門改修工事箇所の調査

- 2月実施、担当：岡田眞智子
遠隔地であるため、北川町教育委員会および宮崎県教育委員会の協力を得て、掘削に立ち会った。遺構、遺物は検出されなかった。
- 8 桃山陵墓地(京都市伏見区桃山町：桃山監区)ほか林相整備工事区域の調査
2月実施、担当：瀬尾義弘・平尾伸也
桃山陵墓地において、竹根防止のための掘削(深さ約60cm)に立ち会った。腐植土・攪乱土の下位は粘質土などの地山であった。遺構、遺物は検出されなかった。
- 9 月輪陵墓監区事務所(京都市東山区今熊野山内町：月輪監区)水銀灯修繕工事箇所の調査
9月実施、担当：今出伸一・田端勝一
掘削箇所は、現事務所建設や駐車場整備時の盛土・整地土と考えられた。遺構や遺物は検出されなかった。
- 10 後堀河天皇觀音寺陵(京都市東山区今熊野泉山町 泉涌寺内：月輪監区)鳥居改築工事箇所の調査
10月実施、担当：今出伸一・田端勝一
4層が確認された。上位2層は、拝所の盛土と表面の白砂層である。下位2層は、下層が堅緻な粘質土で地山と考えられるが、上層は軟質で、盛土の可能性が高い。遺構・遺物は検出されなかった。
- 11 尊称太皇太后順子後山階陵(京都市山科区御陵沢ノ川町：月輪監区)鳥居改築工事箇所の調査
10月実施、担当：鎌田幹史・寺岡慎太郎
3層が確認された。上層は表土で、中・下層は茶褐色粘質土である。中層は砂が多く含まれ、下層は砂が少ない点で区別される。均質な土であり、地山の可能性が考えられる。遺構・遺物は検出されなかった。
- 12 後鳥羽天皇火葬塚(島根県隠岐郡海士町大字海士：月輪監区)風倒木復旧整備工事箇所の調査
11月実施、担当：清喜裕二
報告文は後掲する。
- 13 二條天皇香隆寺陵(京都市北区平野八丁柳町：月輪監区)見張所改築工事箇所の調査
12月実施、担当：清喜裕二・藤原雅人・鎌谷幸一
報告文は後掲する。
- 14 四條天皇月輪陵(京都市東山区今熊野泉山町 泉涌寺内：月輪監区)以下築地壝改築工事区域の調査
11月・12月・2月実施、担当：奥野 肇・米谷有朋
平成13年度から開始された4ヶ年計画の最終年度にあたる。今回は南側から西側部分の築地壝、および西側に位置する透壝の改築に伴う掘削などに立ち会った。今年度の調査では地山は認められず、大半は従前の掘削に伴う盛土であった。遺物として燐瓦3片が採集された。盛土内に混入したものであり、遺構に伴うものとは思われない。
- 15 賀陽宮墓(京都市上京区射場町 報恩寺内：月輪監区)正面鉄扉修繕その他工事箇所の立会調査
3月実施、担当：坂部泰生・藤原雅人
既設石柱の基礎石を検出。掘削はその下位には及ばず、土層は従前の掘削に伴う盛土であった。遺物は出土していない。
- 16 孝昭天皇掖上博多山上陵(奈良県御所市大字三室：畝傍監区)見張所改築工事箇所の調査
12月実施、担当：加藤一郎・濱本厚志・安岡徹悦
報告文は後掲する。
- 17 大碓命墓(愛知県豊田市猿投町鷺取 猿投神社内：畝傍監区)鳥居新築工事箇所の調査
1月実施、担当：清喜裕二・山本昌弘・古谷拓也
報告文は後掲する。
- 18 神功皇后狭城盾列池上陵(奈良市山陵町：畝傍監区)整備工事区域の調査

- 2月実施、担当：清喜裕二・西村悦二・今井隆太朗・仲田裕行
報告文は後掲する。
- 19 吉備姫王墓(奈良県高市郡明日香村大字平田：畠傍監区)特別・一般拝所整備工事箇所の調査
8月～10月実施、担当：南 義孝・濱本厚志
特別拝所・一般拝所ほぼ全域の舗装に伴う掘削、および入口部の擬木車止め基礎部分の掘削に立ち会った。擬木車止め設置箇所のおよそG. L. -cmで茶褐色粘質土を確認。周辺地形から地山と考えられる。そのほかの掘削部分は、拝所造成土内に止まった。遺構や遺物は検出されなかった。
- 20 舒明天皇陵(奈良県桜井市大字忍阪：畠傍監区)参道整備工事箇所の調査
9月・10月実施、担当：本多 均・大塚由之
参道西側見張所裏の石積を撤去し、擁壁を設けるための掘削に立ち会った。土層は旧石積裏込め土および近年の盛土と見られた。遺構・遺物は検出されていない。
- 21 孝元天皇陵(奈良県橿原市石川町：畠傍監区)防災整備工事区域の調査
11月～1月実施、担当：野上修也・上原孝浩
剣池の参道入口部付近に接する箇所に護岸工事を実施することになり、掘削に立ち会った。一部では最下層に青灰色粘質土層が見られ、剣池もしくは水田面を埋め立て、造成したものと考えられた。また、北側部分については最下層に地山層である花崗岩起源のバイラン土層があり、それより上層は自然堆積土もしくは旧石垣設置時の造成土と思われた。遺構・遺物の検出はなかった。
- 22 神武天皇陵(奈良県橿原市大久保町：畠傍監区)駐車場整備工事箇所の調査
2月実施、担当：野上修也・濱田武典
掘削箇所のほとんどの部分は、既設水路および駐車場整備時の造成土と思われる。一部掘削箇所下層において青灰色～黄褐色の粘質土が認められ、敷地造成以前の水田に関わるもの可能性がある。遺構や遺物の検出はなかった。
- 23 神武天皇陵附属地内(奈良県橿原市大久保町：畠傍監区)水路改修工事箇所の調査
3月実施、担当：野上修也・濱田武典
本工事は四条土地改良区が実施するものであるが、該所は当庁所管地ではあるため、掘削に立ち会ったものである。遺構や遺物の出土はなかった。
- 24 孝靈天皇陵(奈良県北葛城郡王寺町本町3丁目：畠傍監区)下水道管接続その他整備工事箇所の調査
3月実施、担当：安岡徹悦・徳永真明
掘削部分はすべて既掘部分であり、遺構・遺物は認められなかった。
- 25 佐紀部見張所(奈良市山陵町：畠傍監区)電気設備その他改修工事箇所の調査
3月実施、担当：石塚俊光・三井朋宏
成務天皇狭城盾列池後陵の前方部側外堤の西隅と東隅付近それぞれの掘削に立ち会った。西隅部分では、表土下に盛土崩落土、外堤盛土、地山が見られ、盛土崩落土層中から埴輪片が出土した。東隅付近では整地土、外堤盛土とおぼしき土層、地山が認められた。
- 26 奈良部見張所(奈良市油阪町：畠傍監区)電気設備その他改修工事箇所の調査
3月実施、担当：寺本公通・長瀬匡洋
掘削は、開化天皇春日率川坂上陵に所在する見張所および既設給水管設置時の埋戻し土中にとどまつた。
- 27 雄略天皇陵飛地い号(大阪府羽曳野市島泉8丁目：古市監区)フェンス扉設置工事箇所の調査
6月実施、担当：松尾 浩・古河稔也
掘削は後世の整地層内にとどまつた。
- 28 敏達天皇陵(大阪府南河内郡太子町大字太子：古市監区)鳥居改築工事箇所の立会調査
10月実施、担当：小谷武史・堂園雅章

基礎部2箇所の掘削では、ともに旧鳥居の掘方を確認した。表土、拝所の整地層、旧表土などが認められ、比較的浅いところ(G.L.-0.3m)で地山が確認された。旧鳥居の基礎は地山を大きく掘り込んでいた。

29 仁徳天皇陵(大阪府堺市大仙町：古市監区)外構柵整備工事箇所の調査

1月～3月実施、担当：多田京介・井上 武・川添 悟・須藤周太

基礎設置箇所(225箇所)の掘削に立ち会った。大半の掘削箇所では、掘削は後世の整地層内におさまった。ただし、一部のトレーニング(前方部西側面、陪冢に号：銅亀山古墳(円墳)に面したところ)では地山の可能性がある茶褐色砂質土層が検出された。遺構・遺物は認められなかった。

30 仁徳天皇陵飛地ほ号(菰山古墳、大阪府堺市南丸保園：古市監区)コンクリート擁壁設置その他整備工事箇所の調査

1月・3月実施、担当：多田京介・井上 武・川添 悟・須藤周太

報告文は後掲する。

31 反正天皇陵(大阪府堺市北三国ヶ丘町2丁：古市監区)外構柵整備工事箇所の調査

1月実施、担当：多田京介・井上 武・川添 悟・須藤周太

南側境界沿外構柵設置箇所の基礎部の掘削・埋め戻し時に立ち会った。該所は昭和55年度に事前調査しているところである。その際には地山はG.L.-約0.5mで確認されている。今回の掘削深度ではそこまでは達せず、後世の整地層内にとどまった。遺構・遺物は認められなかった。

32 応神天皇皇后仲姫命仲津山陵(大阪府藤井寺市沢田4丁目：古市監区)外構柵整備工事箇所の調査

2月・3月実施、担当：小走直敬・近藤時男・笹尾佳裕

拝所北側の外堤上の掘削・埋め戻し時に立ち会った。調査箇所は境界沿いのため、隣接地の住宅基礎、ブロック塀基礎等々の工事で搅乱を受けていた。ただし、一部では、上面は削平されているものの、地山あるいは地山起源の盛土と考えられる外堤の面を検出した。調査箇所付近では、当庁管理地外で埴輪列が検出されていることもあり、より慎重を期したが、関連する遺構遺物は確認できなかった。

33 安閑天皇陵(大阪府羽曳野市古市5丁目：古市監区)外堤フェンス設置工事箇所の調査

3月実施、担当：清喜裕二・加藤一郎・小走直敬・近藤時男・笹尾佳裕

拝所南側の外堤上の掘削・埋め戻し時に立ち会った。調査箇所は拝所整備時に掘削されたのちに盛土をしたものと判断された。土師器のごく小片1点が出土している。

また、平成16年度には以下のような調査も実施した。

[墳丘調査] 1件

34 聖徳太子磯長墓(大阪府南河内郡太子町太子 叡福寺内)

3月実施、担当：清喜裕二・加藤一郎

下段「結界石」の銘文調査および写真撮影、さらには御靈屋内の燈籠等の現状調査をおこなった。

[文献調査] 1件

35 奈良県立奈良図書館(奈良県奈良市登大路町)保管資料の調査

3月実施、担当：北條朝彦

奈良県立奈良図書館が保管している陵墓関係資料のうち、『社寺及御陵墓ニ関スル書類』などの調査を実施した。

雲部陵墓参考地墳塁裾護岸その他工事に伴う事前調査

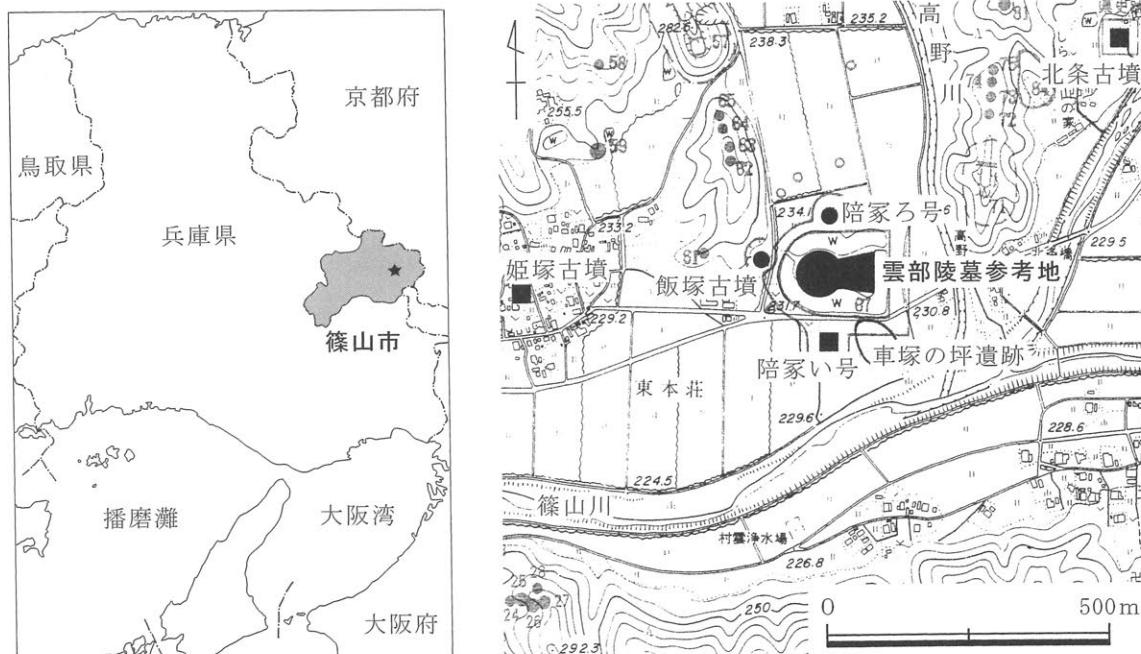
はじめに

雲部陵墓参考地は兵庫県篠山市東本荘に所在し、「雲部車塚古墳」の名で知られる。主軸をほぼ東西を向ける前方後円墳であり、現在の墳丘長はおよそ140mとされ、その規模は兵庫県内第2位ともいわれる。東西2箇所の渡土堤に区切られた盾形の周濠を持ち、南北両側に陪冢を伴うほか、周囲の畦畔には「周庭帯」とされる区画が明瞭に残されている。明治29年(1896)には地元の人々によって発掘されており、その後に取り出された遺物は、現在京都大学総合博物館が保管している⁽¹⁾。

本墳が陵墓参考地に治定されるに至る経緯は、既に池田正男氏の詳細な論考もあり⁽²⁾、概略を述べるに留めるが、発掘による陵墓治定運動の高揚→明治32年に宮内省が買い上げ決定→翌33年に監守人の委嘱、という流れをたどる。池田氏も引用しているように、こうした経緯については、時の雲部村村長木戸勇助氏の残した『車塚一詩』によって詳しく知ることができる。『車塚一詩』にはそのほか、その後の御墓への昇格運動の様子や、濠の復旧工事についての文書類などがまとめられており、単なる本参考地の記録としてだけではなく、明治30年代における陵墓にまつわる行政の動きを明らかにすることのできる一級の史料でもある。この『車塚一詩』についてはいずれ別の機会に詳述することとした。

さて、本参考地の立地については、後円部西側に存在する丘陵を重視し、そこから東に延びていた丘陵を切断して築いたという見解もあったが⁽³⁾、今回の調査によって得られた所見を勘案すると、西側丘陵と東側を南流する高野川との間に存在した微高地を利用して築かれたものとするのが妥当であろう(第1図)。

なお、南濠は承応年間(1652・53)に埋め立てられて水田となっていたものを、参考地治定にあたって濠に戻すことが建議され、明治37・38年に再掘削されたものである⁽⁴⁾。その後、昭和初期にも濠の改修工事が行われ、現状に近い姿になったようである⁽⁵⁾。こうした濠の改修が地元主導で繰り返し行われた背景には、参考地の整備という目的とともに、農業用水の確保という実利があったためと考えられる。



第1図 雲部陵墓参考地 位置図および周辺遺跡地図
(篠山町教育委員会『篠山町遺跡地図及び地名表』1998年より一部改変)

陪冢については、い号(南側)が方墳、ろ号(北側)が円墳とされることが多いが、墳形の確認調査が実施されたことはなく、正確な墳形、規模は不明である。陪冢的存在としては、ほかに後円部西側の丘陵上に存在する飯塚古墳(い塚・いみ塚)と呼ばれる円墳がある。主墳からの距離は両陪冢とほぼ等しく、平面的な位置関係は同様のものと思われるが、当庁では陪冢としての指定をしていない。さらに、ろ号陪冢の北方に鳥居塚と呼ばれるものを含め複数の古墳が存在したという記録があり、主墳の北西には隔塚と呼ばれた古墳が存在していたともされる⁽⁶⁾。これらが陪冢にあたるものかどうかについては判断材料がないが、本参考地を中心として小規模な古墳が点在していたようである。

その他周辺の古墳を紹介しておくと、西へ500mほど離れた東本荘集落内には一辺30mの方墳とされる姫塚古墳があり(一説には前方後円墳)、埴輪片が採集されている。また、丘陵を挟むため本参考地から直接視認することはできないが、東へ800mほど離れた細工所集落には、一辺35mの方墳である北条古墳が存在している。この古墳からも埴輪が採集されており、粘土櫛、もしくは木棺直葬の内部施設を持つとされる。この2古墳はいずれも古墳時代中期の築造と考えられているが、本参考地との前後関係は不明である。また北方1kmほどの県守集落の春日神社境内には、墳長22mの前方後円墳であるいごり塚古墳があり、横穴式石室を内包する⁽⁷⁾。この「いごり」という名称については、開化天皇の妃である竹野媛の父、丹波大県主由碁理(ゆごり)の名に通じるとする意見がある⁽⁸⁾。

参考地築造以前の遺跡としては南東側に広がる車塚の坪遺跡がある⁽⁹⁾。後述するように今回の調査においても墳丘下に弥生期の遺物を包含する土層が確認されており、同遺跡は墳丘の位置まで拡がっていることが明らかになった。

さて、本参考地の墳丘裾部は経年の波浪による浸食と崩落のため崖状ないし急斜面となっていた。このため墳丘裾の保護を目的とした護岸工事が計画され、これに先だって施工予定地における遺構・遺物の存否とその実態、および工法の検討に必要な所見を得ることを目的とした発掘調査を実施することとなった。調査は平成16年10月18日から着手し、同年11月30日に終了した。その間、網干善教陵墓管理委員・杉浦信男陵墓管理委員にはそれぞれ考古学・土木工学の立場から現地を検分いただき、指導を賜った。墳丘裾部に散乱している石材、および葺石については、奥田尚氏に鑑定いただいた。その結果については後掲する。

なお、本参考地築造以前の遺物である弥生土器・石器等については、兵庫県芦屋市教育委員会文化財保護課森岡秀人氏よりご教示賜った。記して感謝申し上げる次第である。(徳田誠志)

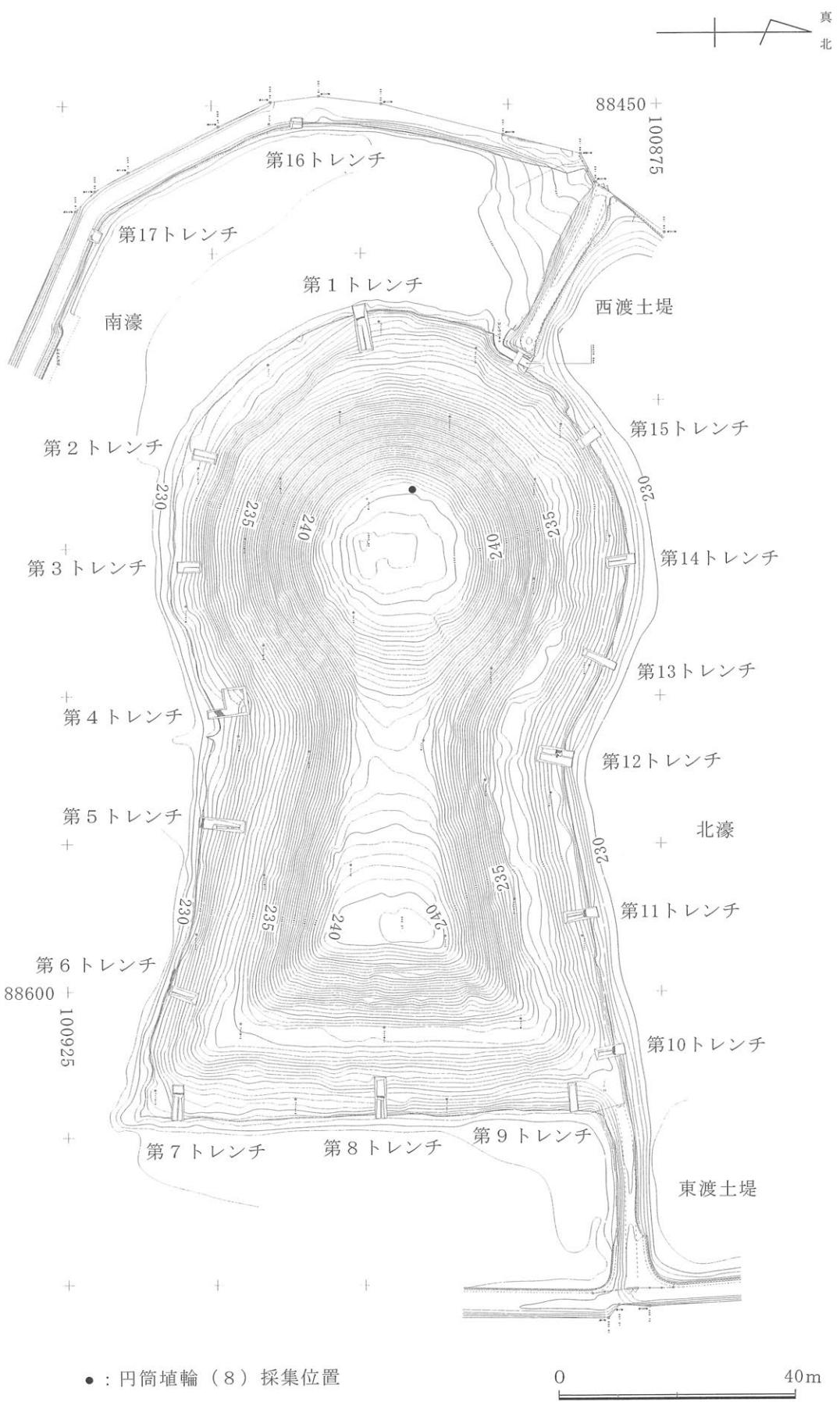
1 トレンチの設定方法と基本的な層序

今年度の事前調査においては、護岸工事予定地のうち墳丘裾部に第1～第15の、外堤裾部に第16・第17の、計17箇所のトレンチを設けた。その配置は第2図のとおりである。各トレンチは長さ5m×幅2m、または長さ5m×幅5mを基本としたが、設定箇所や調査の状況に応じて適宜変更した。

調査した各トレンチの基本的な土層は以下のとおりである。

I層 表土。草根の含まれる現状の表土である。

II層 後世の盛土。本来の墳丘盛土ではないものを一括した。a層は第16、第17トレンチで認められる現状の外堤を構築する盛土で、近現代の陶磁器片が含まれる。b層は第17トレンチの下方で確認したもので、現状のように改修される以前の外堤を構築する盛土である。c層は第1～第4、第8、第9、第16、第17トレンチで検出した、濠内の浚渫土による盛土である。特に第1～第4、第8、第9トレンチのものは、その位置から明治年間における南濠の再掘削で排出された土である可能性が高い。d層としたものは、第12～第14トレンチで認められるもので、もとは墳丘崩落土や濠内堆積土であったと思われる埴輪片の混じる土を使用している。その施工時期は後述する護岸用粘土(III層)の施工以前である。e層としたものは第15トレンチにのみみられるもので、薄い土層が幾重にも重なる状況が他のトレンチと異なる。断面の状況から護岸用粘土(III層)の施工に伴うものと考えられる。



第2図 雲部陵墓参考地 トレンチ配置図 (1/1000)

- Ⅲ層 護岸用粘土。北側の各トレンチで検出された土層で、青灰色系と黄灰色系の粘質土を版築状に積み上げている。北濠は承応年間には水を湛えていたことが確認でき、以降は常に湛水状態であったと思われる。濠水が農業用水として利用されていた蓋然性は高く、粘質土による護岸は水量の確保を目的としたものであろう。Ⅲ層の施工時期は南濠が埋められた承応年間以降である可能性が高い。
- IV層 墳丘崩落土。a層は比較的新しい時期のもので陶磁器なども包含する。北側の各トレンチでは護岸用粘土(Ⅲ層)の施工後のものにあたる。b層は比較的古い段階のもので、埴輪、須恵器など本参考地に直接伴う遺物のみを包含する。
- V層 濠内堆積土。墳丘側では濠内の掘削に至らなかったため外堤側のみに設定した。
- VI層 墳丘盛土。本参考地を構築する盛土である。地山起源と考えられる黄褐色系粘質土や、それと暗茶褐色系粘質土を混合したものが主体をなす。第5～第7トレンチでは小礫を多量に含む土が使用されていたが、第2、第16トレンチの地山が多く的小礫を含んでいることから、このような盛土もそうした地山に由来するものと思われる。
- VII層 弥生土器包含層。墳丘築造以前に生成していた土層であり、茶褐色系の粘質土を基本とする。第3トレンチでは小礫を多数含んでおり、第2トレンチの地山との関連が考えられる。各トレンチとも墳丘盛土の下にはほぼ水平に堆積しているが、そのレベルは各所により異なる。
- VIII層 地山。基本的には黄褐色の粘質土で、非常に堅く締まっている。第2、第16トレンチでは小礫を多数含んだ川底のような土層である。

(徳田誠志)

2 各トレンチの状況

(1) 南側濠墳丘裾

第1トレンチ(第3図1 図版5-1・2)

後円部背面に主軸を意識して設定した幅2.5m、長さ8mのトレンチである。Ⅱc層、Ⅳb層、VI層、VII層、VIII層を確認した。地山はトレンチ西端から2.2mほど東で平坦から斜面へと変換し、その変換点付近において葺石を検出した。葺石は遺存状況が悪く、根石列とそれに付随する若干の石材が原位置を留めていたに過ぎない。濠側にみられる石材は転落してきたもので、敷石などではない。使用石材は概ね拳大のもので、根石には径0.2～0.4mの大振りなものが用いられている。根石石材のうち橢円形のものは長軸を墳丘斜面に直交させるように置かれていた。根石列の標高はおよそ229.8mで、VII層上面はおよそ231.5mである。

第2トレンチ(第3図2)

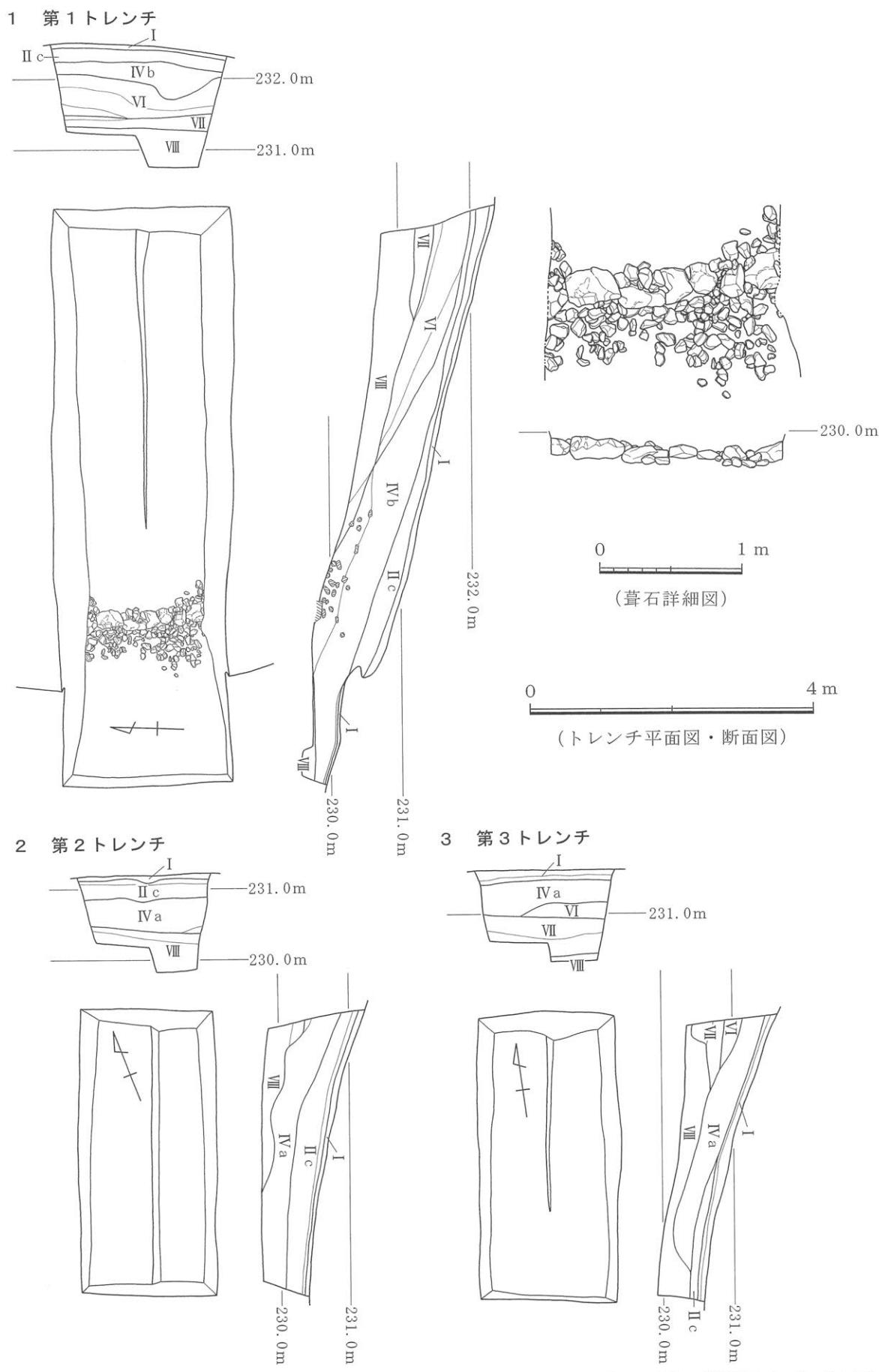
後円部南側の斜面に南北方向を意識して設定した幅2m、長さ4mのトレンチで、Ⅱc層、Ⅳa層、VIII層を確認している。当トレンチにおけるVIII層は砂礫を非常に多く含む層であり、自然河道の存在が疑われる。

第3トレンチ(第3図3)

後円部南側斜面に設定した幅2m、長さ4mのトレンチである。Ⅱc層、Ⅳa層、VI層、VII層、VIII層の各層がみられた。また、断面観察によって弥生時代の遺構と思われる落ち込みを確認した。VII層上面の標高はおよそ230.9～231.0mであり、小礫を多数含んでいる。

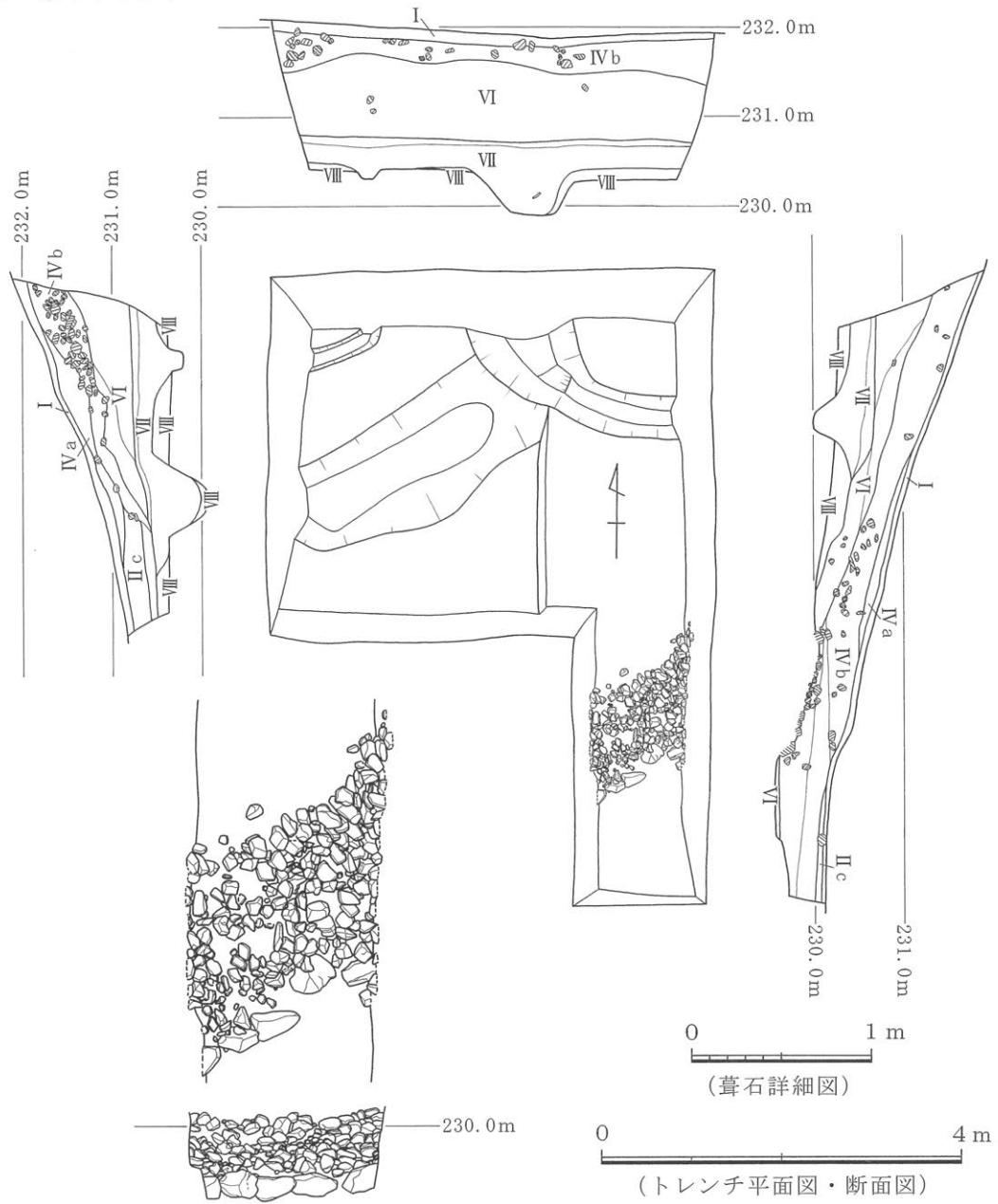
第4トレンチ(第4図4 図版5-3・4)

南側くびれ部に設定したトレンチである。当初は幅4m、長さ5mであったが、東辺の延長線上を濠側に幅1.5m、長さ3mで拡張した。Ⅱc層、Ⅳa層、Ⅳb層、VI層、VII層、VIII層がみられた。拡張部分で葺石を検出したほか、弥生時代の溝状遺構3条を検出している。葺石の石材や用法は第1トレンチと同様であるが、その葺き方は雑然とした印象をうけるもので、濠側へ押し出されている部分もある。根石列をはじめ葺石全体が弧を描いており、当該箇所が後円部の一部であることを示している。溝状遺構はいずれも断面U字状のもので、埋土には弥生土器片が多く含まれていた。トレンチ内での確認にとどまるため、その性格は不明であるが、車塚の坪遺跡の調査事例からして、方形周溝墓の周溝である可能性がある。葺石根石列の標高はおよそ229.6mで、VII層上面はおよそ230.8mである。



第3図 雲部陵墓参考地 トレント平面図・断面図 (1) (1/80) および葺石詳細図 (1) (1/40)

4 第4トレンチ

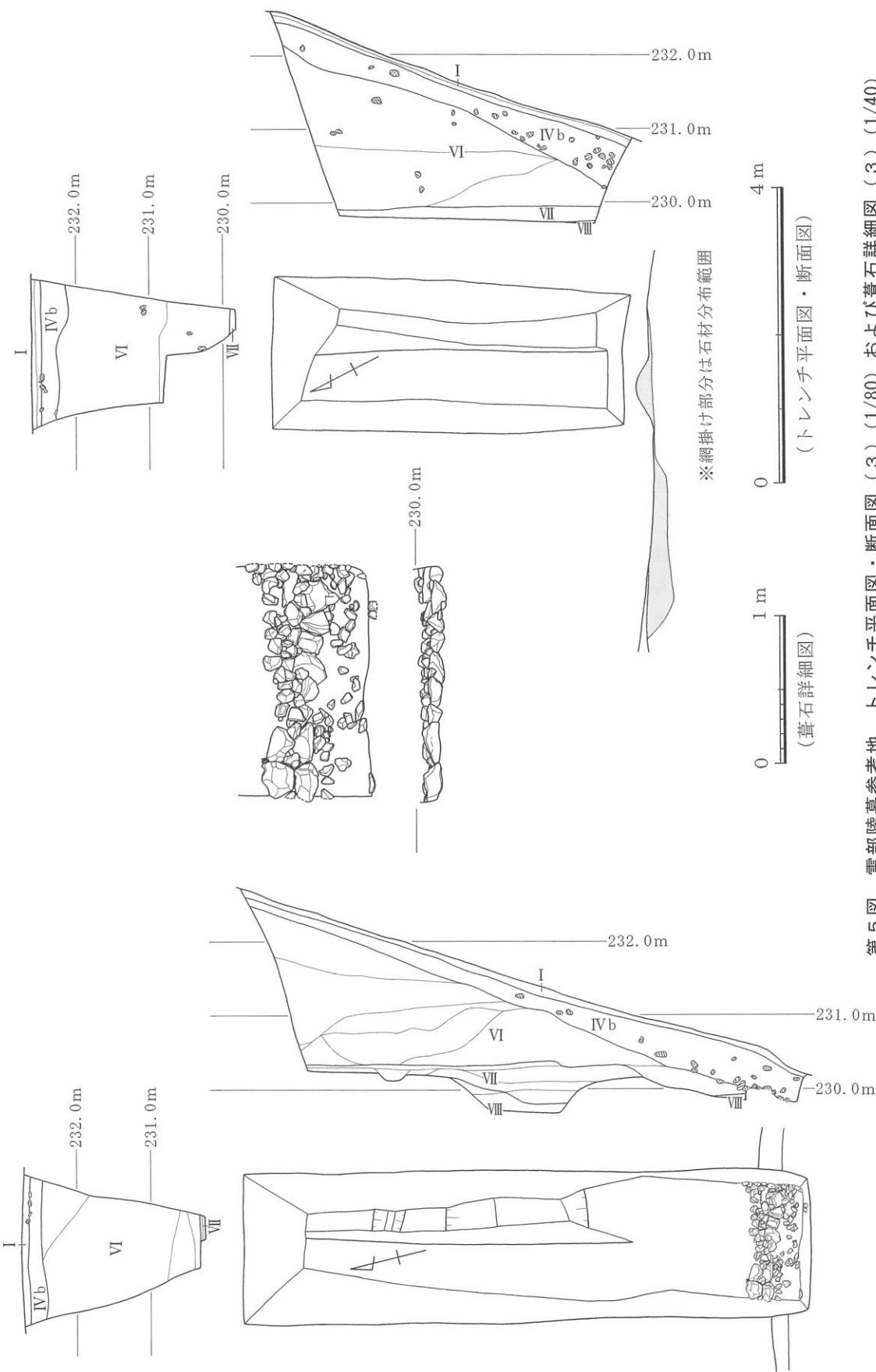


第4図 雲部陵墓参考地 トレンチ平面図・断面図(2)(1/80)および葺石詳細図(2)(1/40)

第5トレンチ(第5図5 図版5-5・6)

前方部南側面のトレンチで、途中で延長したため、幅2m、長さ7.7mとなった。IV b層、VI層、VII層、VIII層を確認している。断面観察によって、①旧地形を削り出しや盛土によって整形、②その縁辺に地山起源と思われる黄褐色系粘質土によって底辺幅3.5m、高さ1m程度の高まりを築き、③背後に砂礫と粘質土を混ぜた土を積むことで高まりを拡幅、④その上にさらに砂礫を多く含む土を積み上げていく、といった墳丘築造過程を復元することができる。南端近くで葺石を検出したほか、弥生時代の遺構を検出している。葺石はここでも遺存状態が悪い。石材や配置の様相は第1トレンチとほぼ同様であるが、根石列の1列後ろにも根石列同様の大振りな石材が用いられている。弥生時代の遺構は溝状の掘り込みであるが、その性格は不明である。葺石根石列の標高はおよそ229.8mであり、VII層上面はおよそ230.2～230.3mである。

5 第5トレンチ



第5図 雲部陵墓参考地 トレンチ平面図・断面図 (3) (1/80) および葺石詳細図 (3) (1/40)

第6トレンチ(第5図6 図版6-1・2)

前方部南側面のトレンチで、幅2m、長さ5mで設定したが、実際の掘削にあたっては濠側を0.2mほど短縮し、長さ4.8mとした。ここでもIV b層、VI層、VII層、VIII層の各層を確認している。墳丘築造過程は第5トレンチと同様で、旧地表上の縁辺に粘質土によって土手状の高まりを築き、内側を暗茶褐色系統と暗黄褐色系統の粘質土を混ぜながら平坦になるまで積み上げ、その上に砂礫を多く含む土を盛るという手順を探っている。なお、当トレンチの前面から西よりにかけての崖線沿いに大振りの石材が多数露出していた。このうち西半部のものは崩落してきたものと判断されるが、東半部のものは石列状を呈しており、他トレンチにおける葺石の検出状況に酷似している。VII層上面はおよそ230.0m。トレンチ前面の石列の標高はおよそ230.1～230.2mである。

第7トレンチ(第6図7 図版6-3)

前方部前面の東南隅角近くに設定したトレンチで、幅2m、長さ6mである。IV b層、VI層、VII層の各層が認められた。断面観察からは、墳丘側に粘質土による高まりが造られたのち、砂礫を中心とする盛土が濠側に積まれたものと想定できる。トレンチ西端から濠側へ1.3mのところで葺石根石列とみられる石列を検出した。この石列はVI層上に載っており、墳裾の根石列ではない。濠側に存在するべき平坦面や埴輪列は検出されていないが、平坦面部分が砂礫主体の盛土であったために早くに流失したものと思われる。葺石根石列の標高はおよそ230.7mで、VII層の上面はおよそ229.7mである。

第8トレンチ(第6図8 図版6-4)

前方部前面に主軸を意識して設定した、幅2m、長さ7mのトレンチである。II c層、IV a層、IV b層、VI層、VII層の各層が認められる。トレンチ中央付近で第7トレンチと同様の石列を検出した。また、深掘部分の底面で弥生時代の遺構と思われる落ち込みの存在を平面的に確認した。現状の墳端付近においてVII層がカットされている状況が観察され、墳端を想起させるが、周囲に葺石材がないことや石列より濠側に存在するべき平坦面や埴輪列が検出されていないことから、このカットは後世の改変によるものと思われる。葺石の状況は第7トレンチと同様で、根石列の標高はおよそ230.9m。VII層の上面はおよそ230.0mで、底面で確認した遺構は未掘である。

第9トレンチ(第6図9)

前方部前面の東側渡土堤根元付近に幅1.5m、長さ5mで設定したトレンチである。掘削部分の大半はII c層であり、上方でIV a層が、下方西端付近でIV b層がわずかに認められるに過ぎない。土層の状況から、かつて大きく削り込まれていた部分を修景したものと考えられる。

(2) 北側濠墳丘裾

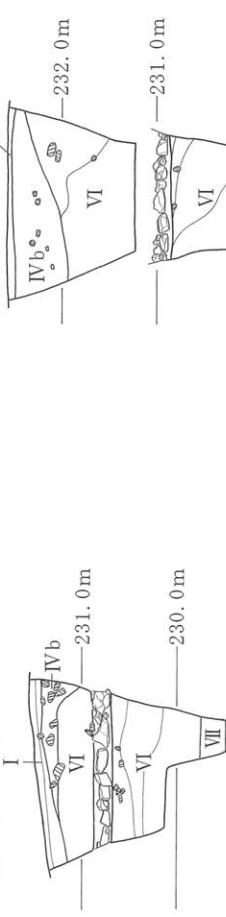
第10トレンチ(第7図10 図版6-5・6)

前方部北側面の東側渡土堤の根元付近に設定したトレンチで、幅2m、長さ5mである。III層、IV b層、VI層、VII層の各層が認められる。III層は崖の上下でみられたが、本来同一層であったものが崩落によって途切れたものであろう。北濠の墳丘裾には多くの石材が散乱している状況が見受けられるが、それらはこのIII層上に位置することになり、墳丘から崩落したものとみるよりも、護岸を目的とした「捨て石」である可能性が高い。崖線のすぐ墳丘よりで葺石を検出した。石材や用法は他のトレンチと同様である。葺石根石列の標高はおよそ230.9mで、VII層の上面は230.4mである。

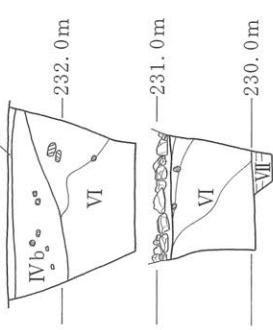
第11トレンチ(第7図11 図版7-1・2)

前方部北側面に設定した幅2m、長さ6mのトレンチである。III層、IV a層、IV b層、VI層の各層が認められた。濠側からおよそ1.5mのところで墳丘側のIV b層が急角度で切られ、一部墳丘を覆うようなかたちでIII層がみられる。III層掘方から墳丘より1mの範囲で葺石を検出した。ここでは他トレンチで根石と判断したような大振りな石の列が2列確認できるものの途中で切れており、かつ、その石列の前にも石材がみられる点が異なっている。こうした状況から、当トレンチでは墳丘斜面の途中を検出したものと考えられる。葺石の標高は濠側の最低部分でおよそ230.4mである。

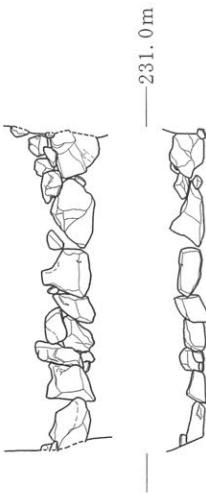
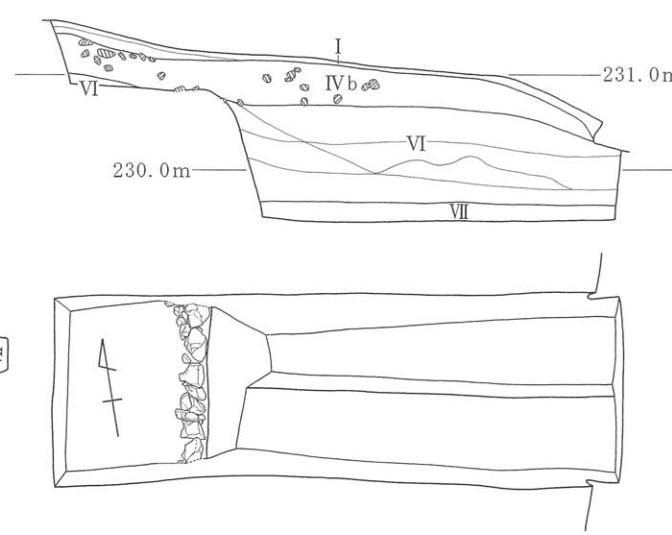
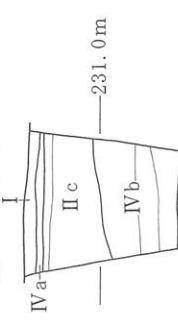
7 第7トレンチ



8 第8トレンチ



9 第9トレンチ



※網掛け部分は
弥生時代遺構
(未掘)

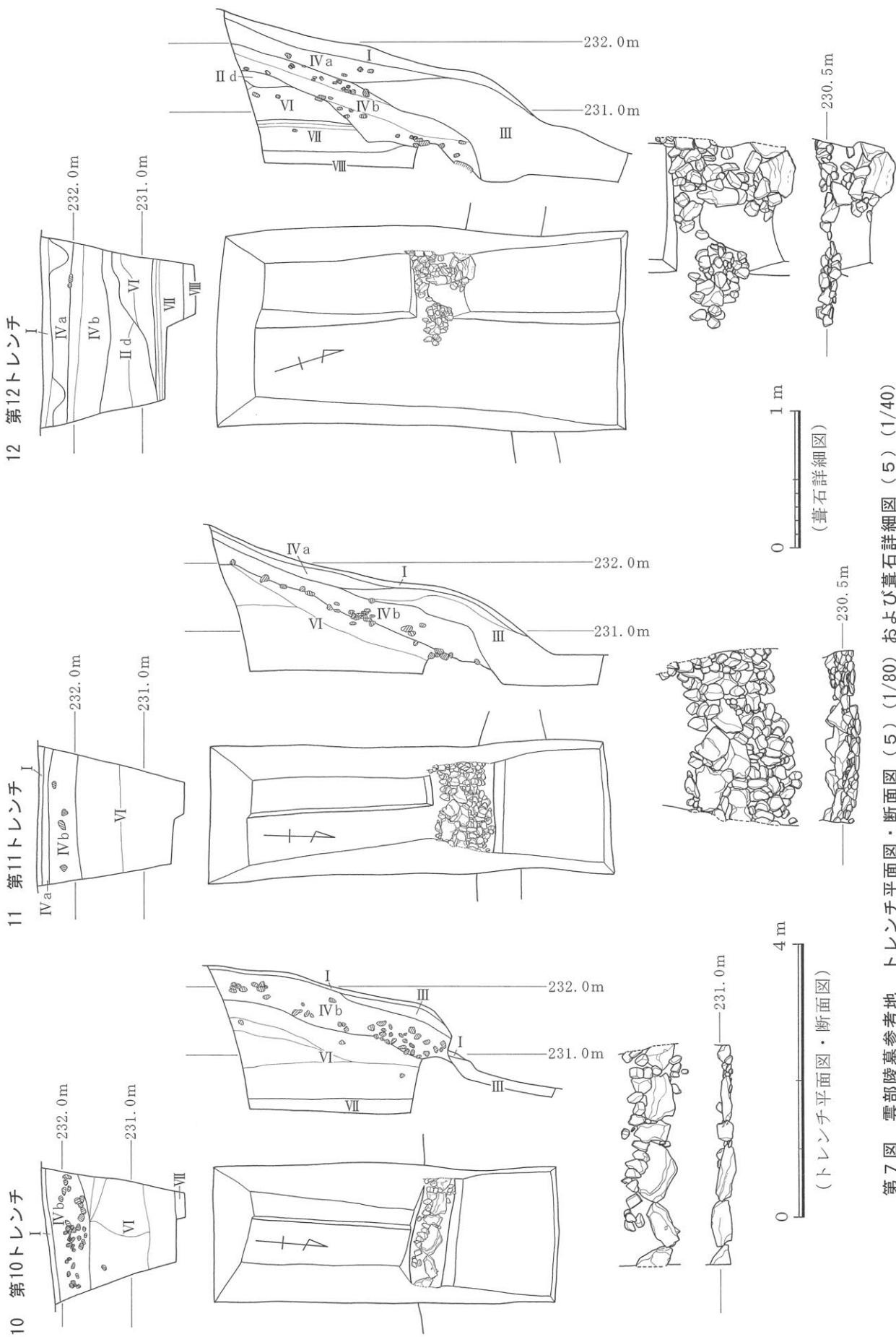


(臺石詳細図)



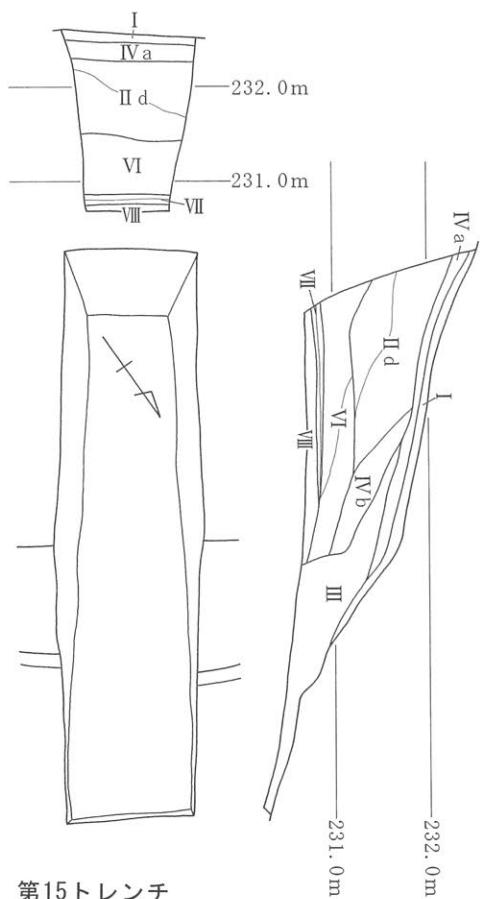
(トレンチ平面図・断面図)

第6図 雲部陵墓参考地 トレンチ平面図
・断面図(4)(1/80)および葺石詳細図(4)(1/40)

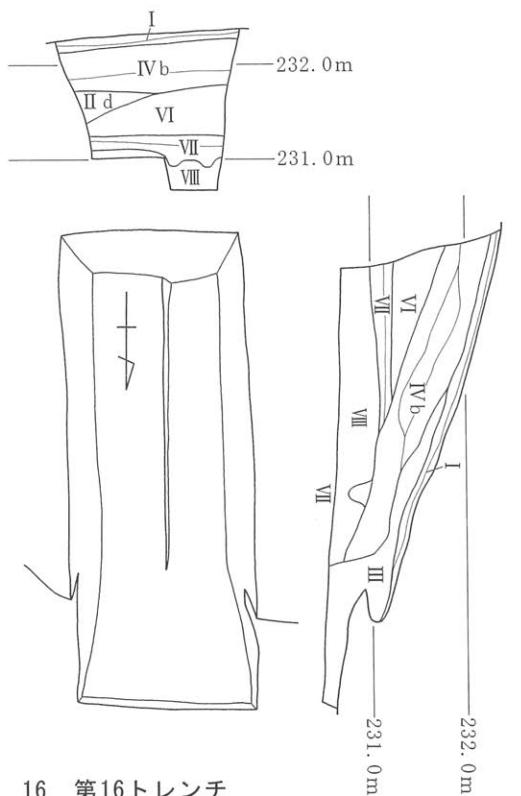


第7図 雲部陵墓参考地 トレンチ平面図・断面図 (5) (1/80) および石詳細図 (5) (1/40)

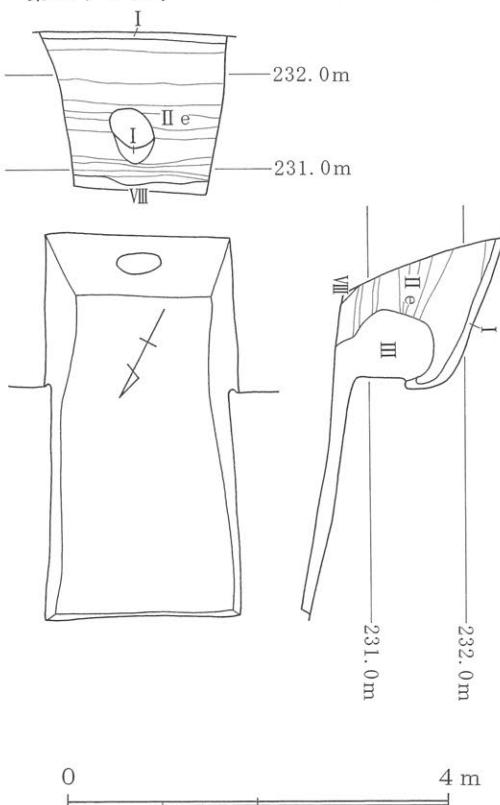
13 第13トレンチ



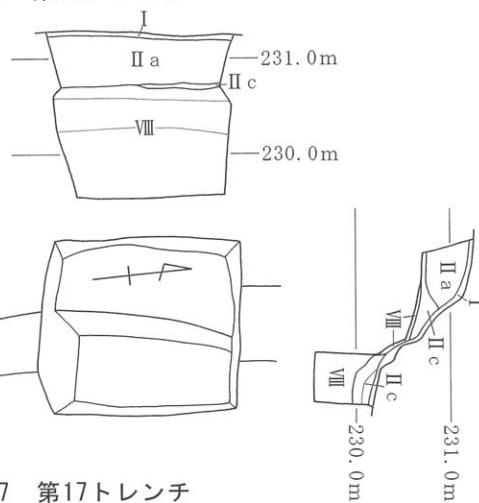
14 第14トレンチ



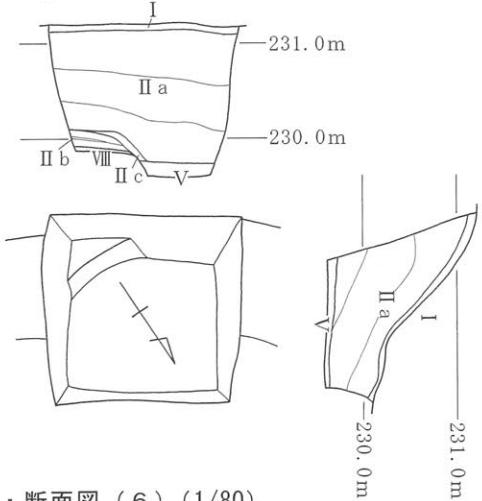
15 第15トレンチ



16 第16トレンチ



17 第17トレンチ



第8図 雲部陵墓参考地 トレンチ平面図・断面図(6) (1/80)

第12トレンチ(第7図12 図版7-3・4)

北側くびれ部付近に設定したトレンチで、幅3m、長さ6mである。Ⅱd層、Ⅲ層、Ⅳa層、Ⅳb層、Ⅵ層、Ⅶ層、Ⅷ層の各層があるが、当トレンチにおける土層の状況は他に比べて複雑である。Ⅷ層上に盛土(Ⅶ層)がなされ墳丘が築造されるが、一度大きく削られ、そこにⅡd層が盛土されている。上方からのⅣb層が堆積したところで、それらを急角度で切り込んでから墳丘側をも覆うようにⅢ層が施されている。なお、Ⅲ層掘方はトレンチ西壁で濠側端からおよそ2mのところにあり、平面的には後円部に沿うように円弧を描いている。トレンチ西辺の中央近くで葺石を検出した。東半はⅢ層掘方に切られており、上方は墳丘が削り取られた時点で破壊されたと思われる。根石は2石検出したが、うち1石は幅60cmの大型の石材が用いられていた。葺き方は全体として乱雑な印象をうけるものである。石材の並びや、Ⅲ層掘方に切られている点などから、当該地点は前方部側にあたるものと考えられる。葺石根石列の標高はおよそ230.0mで、Ⅷ層の上面はおよそ230.9mである。

第13トレンチ(第8図13)

後円部北東側に設定した幅1.5m、長さ6mのトレンチである。Ⅱd層、Ⅲ層、Ⅳa層、Ⅳb層、Ⅵ層、Ⅶ層、Ⅷ層の各層がある。土層の状況は第12トレンチに似ており、墳丘が削り取られた上にⅡd層が盛られ、それらを切り込んでⅢ層が施されている。Ⅷ層上面はおよそ230.9mである。

第14トレンチ(第8図14)

幅2m、長さ5mで後円部北側斜面に設定したトレンチである。ここもⅡd層、Ⅲ層、Ⅳb層、Ⅵ層、Ⅶ層、Ⅷ層の各層が認められる。削られた墳丘上にⅡd層、Ⅳb層がみられ、それらを切り込んでⅢ層がみられる点は第12、第13トレンチと同様である。断面に弥生時代の遺構とみられる落ち込みが複数観察されるが、その性格は不明。Ⅷ層の上面はおよそ231.2～231.3mである。

第15トレンチ(第8図15 図版7-5)

後円部北西側を意識して設定したトレンチで、幅2m、長さ4mである。奥壁中央に存在する穴はヌートリアの巣穴で、その内部の堆積土もⅠ層に含めた。濠側にはⅢ層がみられるが、墳丘側の土層(Ⅱe層)の状況は他のトレンチと大きく異なる。上半部には直径が3cm程度までの砂礫を多く含む土が5層あり、下半部では同様の砂礫を含む層と地山起源と思われる土が互層をなす。巣穴下端のレベル近くに弥生土器を包含する層があるが、以下も互層状となっており、他でⅧ層が互層状になる例がなく同様に扱うのには躊躇する。最下部ではⅧ層を確認できた。参考までに記しておくと、弥生土器を包含する層の上面は231.3～231.5m。なお、ヌートリアの巣穴は水面付近に入口があり、すぐに墳丘方向と西方向の2方向に分岐していた。

(3) 南側濠外堤

第16トレンチ(第8図16)

周濠を挟んで第1トレンチと対応するように設定したトレンチで、幅、長さとも2mである。表土下およそ0.6mまでは締まりのない盛土層(Ⅱa層)で、その下や濠側ではⅡc層が認められる。Ⅱc層の下はⅧ層で、岩盤状に固結した層と砂礫を多く含む層があり、さらにその下に粘質土の層がある。固結した地山は直上で行われた耕作の影響の可能性も考えられる。古墳本来の外堤に伴うと思われるような盛土層、Ⅷ層などはみられなかった。

第17トレンチ(第8図17 図版7-6)

後円部の西南側外方にあたる位置に設定した、幅、長さとも2mのトレンチである。確認された土層は、Ⅰ層直下の締まりのない盛土層(Ⅱa層)、Ⅱc層、青灰色や黄灰色の粘質土が細かい単位で積まれた盛土層(Ⅱb層)、Ⅳ層、Ⅷ層に大別できる。当トレンチの設定箇所は現状と昭和3年測量の地形図とで大きく異なっており、地形図作成後に外堤の改修工事が行われたことがわかる。Ⅱb層は外堤旧状時の盛土、Ⅱc層はそれに被せられた浚渫土、Ⅱa層は改修工事によって方向と高さが変更された現在の外堤を構築する盛土で、Ⅴ層は外堤の方向を変更した際に埋め殺されたものである。本来の外堤に伴うような土層、Ⅷ層とも認められなかった。

(有馬 伸)

3 出土遺物

今回の事前調査で出土した遺物の総数は約3700点である。そのうち埴輪が全体の約8割を占め、残りが須恵器、陶磁器、弥生土器などである。遺物の大半は細片であり、全形のわかるものはないが、できるかぎり図化につとめた。なお、図示した各資料の出土トレンチ・採集位置については、番号脇の括弧内に記した。

(1) 墓輪

埴輪の大半は円筒埴輪であるが、朝顔形埴輪、蓋形埴輪、盾形埴輪、鳥形埴輪などもわずかに確認できる。焼成は、いずれの資料にも黒斑がみられないことから、窯窓によるものと判断される。焼成の仕上がりは、軟質のものから須恵質と呼ばれるような硬質のものまで存在し、その差異は大きい。本参考地の埴輪は当該地域における窯窓焼成導入期のものであり、焼成時の温度管理がうまくいかなかったことを示すのかもしれない。軟質の埴輪については、器壁表面の摩滅が著しいため、調整方法などを良好に確認できる資料は少ない。その一方で、硬質のものは調整方法が観察しやすいため、硬質なものの割合が図化したものの中では多くなっている。なお、形象埴輪には軟質で断面が黒色となるものが多く(55、56、58、60は除く)、そうしたものは今のところ円筒埴輪で確認できていない(写真1、2)。また、形象埴輪で須恵質と呼ばれるような仕上がりのものは今のところ確認できていない。

胎土は非常に粗いものが多く、径2mm以内の石英や長石を多く含み、チャートなどそのほかの鉱物も少し含む。どの資料も含まれる鉱物の組成は変わらない印象をうけるが、断面で鉱物を確認できるものの、器壁表面ではあまり確認できないものが少量存在する。

色調は青灰色、橙色、黄白色など多様であるが、基本的には橙～黄白色系のものが多い。須恵質で青灰色のものは全体の1～2割ほどであろうか。なお、赤色顔料の塗布は現状ではほとんど確認できない。

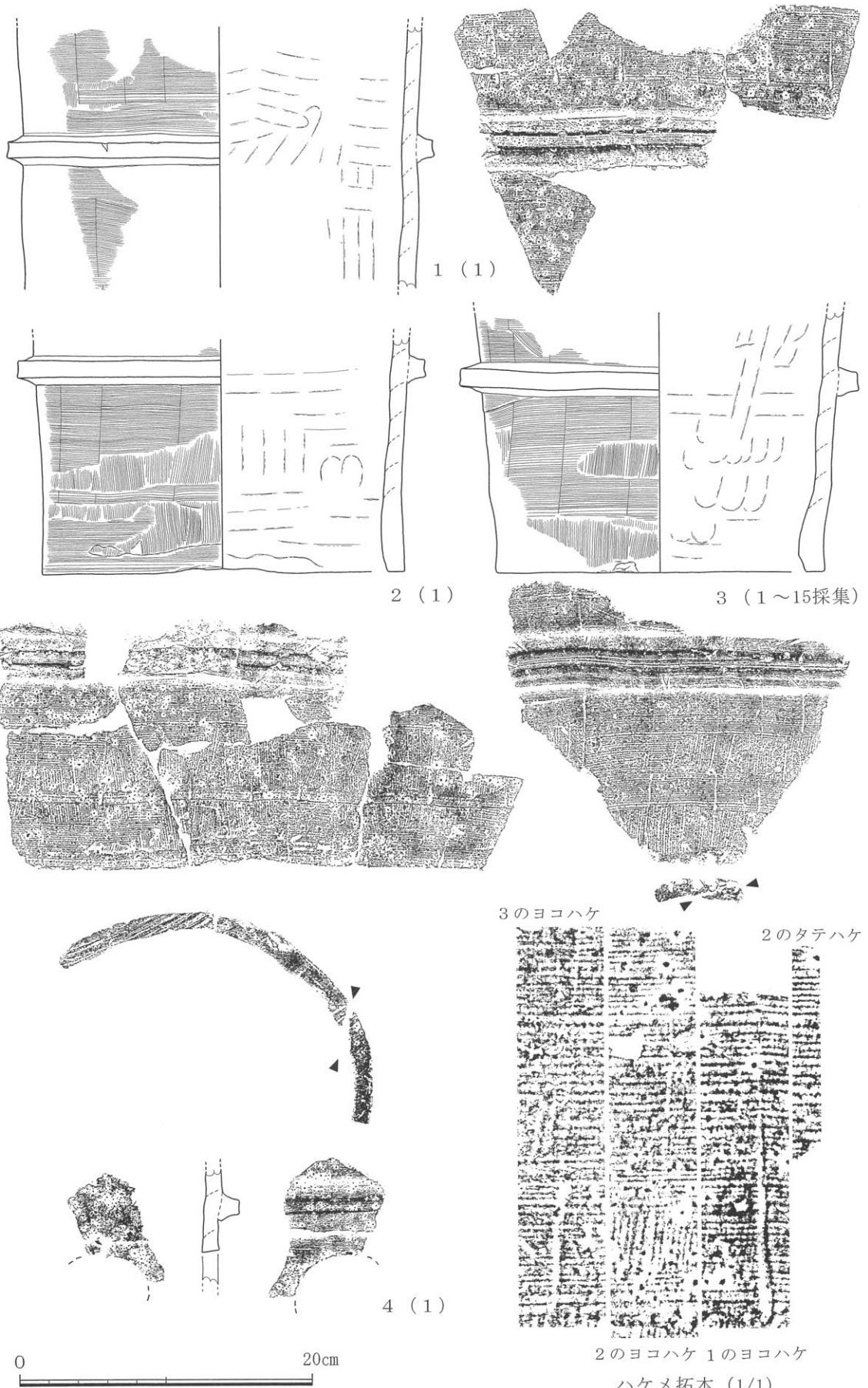
円筒埴輪(第9～17図)

1、2は接合しないものの、同じトレンチから出土していること、突帯形状、ハケメ、須恵質であることなどから判断して、同一個体と考えられるものである。1は突帯を1条含む破片である。外面調整はタテハケの後にヨコハケである。ハケ原体よりも突帯間隔が長かったらしく、ヨコハケは複数回ほどこされている。上段では図中の突帯の上辺にハケ原体の下端をあわせてヨコハケを施した後に、その上にあったであろう突帯の下辺にハケ原体の上端をあわせて最終的にB種ヨコハケを施したものと思われる(写真3)。また、外面には突帯の上辺以外のすべての面に自然釉が付着している。内面調整はナデで、自然釉が流れたとも思える一筋の痕跡が確認できる(写真4)。2は第1～2段の破片で、底径は約25cm、底部高は約14.5cmである。第1段外面はタテハケの後に上端を第1条突帯の下辺にあわせるかたちでB種ヨコハケを施している。ハケ原体の幅は約8.5cmであることがわかる。また、粘土を積み上げていく過程で自重により基部がひずんだのを修正するためか、下端を接地面にあわせるかたちでヨコハケを施している(写真5)。外面には一部に自然釉が付着している。内面は丁寧なナデ調整である(写真6)。底面には作業台の痕跡とも思われる同一方向に走る圧痕や、自然釉が付着している(写真7)。

3は第1～2段の破片で、底径は約22.5cm、第1段高が約14cmである。突帯形状やハケメが一致することから1、2と極めて近しい関係にある別個体である。焼成は須恵質に仕上がっている。第1段外面にはタテハケの後にB種ヨコハケが施されている。ハケ原体の幅は約8.5cmである。2でみられたような下端を接地面にあわせるようなヨコハケはこの個体ではみられない(写真8)。第2段外面にもB種ヨコハケが施されているが、1と同様にハケ原体よりも突帯間隔が長かったらしく、第1条突帯の上辺にハケ原体の下端をあわせてB種ヨコハケを施した後に、第2条突帯の下辺にハケ原体の上端をあわせてB種ヨコハケを施しているようである(写真9)。内面には丁寧にナデを施している。

4は1、2と同じトレンチ出土で、焼成も須恵質に仕上がっていることなどから、1、2と同一個体となる可能性がある。円形の透孔が穿たれている(写真10)。

5は突帯を1条含む破片で、突帯直上での径は約24cmである。外面調整はタテハケの後にB種ヨコハケであるが、比較的多くの凹凸が器壁にあるため、凹んでいる箇所ではタテハケが消されずに残っている(写真



第9図 雲部陵墓参考地 出土品実測図 (1) 円筒埴輪 (1/4)

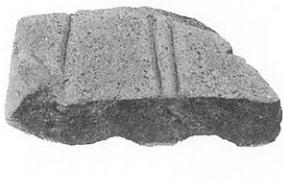


写真1 蓋形埴輪（54）の断面



写真2 円筒埴輪（9）の断面

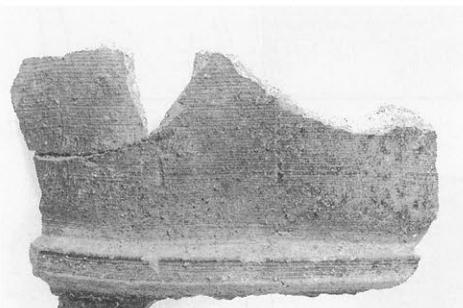


写真3 1の外面



写真4 1の内面（自然釉）

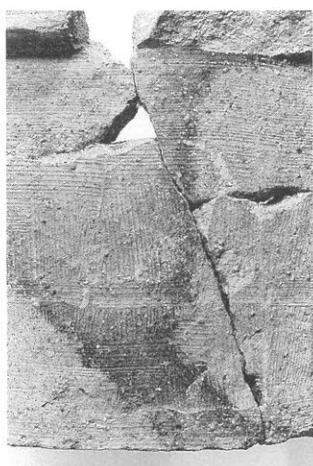


写真5 2の外面



写真6 2の内面



写真7 2の底面



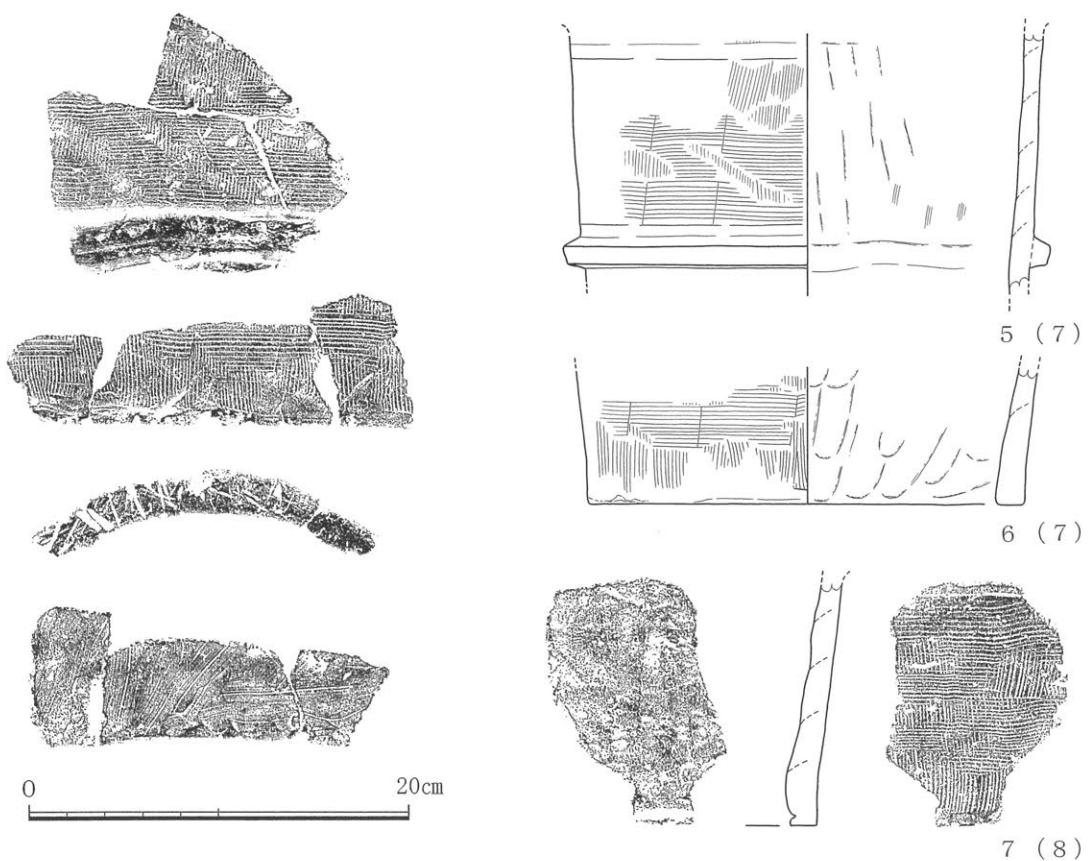
写真8 3の外面（第1段）



写真9 3の外面（第2段）



写真10 4の外面



7のヨコハケ



写真11 5の外面

写真12 6の内面



ハケメ拓本 (1/1)



写真13 7の外面



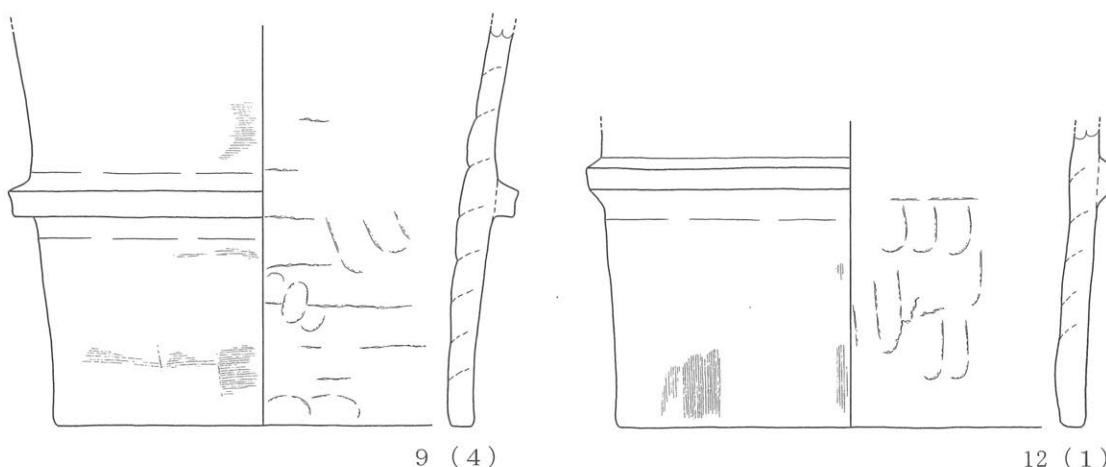
写真14 7の内面

第10図 雲部陵墓参考地 出土品実測図 (2) 円筒埴輪 (1/4)



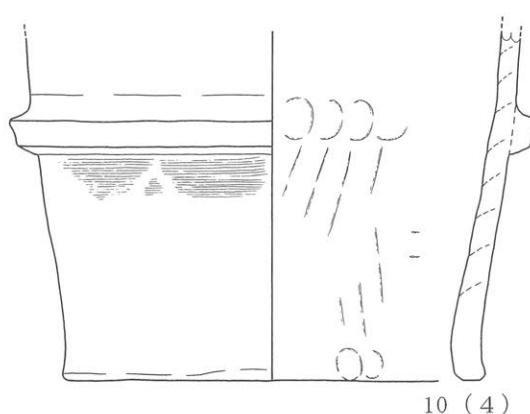
8 (●地点)

11 (4)



9 (4)

12 (1)



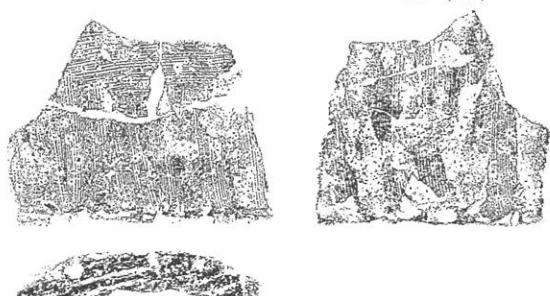
10 (4)



写真15 13の内面

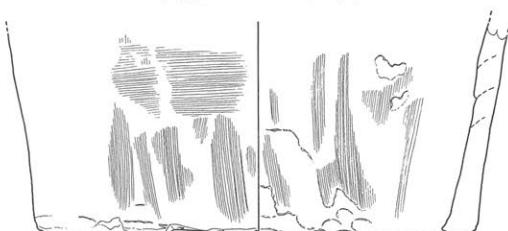


写真16 13の底面



0

20cm



13 (11)

第11図 雲部陵墓参考地 出土品実測図 (3) 円筒埴輪 (1/4)

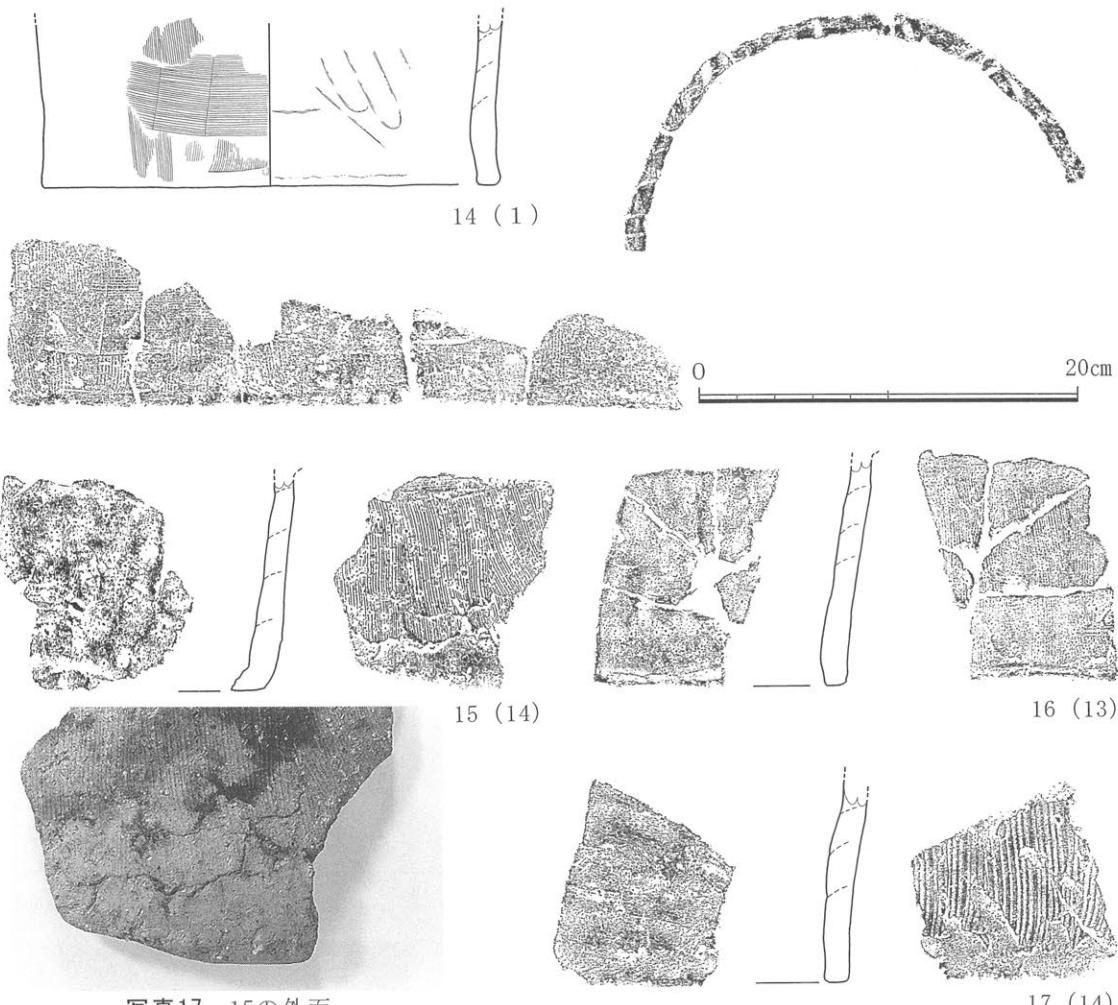


写真17 15の外面

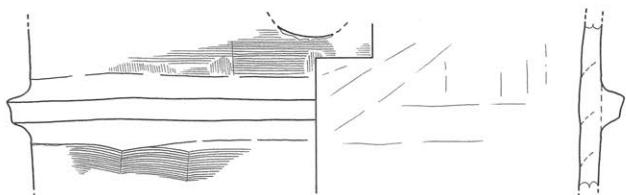
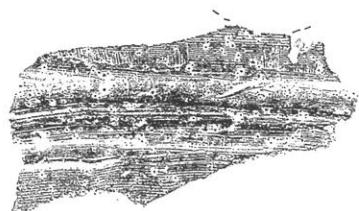
第12図 雲部陵墓参考地 出土品実測図 (4) 円筒埴輪 (1/4)

11)。内面調整はタテハケの後にナデを丁寧に施しており、ハケはあまり観察できない。6は5と同一トレンチ出土で、色調やハケメも一致することから同一個体と考えられる。底径は約23cmである。外面調整はタテハケの後にヨコハケである。内面調整は丁寧にナデを施しているが、不明擦痕を伴っていることが特徴的である(写真12)。

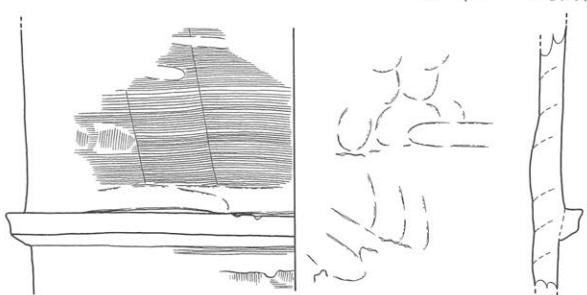
7は5、6とハケメが一致する個体である。なお、ハケメはヨコハケの場合、天地が逆となって一致する。外面調整はタテハケの後にヨコハケである。最下部では横方向の擦痕がみられるが、突帯設定に伴うもののかは不明である(写真13)。内面調整はやや乱雑なナデで、成形時の痕跡を残しており、基部は自重でややゆがんでいる(写真14)。

8～17は底部を含む破片で、底径はおおよそ22～25cmでまとまり、第1段高は14cm前後でまとまっている。ただし、9の第1段高は約12.5cmとほかに比べてやや低くなっている。

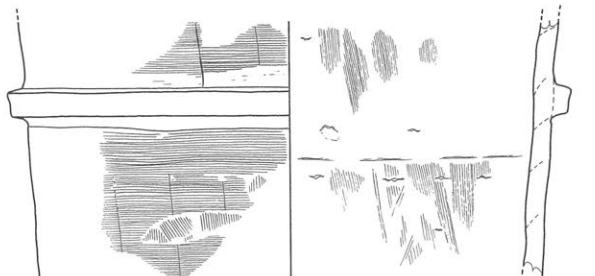
8は後円部墳頂における樹木の根起き箇所(第2図●地点)で回収したものである。今回報告する埴輪の中でほぼ原位置を保つ唯一の資料であるが、焼成の仕上がりは軟質で器壁の調整などを観察することは困難である。9は幅2～3cmの粘土紐を下から積み上げて成形しているようである。なお、9は48、52の朝顔形埴輪口縁部と同一個体の可能性がある。11は摩滅が著しいものの、外面にはタテハケの後にヨコハケを施していることが観察できる。底面付近で横方向の擦痕がみられるが、ハケなのかそれとは別の痕跡なのかは判断がつかない。13は内面最下部に指頭圧痕がみられる(写真15)。指頭圧痕の付き方から判断して、これは底面



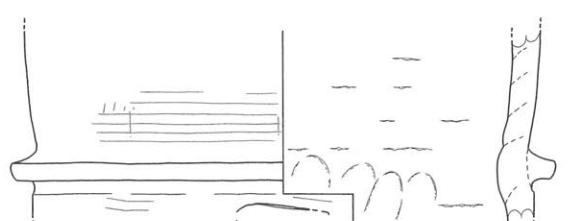
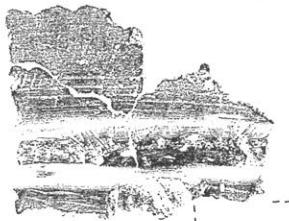
18 (1~2採集)



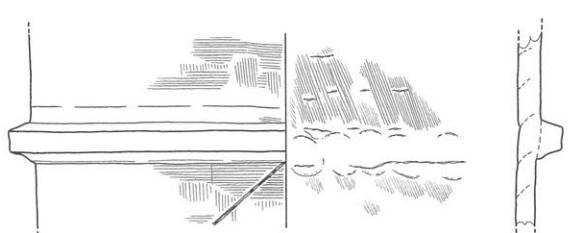
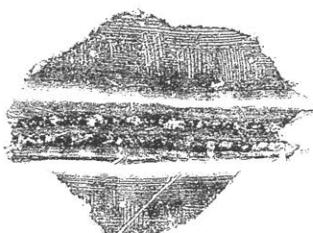
19 (1)



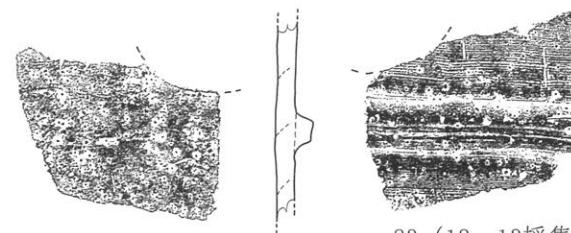
20 (4)



21 (8)



22 (12~13採集)

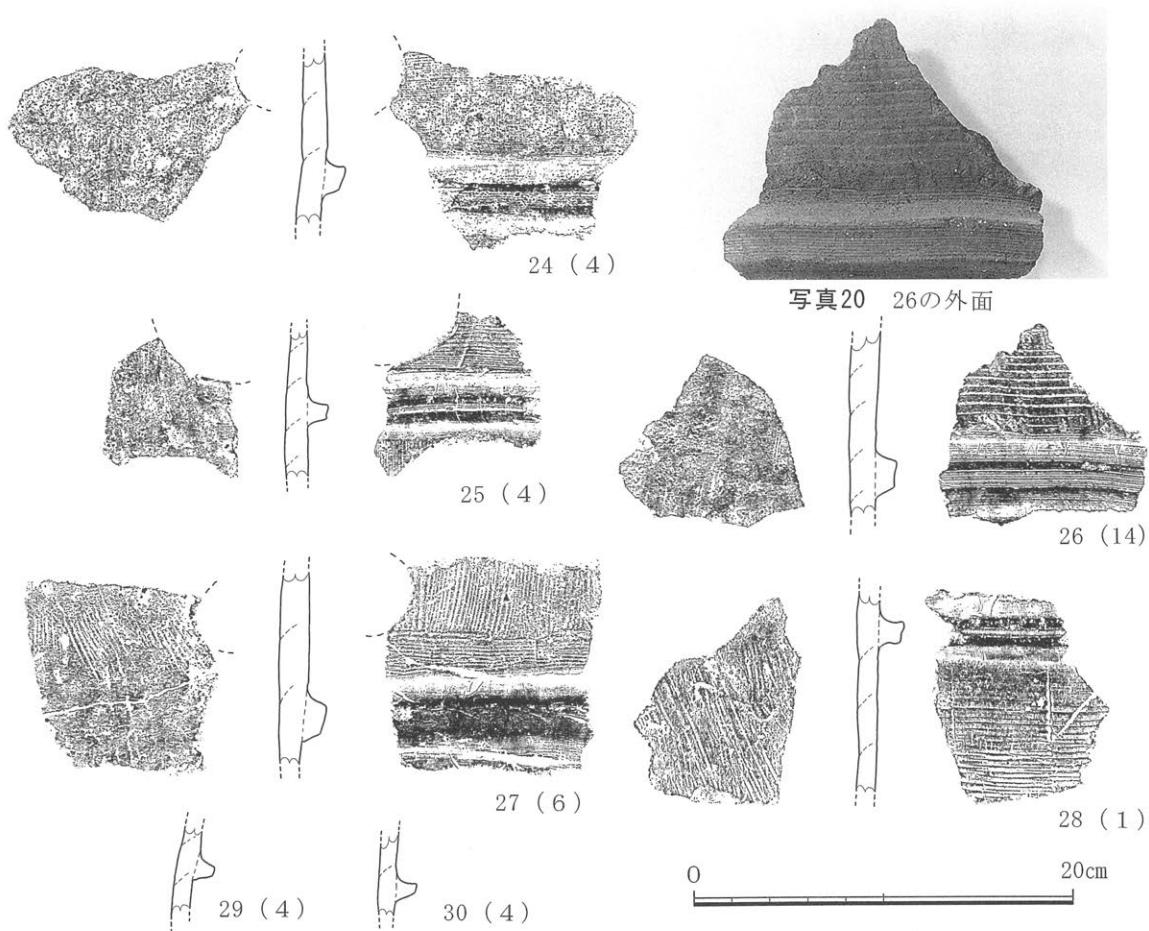


23 (12~13採集)

0 20cm

写真19 23の外面

第13図 雲部陵墓参考地 出土品実測図 (5) 円筒埴輪 (1/4)



第14図 雲部陵墓参考地 出土品実測図 (6) 円筒埴輪 (1/4)

を手のひらにのせるようにして両手で埴輪を持ち上げる際に、この部分に指を引っ掛けた痕跡だと思われる。また、底面には2に似た同一方向に走る圧痕や一部を削った痕跡がみられる(写真16)。15や17では外面調整が最下部におよんでいない点が特徴的である(写真17)。15のタテハケは13のヨコハケとハケメが一致するが、他の要素で一致する点はみあたらない。なお、13、15のハケメは44のハケメと一致する(第17図参照)。

18～30は突帯を含む胴部の破片である。径の復元できたものは概ね27～30cmでまとまっている。突帯の形状にはさまざまなバリエーションのあることがわかるが、やや大きめな18や22や23のような形状が多くみられる。また、ハケメも細かいものから粗いもの(21や26)まであるが、粗いものの割合は少ない。透孔の大半は円形であるが、21は上辺が突帯と平行になっているので、半円、方形、逆三角形のいずれかであろう。

31～34は突帯剥離部の破片である(写真21～24)。31～33では突帯設定の凹線がみられる。凹線の幅はどれも約1cmである。33では凹線のほかに刺突にもみえる痕跡があるが、ただの傷かどうか判然としない。34では突帯設定の沈線あるいは凹線の角の部分とも思える痕跡が残っている。

35～43は線刻のある破片である。35～37はおそらく最上段の破片だと思われる。41は胎土に含まれる鉱物が非常に少なく、他の円筒埴輪とはやや異質で、どちらかといえば形象埴輪に近い印象をうける。

44～47は口縁部の破片である。細かい差異はあるものの、基本的に口縁部は屈曲させている。先にも述べたように、44のハケメは13、15と一致する。

朝顔形埴輪(第18図)

48～53は朝顔形埴輪の破片である。先にも述べたように9と48、52は同一個体の可能性がある。48は普通の朝顔形埴輪と比較して2次口縁部の立ち上がりがやや急であり、1次口縁部の形状も特徴的である。50はいちおう朝顔形埴輪としたものの、違和感もおぼえる。焼成の仕上がりは断面が黒色であり、形象埴輪と

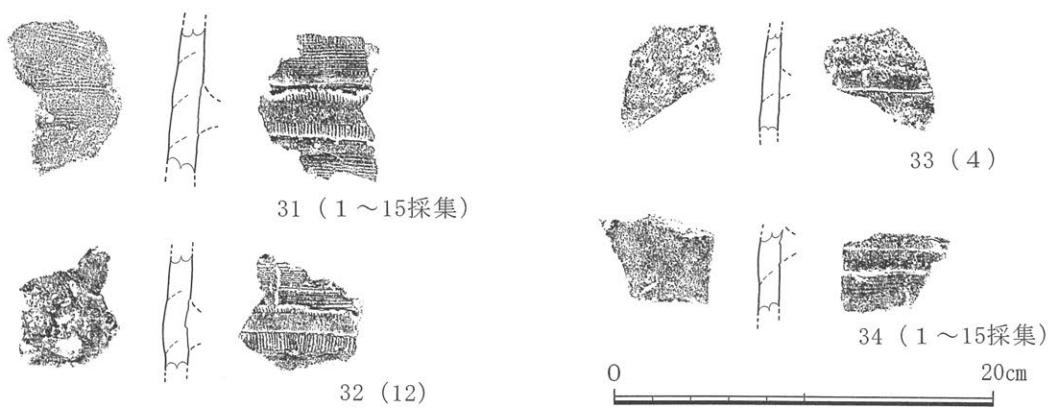


写真21 31の突帶剥離箇所

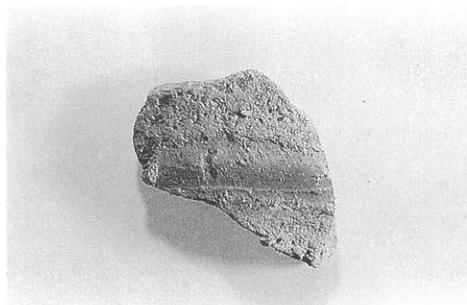


写真23 33の突帶剥離箇所



写真22 32の突帶剥離箇所

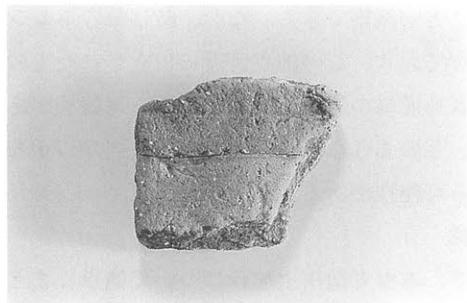


写真24 34の突帶剥離箇所

第15図 雲部陵墓参考地 出土品実測図 (7) 円筒埴輪 (1/4)

同じである。51、52は頸部の破片で、どちらも突帶を持つ。53は肩部の破片である。

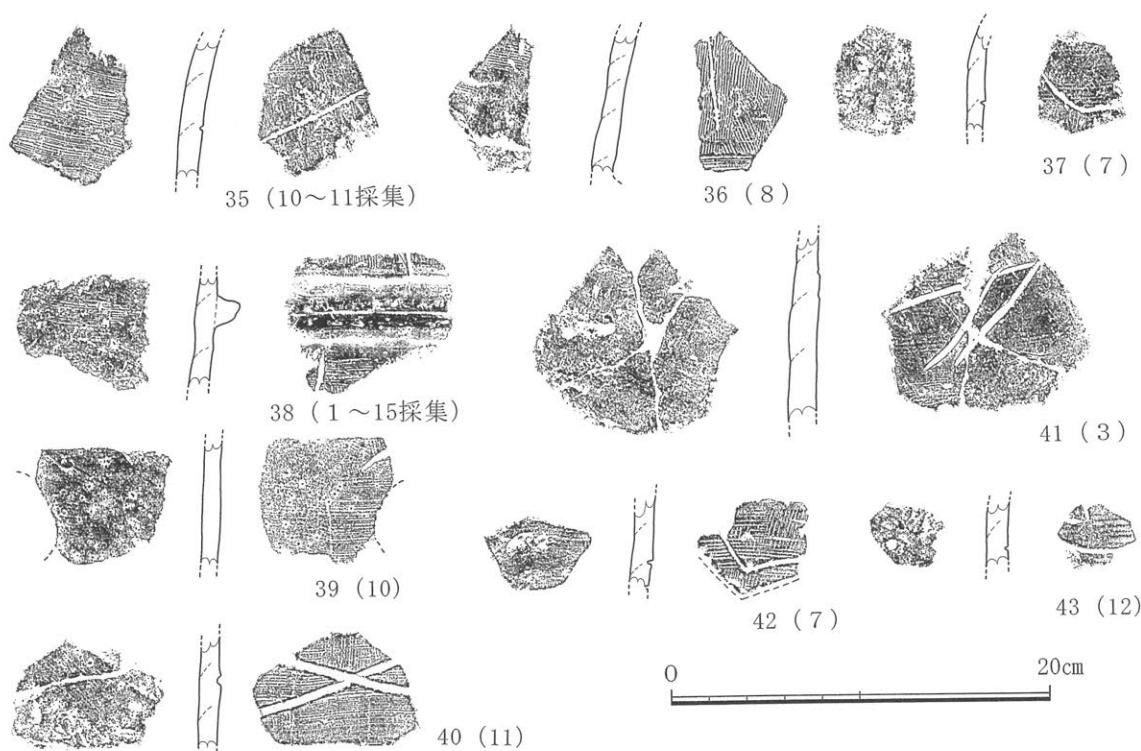
形象埴輪(第19・20図)

54～59は蓋形埴輪の破片である。54、55は立飾部の破片で、55ではソケット状に差し込む筒状の部分もみられる。56は立飾部をうける受口部分の破片だと思われる。57は笠部から受部へと屈曲する部分の破片だと思われる。58、59は笠部の破片で、どちらも2本1組の線刻により区画されている。

60～65は盾形埴輪の破片である。60～62は鋸歯文のある盾面部分の破片である。63では外周を区画する1条の線刻しかみられない。64は円筒部本体から盾面が剥離している部分の破片である。65は鋸歯文と剥離面があることから盾形埴輪としたものの、別の種類の形象埴輪である可能性もある。剥離部分で径7mmほどの小孔が貫通していることが特徴的である。

66は鳥形埴輪の羽根部の破片である。おそらく左羽根になるものと思われる。筒状の台部へ接合する際に、現状では2箇所で部分的に粘土塊を充填していることがわかる。

67は四足動物の脚ではないかと思われるが、家形埴輪などの可能性もある。粘土板を筒状に丸めて成形し



第16図 雲部陵墓参考地 出土品実測図(8) 円筒埴輪(1/4)

ていることが観察できる。なお、67は第5トレンチ北西の墳丘斜面で採集したもので、完全に遊離した状態で転がっており、この地点付近に樹立されたものかどうかは不明である。

68は家形埴輪の屋根部の破片となる可能性があるが、断定はできない。69は形象埴輪であることは間違いないが、どのようなものになるのか見当がつかない。器壁が非常に厚いことなどを考えると、家形埴輪の部材となる可能性がある。

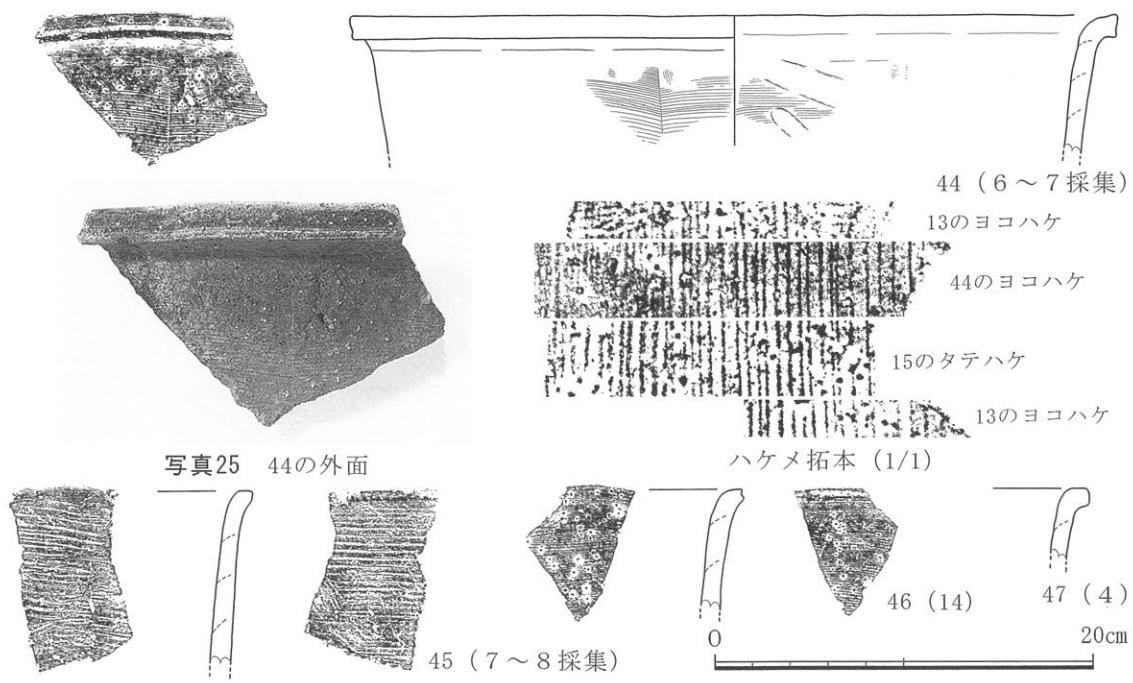
小 結

ここで、本参考地出土埴輪について簡単にまとめておきたい。

円筒埴輪の法量は、突帯間隔のわかる資料がないものの、底径が22~25cm、第1段高が14cm前後でまとまる。全形を復元できる資料がないので想像の域をでないが、底径から判断して3条4段構成となるのかもしれない。突帯形状や調整方法など細かな差異はあるものの、巨視的にみれば複数グループを抽出できるような状況ではなく、基本的には1つのまとまりとして考えられる資料群であろう⁽¹⁰⁾。法量がまとまることもこれを裏付ける。外面調整方法は第1段を除けば、基本的にタテハケの後にヨコハケ(B b種あるいはB c種ヨコハケ)である。

形象埴輪では、蓋形埴輪、盾形埴輪、鳥形埴輪が確実に存在し、脚を持つ動物埴輪や家形埴輪の存在が推測される。出土位置の傾向は後円部およびくびれ部に集中することを指摘できる。また、注目されるのは円筒埴輪の焼成の仕上がりと比べて、形象埴輪の焼成の仕上がりが軟質で断面が黒色となっていることである。このことが即、形象埴輪と円筒埴輪とで製作者集団が異なることを示すものではないと思われるが、円筒埴輪に比べて大きくなる形象埴輪の焼成は同じ窯だとしても円筒埴輪とは異なる環境であったことを示すかも知れない。似たような状況は、京都府綾部市所在の私市円山古墳でも報告されており⁽¹¹⁾、円筒埴輪の形状などがやや類似する点もあわせて興味ぶかい。

これまで、本参考地の埴輪はその実態が不明であったが、今回の出土品によりその内容をある程度知ることができた。まず、焼成はすべて窯窓によるものであることが確認できた。これは、当該地域における窯窓



第17図 雲部陵墓参考地 出土品実測図 (9) 円筒埴輪 (1/4)

焼成の端緒となるものである。また、副葬品から判断して、甲冑における鉄留技法導入期の古墳という評価がこれまでなされていた感があるが、それよりはやや時期が下ることが埴輪から推測される。須恵器でいえばON46型式段階頃であろうか。本参考地の埴輪は、副葬品や墳丘形態との組み合わせなども含めて窯窯焼成導入期の埴輪として今後の良好な資料になると思われる。

(2) 須恵器(第21図)

本参考地出土の須恵器は少なくとも2群に大別できる。1つは本参考地築造時のもの(70~78)で、もう1つは築造以後のもの(79、80)である。色調はいずれも灰色であるが、77はやや白味がかっている。胎土は埴輪とは異なり、いずれも密で白色の鉱物をわずかに含むのみである。

70は類例にとほしいが低脚器台の脚部であろうか。須恵器にしては大きな円形の透孔が穿たれている。71、72は器台の脚部で、方形の透孔が穿たれている。72では窓の構築材とも思える発泡した固体が付着している(写真31)。75、76は器種不明であるが、これまで挙げたものと比べれば細かい波状文が施されている。なお、こうしたものは本参考地出土須恵器の中では少数である。77は甕の口縁部である。口縁端部付近外面の突起は粘土紐を貼り付けて作っているようである。78は甕の胴部である。外面には平行タタキが施され、内面は丁寧なナデが施されている。断面の色調は赤紫色である。

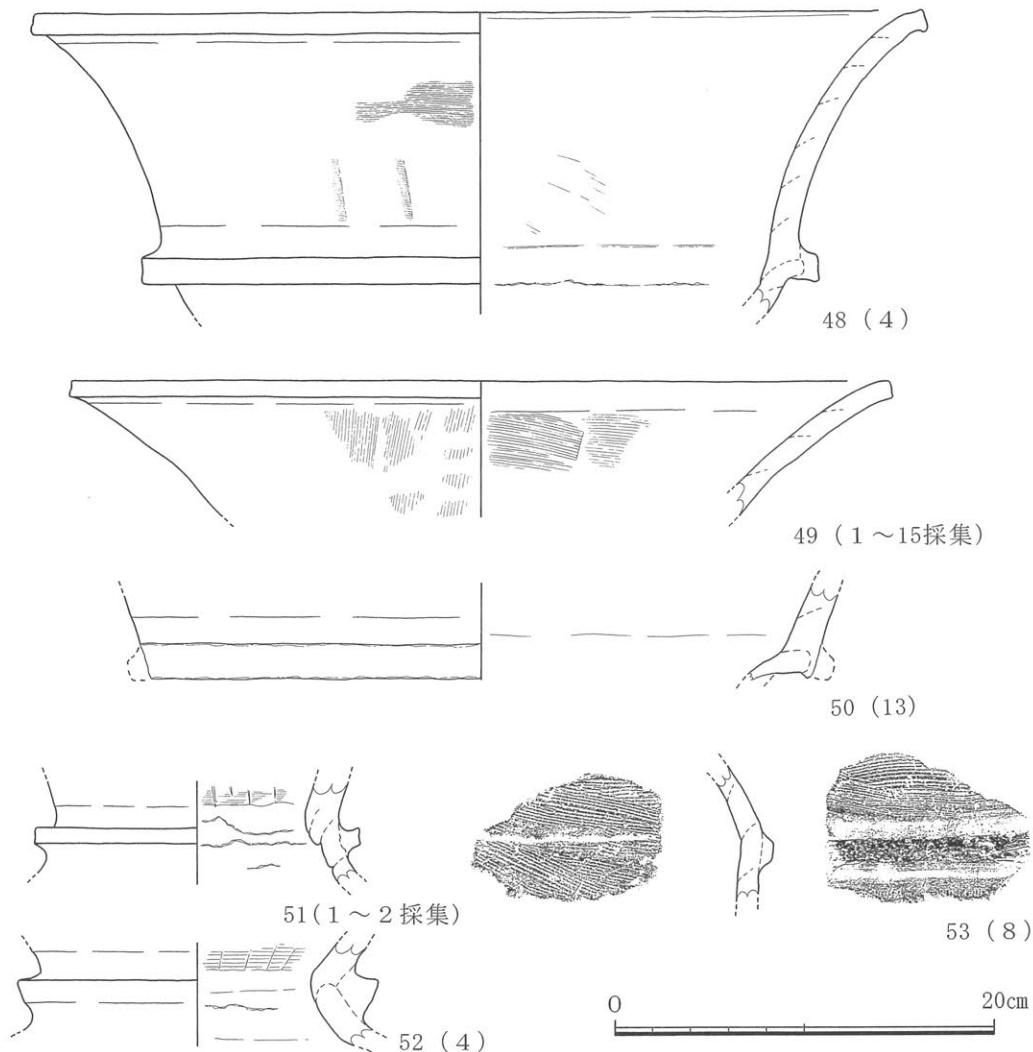
79は甕の胴部である。内面には青海波文が消されずに残っている。80は底部の破片であるが器種は杯であろうか。高台は粘土紐を貼り付けて作っている。高台の接地面には、乾燥時の接着を避けるためか、棒状のものの上に置いたかのような痕跡を4箇所確認できる。

(3) 中近世遺物(第22図)

81は瓦器椀の破片である。丹波型とされる範疇のもので、13世紀末~14世紀頃のものであろうか。82は丹波焼の擂鉢である。83、84も丹波焼の甕あるいは壺の胴部である。83の内面には自然釉が付着している。84は内面に釉がかけられており、82、83よりは時期の下るものである。85は三田焼の青磁の破片である。内面には施釉前の暗文が施されている。86は片口の破片である。外面下部と内面の受口部は施釉されていない。

このように、中世や近世の段階においても本参考地あるいはその周辺で何らかの活動が行われていた痕跡が確認できる。

(加藤一郎)



第18図 雲部陵墓参考地 出土品実測図 (10) 朝顔形埴輪 (1/4)

(4) 古墳築造以前の遺物(第23図)

古墳築造以前のものと認められる遺物のほとんどは弥生土器で、ほかには弥生時代の石器1点と縄文土器片1点がある。いずれも細片であることに加え摩滅が著しいが、図化にあたってなるべく復元径を求めるようにしたため、径や傾きなどが誤っている可能性があることをあらかじめお断りしておく。

87は縄文土器である。晩期後半の深鉢の口縁部で、表面は丁寧に研磨されているが、内面には粘土紐の接合痕が残る。88~100が弥生土器になる。88は甕の口縁で、口縁端部に刻み目、口縁部直下に1条の沈線を確認できる。前期末から中期初頭にかけてのものと思われる。壺の底部と思われる95も近い時期のものであろう。外面にはミガキ、内面にはハケメが認められる。89は端部をつまみ上げた甕の口縁で、中期前半のものと思われる。90~92は同じく中期前半の壺の口縁で、肥厚された端部上端に刻み目を持つもの(90)、端面に羽状文を持ち、内面に瘤のある突帶を持つもの(91)、端面に2個1組の円形浮文を持ち、内面に扇形文を持つもの(92)などがある。93、94は端部を内側に肥厚しており、中期前半の鉢の口縁部と思われる。93は口縁部の外面上端に刻み目があり、94は口縁部直下に指頭押圧突帶が巡っている。底部のうち、96~98は甕、95、99は壺のものと思われる。96は赤く変色しており2次焼成をうけたものと考えられるが、同様の変色はほかの破片でも認められる。98は底部輪台技法を用いていると思われ、後期のものと考えられる。100は高杯の柱状部で、中実である。これも後期のものであろう。101は大型蛤刃石斧で石材は砂岩系である。

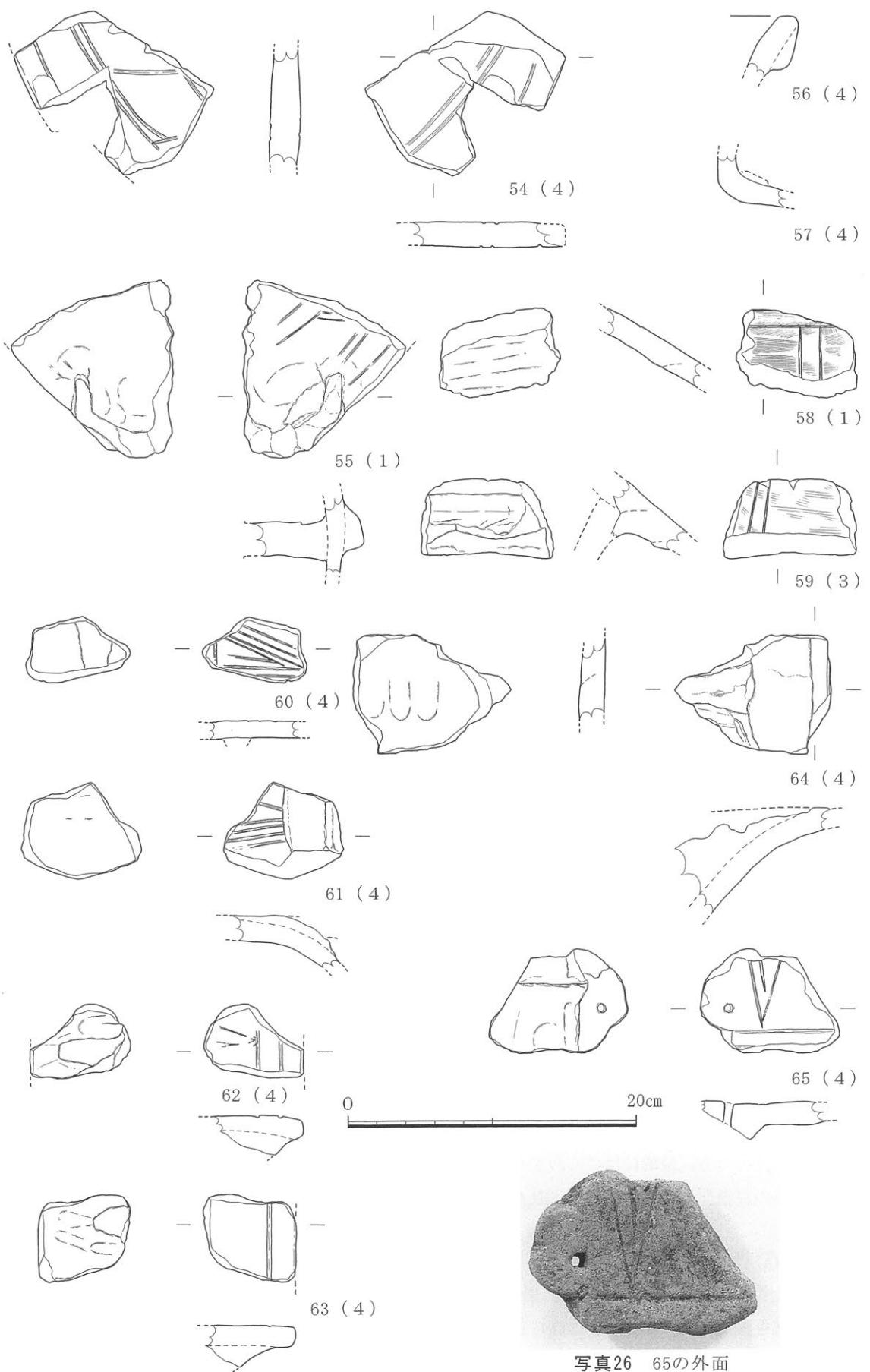


写真26 65の外面

第19図 雲部陵墓参考地 出土品実測図 (11) 蓋形埴輪・盾形埴輪 (1/4)



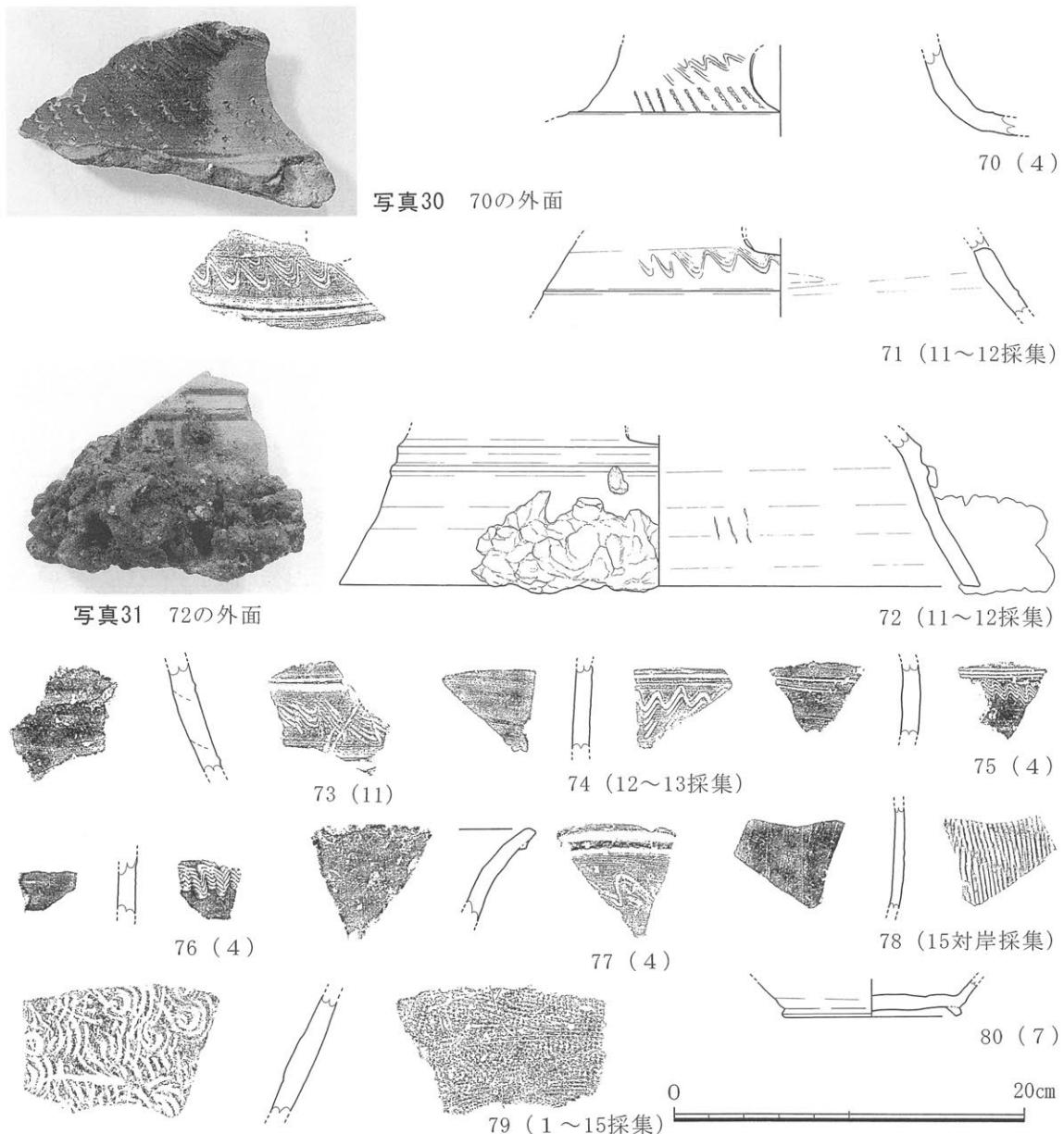
第20図 雲部陵墓参考地 出土品実測図 (12) 形象埴輪 (1/4)

弥生土器は中期のものを主体とするが、凹線文を施すものは認められず、中期でも前半に位置づけられるものと思われる。車塚の坪遺跡も同様に中期前半を主体としており、遺跡の範囲が当参考地内にまで拡がるものといえよう。一方、量的にはごくわずかながらも縄文時代晩期や弥生時代前期、後期の遺物が含まれており、同遺跡の存続期間が従来の想定よりも長いものであった可能性も指摘できる。

(有馬 伸)

4 墳丘の復元

既に述べたように第1、第4、第5、第7、第8、第10~第12の各トレンチ、および第6トレンチ前面において葺石を検出した。そこで、これらと今回新たに作成した墳丘測量図とを手掛かりとして、当参考地の墳丘形態の復元を試みたい。

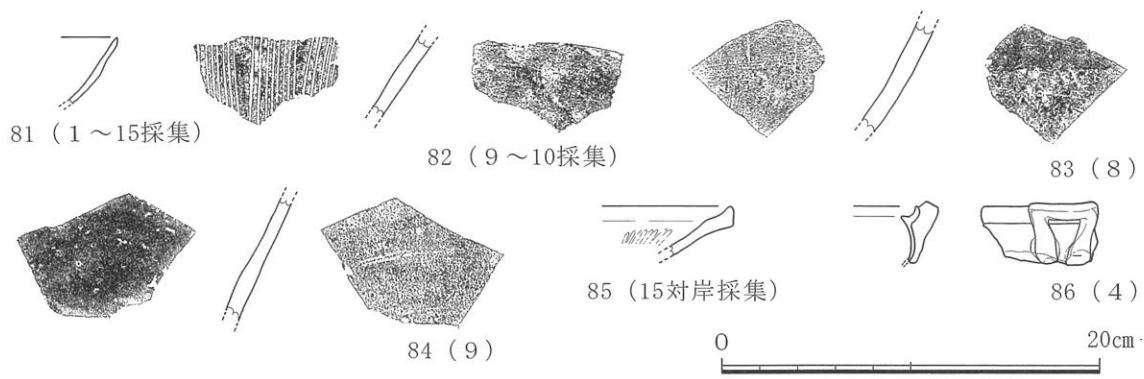


第21図 雲部陵墓参考地 出土品実測図 (13) 須恵器 (1/4)

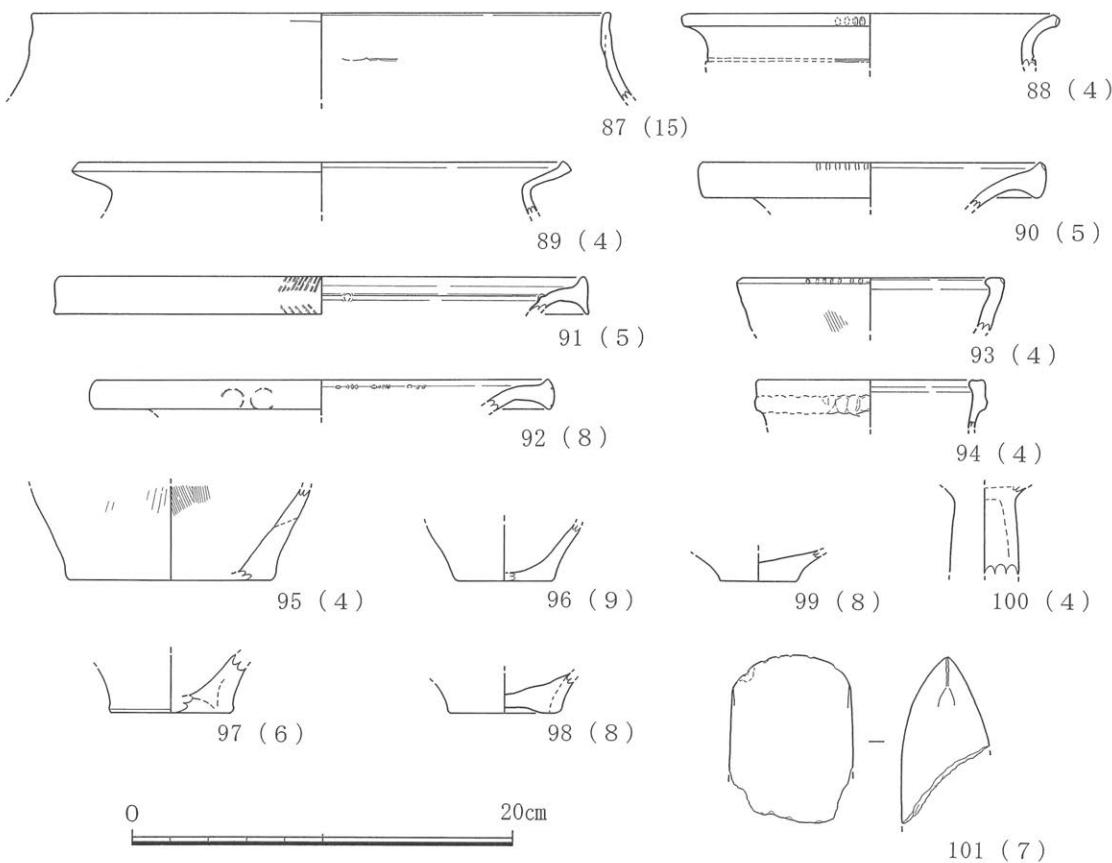
(1) 前方部

前 面

第7トレンチと第8トレンチで検出された根石列はほぼ直線上に位置している上、大きな標高差もなく、一連のものと判断される。立面上的位置関係を具体的にみると、トレンチ間約35mに対しておよそ20cm高くなるので、石列は北に向かっておよそ0.5%のわずかな登り勾配であることがわかる。前方部前面の石列は直線かつ平坦であると評価できよう。既に述べたようにこの石列は墳丘盛土上に置かれており、墳裾ではなく2段目以上の斜面裾にあたる。ここで墳丘測量図に注目してみると、前方部前面の233.8mから234.4m付近にかけて明瞭な平坦面が存在していることに気付く。上方には墳頂部へと続く最上段の斜面があり、大型前方後円墳の多くが3段築成であることを勘案するならば、この平坦面は2段目平坦面である可能性が高い。最上段墳丘とのバランスや2段目平坦面との位置関係を考えれば、前方部前面で検出された石列は2段目斜



第22図 雲部陵墓参考地 出土品実測図 (14) 中近世遺物 (1/4)

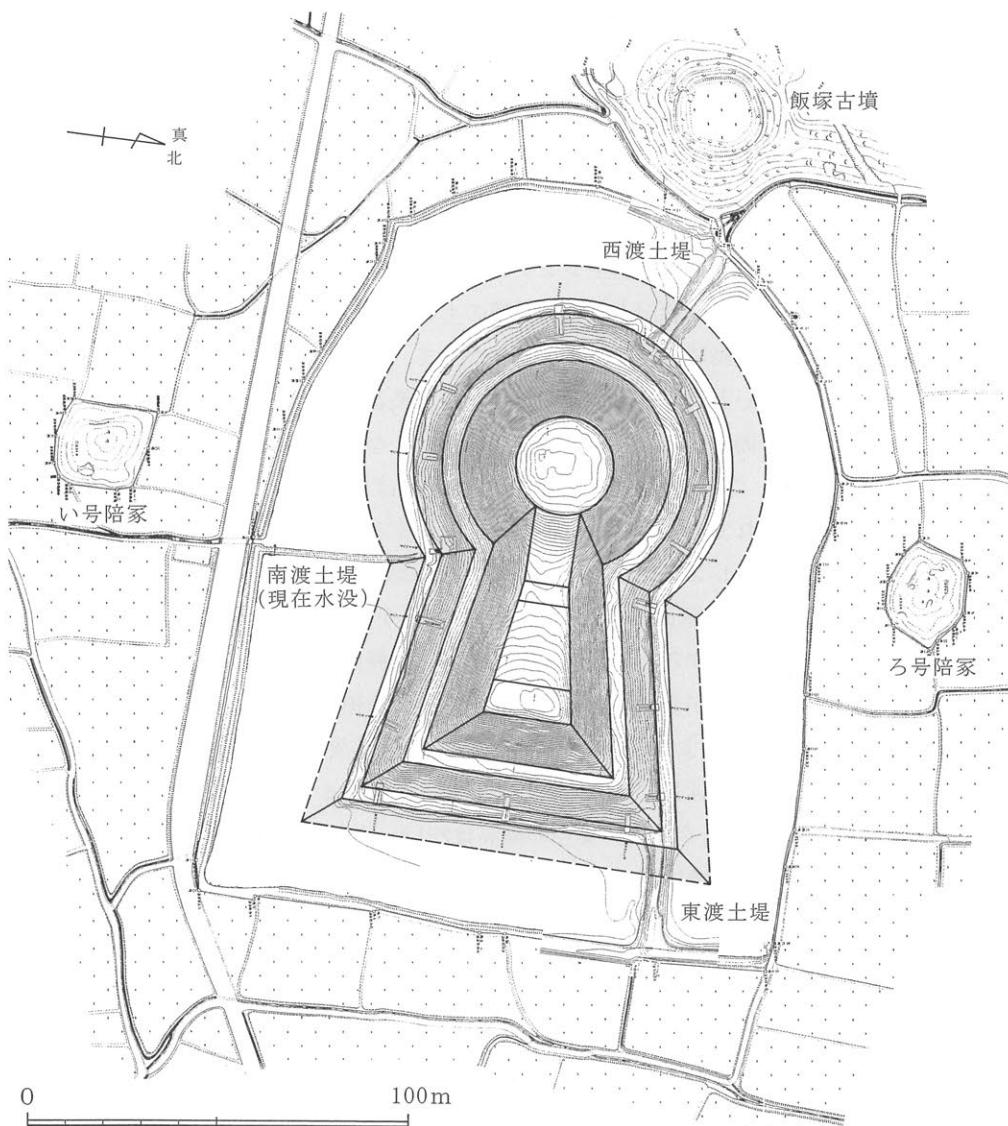


第23図 雲部陵墓参考地 出土品実測図 (15) 古墳築造以前の遺物 (1/4)

面の根石列にあたるものと判断される。この場合3段目斜面の裾は234.4mの等高線付近と推測されるが、そこから石列までの水平距離はおよそ12mであるので、平坦面+斜面の段築1段分では、幅およそ12m、高さおよそ3.6mであると推定できる。石列が傾斜していることから段の高さが墳丘各所で一定ではないことが明らかではあるが、およその目安にはなるであろう。

南側面

第5トレンチおよび第6トレンチ前面の石列について検討すると、標高では第6トレンチの方が30cmほど高い。一方、平面的な位置関係では第6トレンチ前面に露呈している石列と第5トレンチの根石列とはおおよそ同一線上に位置しているものと判断され、その方向は墳丘等高線の走行方向に概ね平行する。したがつ



第24図 雲部陵墓参考地 墳丘復元図 (1/2000)

て両トレンチ間の高低差については、下段と中段といった段の違いではなく、同一平坦面におけるせり上がりによるものと思われる。ちなみに、この平坦面が一定の割合で傾斜しているとすると、第5トレンチ～第6トレンチ間では水平距離およそ28mに対して高低差30cmであるので、前方部前端に向かっておよそ1%の登り勾配となる。

この石列を基準として前面で求めた段築1段分の幅12mを当てはめると、上段斜面の裾は、234mの等高線付近に存在すると予想される。平面的には3段目との間にもう1段が存在するとは到底考えられず、南側面の石列は前面と同様に2段目斜面基底のものであると理解するのが妥当であろう。一方、石列同士の関係では、第6トレンチ前面石列と第7トレンチ石列との間にはおよそ50cmの高低差が存在している。南側面の

石列と前面の石列とをそれぞれ延長した際の交点と、第6トレンチとの距離はおよそ17mであるので、南側面石列の傾斜を1%で計算すれば前面に向けて17cmほど高くなることとなり、交点付近の標高は230.4m前後との想定が成り立つ。同様に、第7トレンチから交点までの距離はおよそ5mなので、0.5%の勾配では南に向けて0.25cmほど下ることになり、交点の標高は230.5m前後と予想される。両面の石列の勾配から求められた交点の標高は誤差10cm程度であり、同一段のものとして問題ないと考えられる。

北側面

根石列を確認している第10トレンチと第12トレンチとを比較すると、およそ90cmの高低差が存在する。一方、各トレンチ間の平面的な位置関係をみていくと、第10トレンチ根石列の向きが墳丘北側面の等高線走行方向と概ね一致していることを指摘できる。第11トレンチでは根石列そのものは検出していないものの、等高線と平行に並べられており、第10、第11トレンチの葺石は一連のものである可能性が高い。また、既に述べた様に第12トレンチの葺石は検出状況から前方部側のものと判断されるが、その位置は第10、第11トレンチを一連のものとした場合の延長線上にあたる。したがって、第10、第11、第12の各トレンチにおける葺石は一連のものと考えて問題ないと思われる。この場合、葺石根石列が一定の割合で傾斜しているとすると、第10トレンチ～第12トレンチ間約50mに対しておよそ90cm低くなるので、後円部から前方部に向かってはおよそ1.8%の登り勾配となる。この数値を機械的に当てはめれば第11トレンチの葺石は根石列よりも上方の部分となり、根石列が検出されていないという事実とも適合する。

第10トレンチ根石列と第12トレンチの根石とを結んだ線を基準とし、前面で求めた段築1段分の幅12mを当てはめると、上段斜面の裾は、平面的には234.6mの等高線が走る辺りに存在すると予想される。ここでも3段目との間にもう1段が存在するとは到底考えられず、北側面の石列も前面、南側面と同様、2段目斜面基底のものであると理解するのが妥当であろう。石列同士の関係では、第10トレンチの石列と第8トレンチの石列はほぼ同一標高といってよい。しかし、各面での勾配は異なっているので計算してみると、前面の石列と北側面の石列をそれぞれ延長した際の交点と第8トレンチまでの距離はおよそ40mである。勾配は0.5%なので、北に向けて約20cm高くなり、交点の標高は231.1m前後と予想される。第11トレンチから交点まではおよそ8mなので、1.8%勾配なら14cm程度高くなり、標高231m前後と想定される。両面における石列の勾配から求められた交点の標高は誤差10cm程度であり、こちらも同一段と考えてもさほど問題ではないと思われる。

前方部の各トレンチで確認された葺石はいずれも墳丘2段目斜面に伴うものであると結論づけられる。

(2) 後円部

第1、第4トレンチとも、石列は汀の崖線に一致するように存在している。崖線は後円部を巡る円弧を描いており、石列は同一円周上に位置づけられよう。高さを比較した場合、第1トレンチが20cmほど高いだけで、こちらもさほど問題はないと判断される。この場合、両トレンチ間の距離はおよそ90mであるので、勾配は0.2%となり、ほぼ平坦であるといえる。

第1トレンチの根石列を基準に段築1段の幅=12mという想定を当てはめると、上段の墳裾ラインは234mの等高線付近に予想される。この場合、最上段墳丘との間にさらにもう1段を介在させる余地はなく、この石列は前方部の石列と同様に上から2段目のものと判断するのが妥当である。片や第4トレンチにおいても、根石列を基準に段築1段の幅=12mという想定を当てはめると、上段の墳裾ラインは234mの等高線付近に予想され、第1トレンチと同様な理由から、こちらも2段目の裾と考えられよう。

後円部における葺石も墳丘2段目斜面に伴うものと理解できよう。

(3) 後円部と前方部

第1、第4トレンチの石列からは半径およそ40mの円弧が復元される。その円弧と、前方部南側面、同北側面、各々の石列ラインとの交点が、想定される前方部から後円部への変換点である。第5トレンチから南側変換点までは水平距離にしておよそ10mある。前方部南側面の石列は1%程度の勾配に復元されるので、後円部に向かって10cmほど下降することになり、変換点の標高は229.7cm前後と予測される。一方、第4ト

レンチから変換点までの距離は1m程度である。0.2%の勾配では0.2cmの下降となり、標高229.6mからほとんど変わりない。第1トレントから北側の変換点までは、円周上をおよそ100mの距離となる。南側で求められた勾配を保つとすれば0.2%で20cmの上昇となり、標高はおよそ230mと予測される。第12トレントから変換点までの距離はおよそ5mである。1.8%勾配とすればおよそ10cmの下降となり、標高229.9mと予測される。石列の勾配から計算によって求められる数値は、南側面も北側面もそれぞれ10cm程度の差しかなく、数値の上では後円部と両側面の石列は一連のものと考えてよいと思われる。

(4) 墳丘の規模

ここまで検討の結果、今回調査で検出した葺石は一連のものであり、すべて2段目斜面のものと判断するのが妥当であるとの結論を得た。したがってこれまで墳丘全体と考えられていた部分のほとんどは中段以上に相当し、本来の墳丘裾は周濠内に存在することとなる⁽¹²⁾。

周辺の地形はおおまかには西北から東南に向けて傾斜しており、本来の墳丘基底面も後円部から前方部に向けて、かつ北から南へ向けて傾斜している公算が大きい。1段目斜面もそれに伴って高さが一定ではなかったものと思われ、また、各所で検出した根石列が同一レベルではないことから、1段目平坦面が傾斜していたことは明らかである。このような事実をいったん棚上げにして墳丘基底面を水平と仮定し、かつ墳丘は左右対称で1、2段目の幅や高さがすべて前方部前面の2段目と同等であるとして墳丘規模を想定するならば、墳長158m、後円部径104m、前方部長76m、前方部幅112mと復元することが可能である(第24図)。

復元される平面形は、前方部が広がる割には短く、寸詰まりの印象を与えるものである。このような前方部のやや短いタイプの前方後円墳としては、応神天皇惠我藻伏岡陵(大阪府羽曳野市)や小奈辺陵墓参考地(奈良県奈良市)が知られている。しかし、後円部墳頂平坦面を基本として当参考地と比較した場合、いずれも墳丘各所における平坦面の位置は一致しない。

(有馬伸)

まとめ

(1) 調査の成果

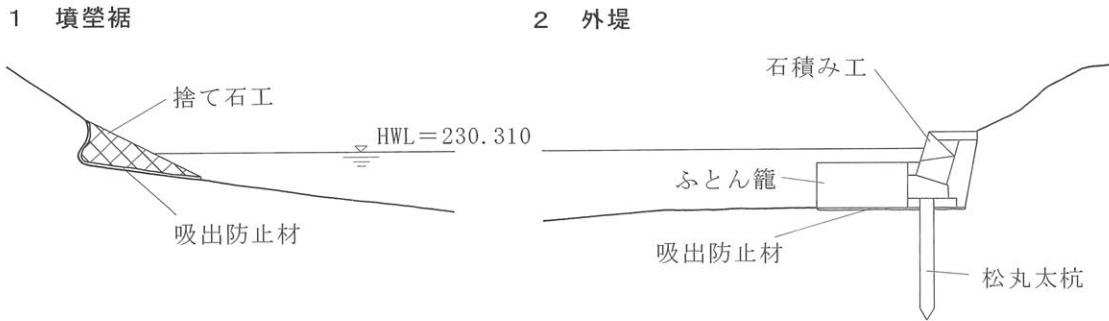
以下に本調査における成果を簡単に箇条書きしておく。

- ① 本参考地に伴う遺構として墳丘各所で葺石を検出した。これら葺石は2段目斜面のものと考えられ、本参考地の墳丘規模は従来の理解より一回り大きくなる。
- ② 墳丘上には円筒埴輪・形象埴輪が存在する。埴輪には黒斑が認められず、すべて窯窯焼成によるものと判断される。形象埴輪の出土位置の傾向としては後円部およびくびれ部に集中することを指摘できる。本参考地の埴輪は、副葬品や墳丘形態との組み合わせなども含めて窯窯焼成導入期の埴輪として今後の良好な資料になると思われる。
- ③ 北濠の墳丘裾には粘土による護岸、捨て石などが行われていた。これらは農業用水の確保を目的に江戸時代に施工された可能性が高い。南濠は江戸時代に埋め立てられたものを明治時代に再掘削したもので、さらに昭和初期に外堤の整備が行われている。南渡土堤が水没したのも、昭和の外堤整備による水位上昇によるものと思われる。
- ④ 墳丘下には弥生時代中期を主体とする包含層があり、車塚の坪遺跡が当参考地内まで拡がることが確認された。包含層のレベルは地点ごとに異なっており、後円部北西側が高く、墳丘築造時に利用された微高地の存在を示している。近接する地点の調査事例から、第4トレントで確認された溝状遺構は方形周溝墓の可能性もある。

(有馬伸)

(2) 工法について

墳丘裾護岸工事の施工にあたっては、第25図1に示したように「捨て石工法」を採用した。その理由としては、特に南濠の墳丘裾近くでは水位が浅くそれほど激しい波浪が起きないことと、波浪の浸食による墳丘との段差が低いことがあげられる。また、南濠の第3トレントから第5トレントにかけては段差が非常に低く、さらには葦などの水生植物が自生することから、これらの植物によって波浪を防ぐことができると判断



第25図 雲部陵墓参考地 護岸工事設計図

したため、護岸工事そのものも施工しないこととした。こうした人工物を用いない護岸については、近年における河川護岸工事に際しても、自然環境と景観に配慮した方法として採用されている。今後の護岸工事の施工方法を検討していく上でも、本参考地における状況の推移には注視していくこととしたい。

外堤護岸工事については、第25図2に示したように平成2年度施工区域と同様の「石積み+ふとん籠工法」を採用した。石積み工法の採用は、今回の調査によって外堤そのものが明治以降のものである可能性が高いことが判明したためである。しかしながら、石積みの基礎となるべく浅いところに設置することにして、地山を掘削することを極力避けることにした。これにより石積みの強度が弱まる可能性があるので、石積みの前にふとん籠を設置し、波浪を軽減することとしたものである。

これらの工法に使用した石材は、基礎などに使用した碎石(RC碎石=リサイクル碎石)を除き、すべて丹波産の凝灰岩[产地：兵庫県篠山市油井・岩石名：溶結凝灰岩(流紋岩質凝灰岩)]である。 (徳田誠志)

註

- (1) 京都大学総合博物館編『王者の武装—5世紀の金工技術—』、思文閣出版、1997年。
- (2) 池田正男「木戸勇助と雲部車塚古墳」『兵庫県の歴史』第31号、兵庫県史編集専門委員会、1995年。
池田正男「何人カノ筆ニ成ル雲部車塚古墳」『兵庫県埋蔵文化財紀要』第2号、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所、2002年。
- (3) 篠山町教育委員会編『雲部車塚古墳—道路改良工事に伴う周庭帯の発掘調査報告書—』、篠山町文化協会、1984年。
- (4) 註(2)に同じ。
- (5) 昭和4年3月5日発行『篠山新聞』第1223号に、「車塚の陵墓を復舊 宮内省諸陵寮へ出願」との記事が掲載されており、その中に「陵墓の風致を増し一面濠の水深を増したいといふので埋没されて行く南方の濠を復舊することとなり本年から十ヶ年計画で着手することとし」という記述がある。また、昭和8年2月1日発行『篠山新聞』第1497号には「工費一千五百圓を投じ車塚の大改修 丹波道主命の史蹟 愈々御陵墓に決定?」と題した記事があり、「今回一千数百圓を投じて濠周囲の土堤の改修増築中で、完成の暁は面目を一新することであろう」との記述がある。この工事が昭和4年の記事にある計画の施工である可能性が高いものの、裏付ける資料は宮内庁に存在していない。しかし、実際に現状と昭和3年測量の図面とが異なっていることから、この時期に工事が行われた可能性が高いものと判断している。このことは第17トレンチの所見からも裏付けられる。

なお、新聞の実見に際しては篠山市市民センター内図書室(旧本郷図書館)にご高配賜った。記して感謝申し上げる次第である。

- (6) 池田正男「何人カノ筆ニ成ル雲部車塚古墳」、前掲註(2)。
 - (7) 富田好久ほか「小田中・小立周辺古墳の調査」『篠山・多紀町の古墳』(『多紀郡文化財調査報告』第4冊、多紀郡教育事務組合教育委員会、1974年)。
 - (8) 前掲註(3)書。
- 竹野媛の父を丹波大県主由碁理とするのは『古事記』による。当参考地の被葬者との説もある丹波道主命について、『日本書紀』には「彦坐王子也。一云彦湯産隅王子也。」とあり、彦湯産隅王が竹野媛の所生であることから、「一云」説では由碁理は丹波道主命の曾祖父にあたることになる。

(9) 昭和58年に南側を走る県道拡幅工事に伴って調査が実施され、弥生時代中期の土坑墓が検出されている。また、平成16・17年度には再度の拡幅工事に伴う発掘調査が実施され、同時期の方形周溝墓などが検出されている。

前掲註(3)書。

平成16・17年度調査については兵庫県教育委員会中川涉氏、吉識雅仁氏のご高配により現地見学の機会を得た。また、その際に土層の所見など多々ご教示賜った。記して感謝申し上げる次第である。

(10) 破片資料なので検討には制約があるが、21などがこのまとまりからはずれる可能性も考えられる。

(11) 清喜裕二「京都府・私市円山古墳」古谷 穀編『埴輪工人の移動からみた古墳時代前半期における技術交流の政治史的研究』2000~2002(平成12~14)年度科学研究費補助金基盤研究C(2)研究成果報告書、東京国立博物館、2003年。

(12) 同様の指摘は既に岸本直文氏が行っている。

岸本直文「雲部車塚古墳(雲部陵墓参考地)事前調査の見学会」『ヒストリア』第193号、大阪歴史学会、2005年。

雲部陵墓参考地の葺石の石材

奥田 尚

雲部陵墓参考地のトレンチにみられる石材を肉眼で観察した(第26図、第1表)。観察結果と採石地について述べる。石材を観察したのは、第1・5・7・8・10・11・12トレンチである。使用されている石材の石種は砂岩が約7割1分、泥岩が約7分、チャートが約2割1分である。石材の石種と推定される採石地について述べる。

砂岩：色は灰白色～灰色で、粒形が角、亜角である。鋭い角が残る露岩の石を採石したようなものには粒径の大きい石が多く、粒径が小さな石には角が少し摩滅した亜角のものが多い。粒径はみかけの長径が最大46cmにおいて、5～14cmの石が非常に多く使用されている。

砂岩の構成粒は石英・長石・黒色粒である。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.2～0.7mm、量が多い。長石は灰色透明・無色透明で、粒形が角、粒径が0.2～0.5mm、量が多い。黒色粒は粒形が角、亜角で、粒径が0.4～0.7mm、量がごく僅かである。

このような石は当参考地の西側の路傍の崖をなす泥岩中に含まれる砂岩層の砂岩、東方にある河川の川原石に同質の石がみられる。角が鋭く残る石は露岩の砂岩を、角が少し円くなった石は川原石を採石されたと推定される。

泥岩：色は灰色・暗灰色・暗赤色で、粒形が亜角である。角が少し円くなった川原石様である。粒径はみかけの長径が最大18cmにおいて、5～14cmの石が多い。

層理がみられるものは殆どなく、剪断された様相を示すものが多い。僅かであるが暗赤色のものはチャートと識別し難いものが多い。

このような石は東方の川原に同質で粒形が似た石がみられる。東方の川原で採石されたと推定される。

チャート：暗赤色を呈するものが多く、灰色・青灰色・暗灰色を呈するものは僅かである。粒形は角が少し円になった亜角である。粒径はみかけの長径が最大で34cmにおよぶが、5～14cmの石が多い。

このような石は東方の川原に同質で、粒形が似た石がみられる。東方の川原で採石されたと推定される。

以上のように磐園陵墓参考地の石材のように遠地から石材が運ばれているのではなく、近くで石材が採石されたと推定される。また、トレンチ毎での石材の使用傾向についても百を越す個数が観察されたトレンチでは殆ど差が認められない。

第1トレンチの葺石の石種と粒径

石種	石材の粒径(cm)										合計
	3~4	5~9	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	
砂岩	6	56	41	3	1	3	2		1		113
泥岩	2	12	4								18
チャート	1	16	9								26
合計	9	84	54	3	1	3	2		1		157

第5トレンチの葺石の石種と粒径

石種	石材の粒径(cm)										合計
	3~4	5~9	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	
砂岩	4	29	25	2	2	6	1				69
泥岩		4	1								5
チャート	1	19	10	1							31
合計	5	52	36	3	2	6	1				105

第7トレンチの葺石の石種と粒径

石種	石材の粒径(cm)										合計
	3~4	5~9	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	
砂岩		3	4	1	1	3	3	1			16
チャート		2	1	1							4
合計		5	5	2	1	3	3	1			20

第8トレンチの葺石の石種と粒径

石種	石材の粒径(cm)										合計
	3~4	5~9	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	
砂岩	1	8	6	2	3	2	3				15

第10トレンチの葺石の石種と粒径

石種	石材の粒径(cm)										合計
	3~4	5~9	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	
砂岩	2	10	10	1	1	1	2	1		1	29
泥岩		1									1
チャート		3	3	1							7
合計	2	14	13	2	1	1	2	1		1	37

第11トレンチの葺石の石種と粒径

石種	石材の粒径(cm)										合計
	3~4	5~9	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	
砂岩	5	38	27	9		3	1				83
泥岩	2	9	2	1							14
チャート	1	15	11	1			1				29
合計	8	62	40	11		3	2				126

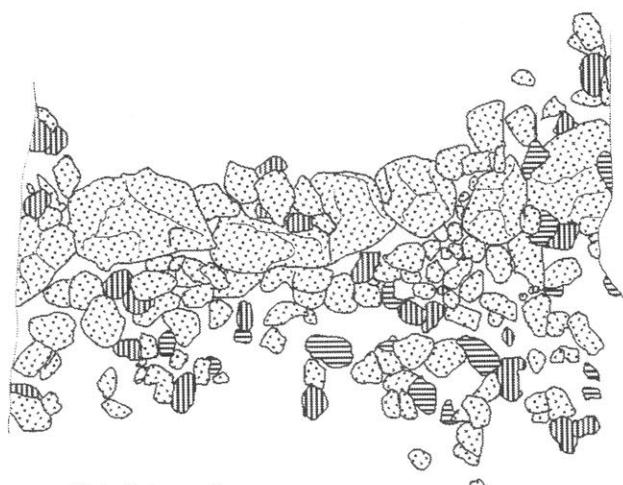
第12トレンチの葺石の石種と粒径

石種	石材の粒径(cm)										合計
	3~4	5~9	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	
砂岩		19	23	6	1	1	1				51
泥岩			1								1
チャート		5	9	4			1				19
合計		24	33	10	1	1	2				71

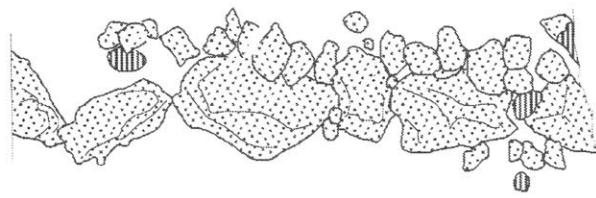
葺石の石種と粒径(各トレンチの総計)

石種	石材の粒径(cm)										合計
	3~4	5~9	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	
砂岩	18	163	136	24	9	19	13	2	1	1	386
泥岩	4	26	8	1							39
チャート	3	60	43	8			2				116
合計	25	249	187	33	9	19	15	2	1	1	541

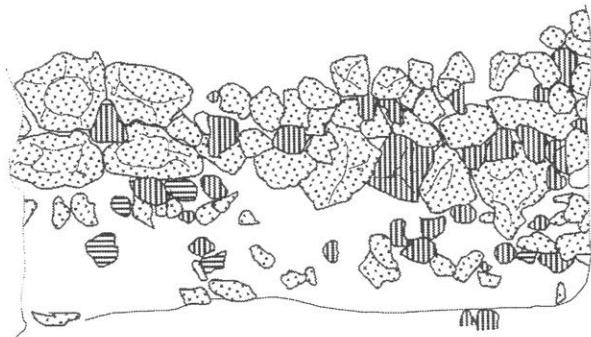
第1表 雲部陵墓参考地 各トレンチの葺石の石種と粒径



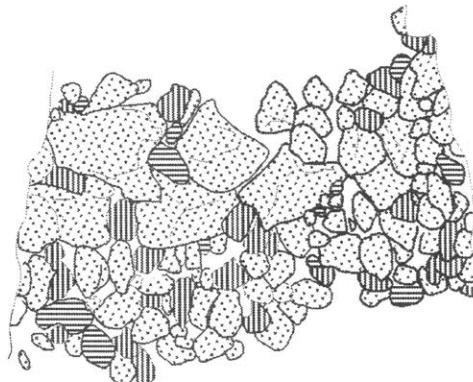
第1トレンチ



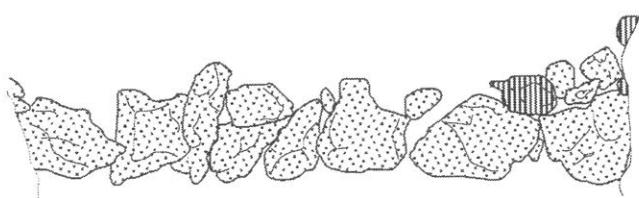
第10トレンチ



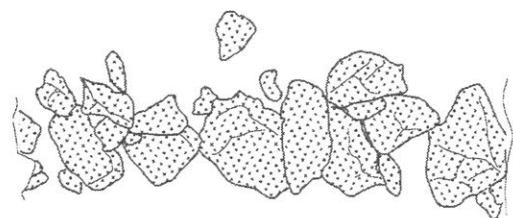
第5トレンチ



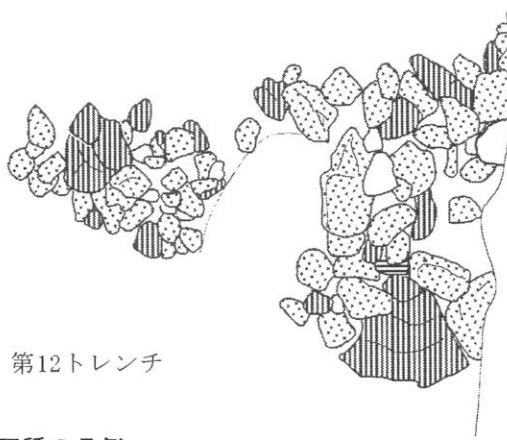
第11トレンチ



第7トレンチ



第8トレンチ



第12トレンチ

石種の凡例

- [Dotted pattern] 砂 岩
- [Horizontal stripes] 泥 岩
- [Vertical stripes] チャート
- [Empty box] 未調査

第26図 雲部陵墓参考地 葦石石種分布図

黄金塚陵墓参考地石室前面部の事前調査

はじめに

本参考地は、天理市との境界に近い奈良市田中町にあり、東から西に下りながら舌状に延びる、傾斜の緩やかな丘陵の南斜面に位置する(第27図)。近隣には山村銅鐸出土地や窪之庄城など各時代の遺跡が分布するが、周辺丘陵の山手に比較的小規模な古墳群が密集しており、その中には甲冑出土古墳として著名な円照寺墓山第1・2号墳が含まれている⁽¹⁾。また、本参考地と同じ丘陵を西方に下っていくと、初期の馬具や甲冑などを出土した前方後円墳のベンショ塚古墳⁽²⁾があり、遺跡の分布は濃密である。

本参考地の墳形は方形で、埋葬施設はいわゆる榛原石を壁体に用いた、南面する磚槨式の横穴式石室である。墳丘と拝所に相当する石室前面部が陵墓地となっているが、東・西・北に高さ最大4mに及ぶ大規模な土堤が廻っており、これを含めた少なくとも東西約120m×南北約70mの範囲が、本来の規模として考えられている。また、東側の土堤上には、組合式石棺が検出された田中古墳が知られており、近隣にはシズカ塚古墳や円照寺山門脇第1号墳のように、同じく方墳と考えられる古墳が点在している。詳細は不明ながら本参考地との関係が注意されるところである⁽³⁾。

陵墓参考地に指定後⁽⁴⁾、本参考地に対しては、過去に2度の調査が行われている。1回目は昭和26年に日本考古学協会の古墳総合研究特別委員会による墳丘・周辺地形・石室の実測及び写真撮影が行われ⁽⁵⁾、その後、昭和33年の当庁による陵墓参考地調査で、昭和26年同様に墳丘・周辺地形・石室の実測及び写真撮影が行われている。

以後、調査が行われることはなかったが、平成16年7月に奈良市より本参考地の南を走る市道拡幅工事計画が提示され、拝所に相当する石室前面部の一部について、用地協力の依頼があった。これに対し、拡幅計画の公共性に配慮する必要はあるものの、対象地が石室前面部であり、何らかの遺構の存在も考えられることから、発掘調査を実施し、遺構・遺物の状況を把握した上で判断することになった。調査期間は、平成16年9月6～13日で、石室前面部約15m²を調査した。



1 トレンチの概要と層序

トレンチは1箇所で(第28・29図)、規模は東西約5m、南北約3mである。トレンチ設定箇所は、局所的には平坦であるが、本参考地周辺は全体的に南に向かって緩やかに下る傾斜地となっている。そして、トレンチから約2.5m南で高さ2~3mの崖となり、急激に地形は下り始める(図版9-1)。

調査の結果、土層は最終的に6層が確認された。

- I層 表土。黒褐色粘質土で、厚さ5~15cm。南にいくほど厚く堆積する。
- II層 整地土。現在の平坦地を形成する黄褐色粘質土。厚さは10~30cmで、I層同様、南にいくほど厚くなる。この土層内には、石列の使用石材と同程度の石が数多く含まれている点、石列の天端をかすめるように堆積していることなどから、一度削られて石列上部を破壊した後、新たに形成されたものと考えられる。土師器細片がわずかに出土した。
- III層 原初の堆積土。石敷を直接覆う厚さ10~15cmの、緻密な茶褐色砂質土。石敷の間から土師器細片が出土した。
- IV層 石列裏込土。石列を安定させるための褐色系の粘土・粘質土。灰白色基調の粘土ブロックを含み、石材が多く含まれる。詳細については後述する。
- V層 墳丘盛土。砂礫が多く含まれており、地山起源と思われる明黄褐色粘質土。IV層に見られたものと同じ粘土ブロックも認められる。トレンチ北壁から裏込の掘方までの幅約40~50cmの範囲で確認した。厚さ約15cmが残存している。
- VI層 地山。礫混じりの堅緻な赤褐色粘質土と均質な褐色粘土の2種類を認めた。

2 検出した遺構

調査の結果、現在の墳丘裾に沿う形で東西方向の石列(石積)を検出し、その南側一面に石敷を検出した(第30図)。いずれも、トレンチ範囲外までの広がりをみせる。

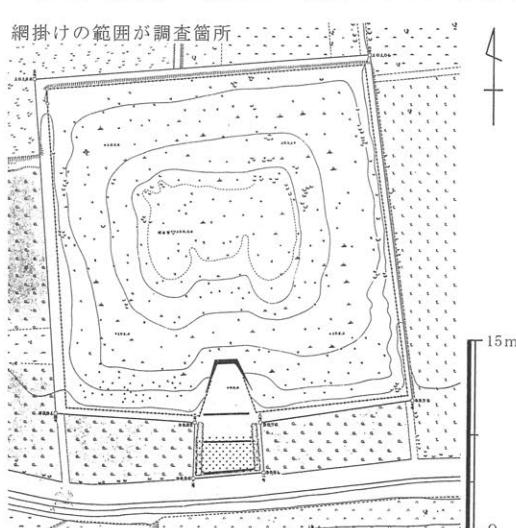
なお、石列・石敷の石種と使用傾向については、後掲の奥田尚氏の報文を参照されたい。

(1) 石列(石積) (第30図、図版10-1)

石列は、北壁から南に1m、地表下約20cmの位置に現状1段で検出した。現在の墳丘裾からは南に約1.6m、石室奥壁からは18.6mの位置にあたる。石材は全体的に石敷に使用されたものより大形のものが選択されており、長さが60cm近いものも含まれている。主に、楕円~長楕円形に近い石の長軸を東西方向に向けて設置しているが、ほとんどの石材が全体に前のめりに傾いているように観察された。

また、背後には幅50cmの裏込をもち、最終的に石室中軸線に沿って90cm×60cmの範囲を断ち割った。墳丘盛土(V)上から斜めに掘り込まれ、一部地山(VI)を削り取る形で、標高99.3m付近で平坦となる。石列石材のすぐ後ろに密着するように小形の裏込石が置かれ、さらにそれを支えるように暗黄褐色粘土が詰められている(IVc)。断面ではその上に2層を確認したが(IVa・IVb)、これらには小形の石材片が多く含まれていた(第30図2、図版10-3・11-1)。石室壁体に使用されている流紋岩質溶結凝灰岩の存在がやや顯著であるが、石室の壁体に用いるには明らかに小さく、壁体用の石材加工後の廃材が入れられたのであろう。その他、石材以外には粘土ブロックの存在が注意される。灰白色を基調とし、大きいものは40cm×30cmの大きさがあり、意識的に裏込内に入れたと考えられる。

なお、これまで述べた石列及びその検出に至る状況に加え、入念な裏込の在り方からすると、本稿において石列と



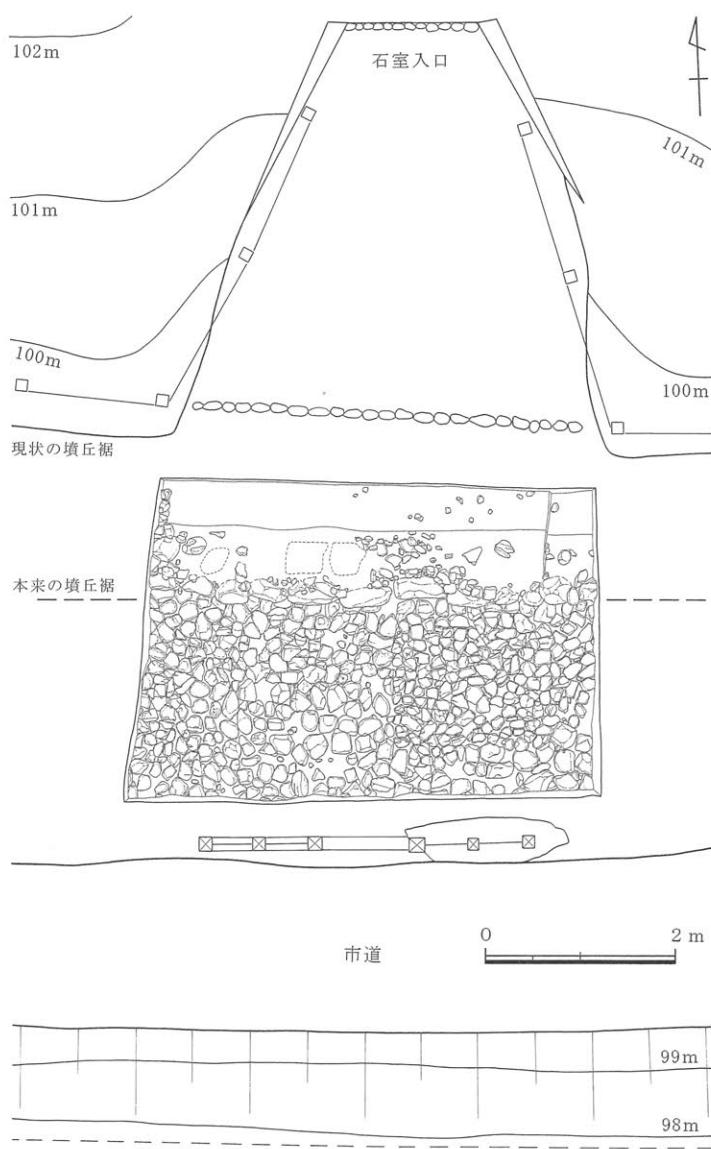
第28図 黄金塚陵墓参考地
墳丘測量図 (1/600) 昭和2年製図

した遺構は、本来数段の石積であったと考えられよう。現状で、石室中軸線上にある石列石材の天端と石室床面との比高は約60cmであるが、石列が本来石積であった可能性からすると、想定される石積の天端から石室までの床面は、比較的平坦であったとみられる。

(2) 石敷 (図版2・9)

石敷は、一部に石が失われた箇所があるものの、ほぼ全面に敷き詰められ、築造時の状況をよく残していると思われる。平坦面を形成しているが、完全に水平ではなく、周辺地形と同様に北から南に緩やかに下っている。一部に厚みのある石が用いられるが、基本的には平石を選択しているようである。また、石列の下には潜り込まないので、石列設置後に敷設されたことがわかる。

具体的な敷設順序は、整然とした石の列も認められないため明らかにし難い。しかし、石の大きさや敷き方によってまとまりが観察できる。これは石種のまとまりとしては対応しないため、敷設にあたり、石が大きさだけで選択されたことを示唆する。具体的には、石敷検出範囲内のうち北東部分の東西約2m×南北約1.5mの範囲が、やや小さめの石が密に敷かれており、長方形の区画に見える。この範囲は一部石室中軸線にもかかっているが、区画を示すような石列はなく、範囲が不明瞭である。遺物の出土も少ないため、意味のある区画か否かについては不明と言わざるを得ない。



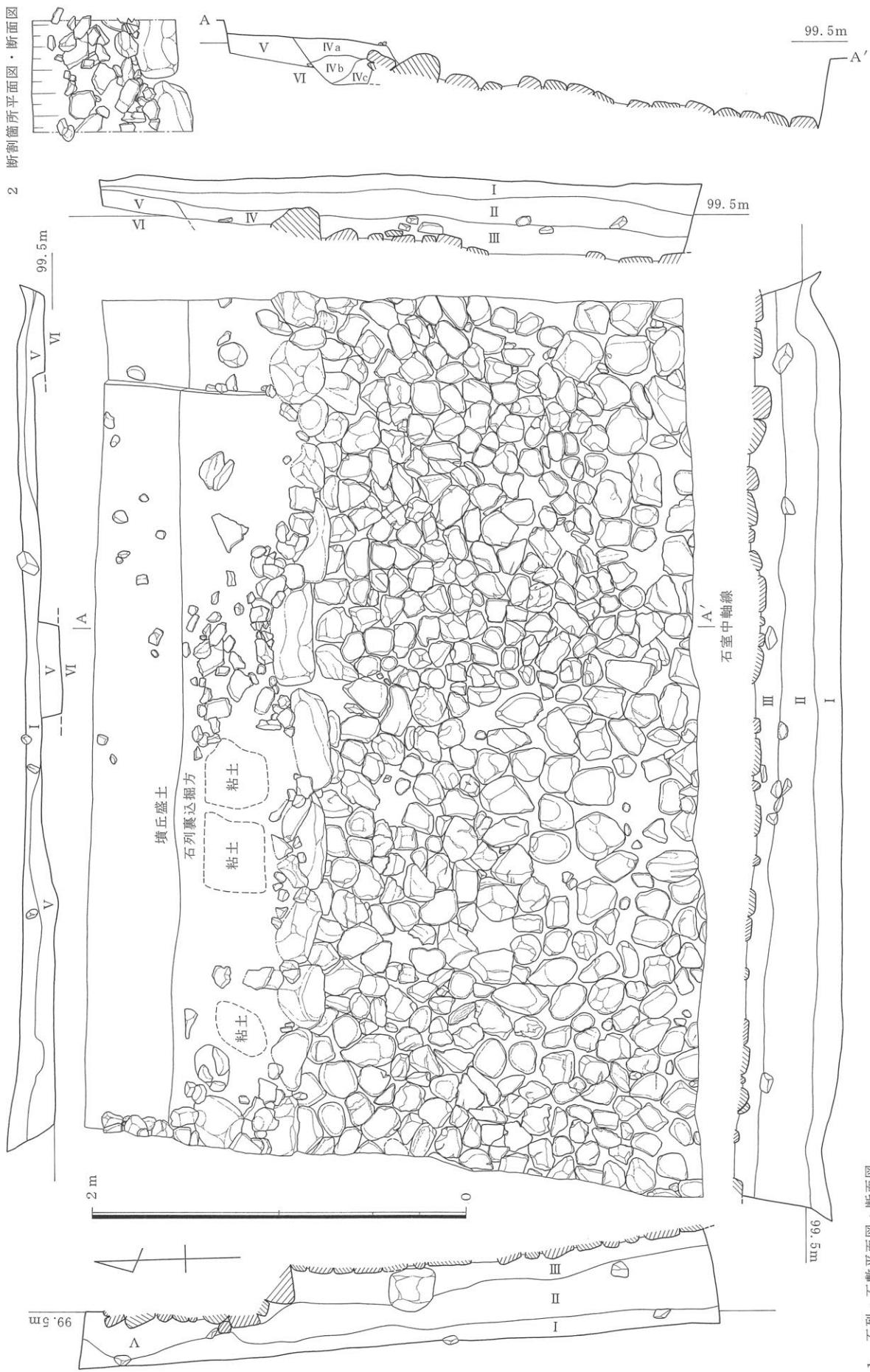
第29図 黄金塚陵墓参考地 トレンチ周辺詳細図 (1/80)

3 出土遺物

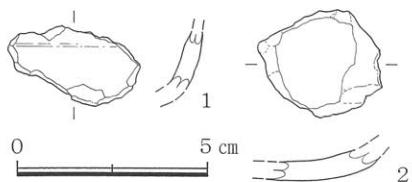
今回の調査では、土師器の細片がⅡ層から2点、Ⅲ層から16点の合計18点が出土した。原初の堆積土であるⅢ層においても石敷の隙間から破片で検出されたに過ぎない。幸うじて図化できたものを提示したが(第31図、図版11-4)、いずれも杯と考えられ、底部付近の破片と思われる。口縁部など端部の破片がなく、細かい形態は捉えづらい。図化したものも含め、色調は赤褐色～茶褐色を呈している。調整は、多くの破片が摩滅のため不明であるが、判明したものについては内面がヘラミガキと考えられ、滑らかに仕上げられている。現状で暗文は認められない。外面には比較的細かい凹凸が認められ、ヘラケズリの痕跡かと考えられる。

まとめ

調査の結果、石列と石敷を検出した。墳丘裾と考えられる石列は、本来石積であったと推定され、現在の裾より約1.6m前方で検出された。現状で一辺約27mを測るので、単純に今回の数値を充てれば約30mの規模に復元できようか。いずれにしろ、墳丘規模がより大きくなることは間違いない。石列・石敷ともトレンチ



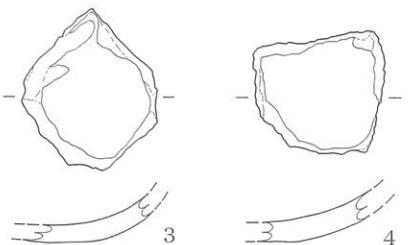
第30図 黄金塚陵墓参考地 トレンチ平面図および断面図 (1/30)



外に広がり、良好に遺存することが予想されるが、これらの遺構がどの範囲まで続くかについては不明である。

上記の調査結果を踏まえ、市道拡幅計画に対する用地協力については断ることとし、現地は埋め戻しの後、旧状に復した。

(清喜裕二)



第31図 黄金塚陵墓参考地
出土品実測図 (1/2)

註

- (1) 末永雅雄「第3章 1部 第6節 円照寺墓山第1号墳」『奈良市史』考古編、奈良市、1968年。
- 伊達宗泰「第3章 2部 第4節 円照寺墓山第2号墳」『奈良市史』考古編、奈良市、1968年。
- (2) 森下浩行「ベンショ塚古墳の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成2年度、奈良市教育委員会、1991年。
- (3) 小島俊次「第2章 第5節 東山麓地域(1)山村地区」『奈良市史』考古編、奈良市、1968年。
- (4) 本参考地治定前後の沿革については、下記文献にまとめられている。

西光慎治「宮内庁陵墓参考地・帶解黄金塚古墳の沿革」伊達宗泰監修『地域と古文化』、『地域と古文化』刊行会、2004年。

- (5) 高橋猪之介撮影「黄金山古墳」坪井清足編『高橋猪之介寫真集英』(『埋文写真研究』別冊)、埋藏文化財写真技術研究会、1995年。

黄金塚陵墓参考地の石材の石種とその採石地

奥田 尚

黄金塚陵墓参考地の葺石・敷石に使用されている石材の石種を裸眼で観察した(第32図、第2・3表)。調査地は段丘の上に位置し、礫majiriの粘土層が分布する。使用されている葺石・敷石の石材は表面が滑らかな川原石様のものが多く、露岩を剥がしたような鋭い角が残る石や節理面が顕著な石は僅かである。

当調査地付近は高樋町付近を南北に通る高樋断層により、東側の地質体が800m以上上昇しているために東側に基盤をなしている領家式花崗岩類が分布する。西側には1500万年前頃の中新世に堆積した藤原層群、1200万年前頃に堆積した鮮新世の白川池累層が分布し、その上に段丘をなす虚空蔵山礫層が分布する。藤原層群は主として凝灰岩質砂岩からなり、豊田山付近では石材として採掘されたようであるが、当調査地点の石材には1点も認められない。チャートは段丘礫層中の礫に認められる。当遺跡の南方を流れる菩提仙川の流域に分布する片麻状黒雲母花崗岩中には斑糞岩やペグマタイトが岩体として含まれる。特に北椿尾から興隆寺にかけての付近にはペグマタイト脈が多く見られる。

このような地層や岩石分布を後背地にもつことから菩提仙川の川原石には斑糞岩・ペグマタイト・片麻状黒雲母花崗岩・黒雲母花崗岩等、北方を流れる地蔵院川にはチャート、黒雲母花崗岩、片麻状黒雲母花崗岩等がみられる。

1 石材の石種と採石推定地

葺石・敷石に使用されている石材の石種は、中粒アプライト・細粒黒雲母花崗岩・中粒黒雲母花崗岩A・中粒黒雲母花崗岩B・中粒斑糞岩・粗粒斑糞岩・片麻状粗粒アプライト・片麻状細粒黒雲母花崗岩・流紋岩質溶結凝灰岩・石英斑岩・チャートである。石種の特徴と採石推定地について述べる。

中粒アプライト：色は灰白色で、粒形が亜角である。石英と長石が噛み合っている。石英は無色透明、粒

径が2～3 mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が2～3 mm、量が非常に多い。

このような岩相を示す石は当参考地の南方にある菩提仙川の川原石にみられる。

細粒黒雲母花崗岩：色は灰白色で、粒形が亜円である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は灰色透明、粒径が1～2 mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が1～2 mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5～1 mm、量が僅かである。

このような岩相を示す石は当参考地南方の菩提仙川や北方の地蔵院川の川原石にみられる。

中粒黒雲母花崗岩A：色は灰色で、粒形が亜角である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は灰色透明、粒径が1～2 mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が1～3 mm、量が中である。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が1～2 mm、量が中である。

このような岩相を示す石は菩提仙川や地蔵院川の川原石にみられる。

中粒黒雲母花崗岩B：色は灰色で、粒形が亜角である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は灰色透明、粒径が2～4 mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が2～4 mm、量が中である。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が1～2 mm、量が僅かである。

このような岩相を示す石は菩提仙川や地蔵院川の川原石にみられる。

中粒斑縞岩：色は暗灰緑色で、粒形が亜円である。長石・角閃石・輝石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が2～3 mm、量が多い。角閃石は黒色、粒径が2～3 mm、量が中である。輝石は暗緑色、粒径が2～4 mm、量が中である。

このような岩相を示す石は北椿尾から興隆寺にかけての付近に分布する斑縞岩の岩相の一部に似ている。
菩提仙川の川原石にみられる。

粗粒斑縞岩：色は暗灰緑色で、粒形が亜円である。長石・角閃石・輝石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が2～4 mm、量が多い。角閃石は黒色、粒径が4～8 mm、量が多い。輝石は暗灰緑色、粒径が3～4 mm、量が中である。

このような岩相を示す石は北椿尾から興隆寺にかけての付近に分布する斑縞岩の岩相の一部に似ている。
菩提仙川の川原石にみられる。

片麻状粗粒アプライト：色は灰白色で、粒形が亜角である。顕著な片麻状を呈し、片麻状の方向に鉱物粒が並ぶ。石英と長石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が5～8 mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が6～8 mm、量が多い。

このような岩相を示す石は菩提仙川や地蔵院川の川原石に稀にみられる。

片麻状細粒黒雲母花崗岩：色は灰白色で、縞状をなす。粒形が亜円である。黒色部には黒雲母が多く、白色部には長石が多い。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1～2 mm、量が多い。長石は灰白色透明、粒径が1～2 mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1～1.5 mm、量が僅かである。

このような岩相を示す石は菩提仙川流域の北部に分布する片麻状黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。
菩提仙川や地蔵院川の川原石にみられる。

流紋岩質溶結凝灰岩：色は灰白色である。板状節理が顕著な割り石と川原石とである。顕著な溶結を示す。斑晶鉱物は石英・長石・黒雲母である。石英は無色透明、粒径が2～3 mm、量が多い。複六角錐あるいはその一部が認められるものが多い。長石は灰白色、短柱状で、粒径が2～3 mm、量が中である。黒雲母は黒色、六角形板状で、粒径が1～2 mm、量が僅かである。基質はガラス質である。

このような岩相を示す石は宇陀郡から山辺郡にかけて広く分布する室生火山岩、奈良市春日奥山付近に分布する石仏凝灰岩の岩相の一部に似ている。室生火山岩には柱状節理がみられる場合が多いが、場所によつては板状節理が顕著な部分もある。石仏凝灰岩には柱状節理や板状節理が殆ど認められない。採石地としては室生ダム北方付近が推定される。割り石は板状の石材を加工した時の破片と推定される。

石英斑岩：色は灰色で、粒形が亜円である。斑晶鉱物は石英と短柱状の長石である。石英は無色透明、粒

径が1～2mm、量が中である。複六角錐あるいはその一部が認められるものが多い。長石は灰白色、粒径が2～7mm、量が中である。石基はガラス質である。

このような岩相を示す石は付近の虚空藏山礫層の礫にみられる。菩提仙川か地蔵院川の川原石であろう。

チャート：色は白色・赤褐色・淡茶色・青灰色等である。粒形が亜円・円である。熱変成を受けているのか、やや粒状化しているものが多い。

このような岩相を示す石は付近の礫層の礫にみられる。菩提仙川や地蔵院川の川原石に僅かであるがみられる。

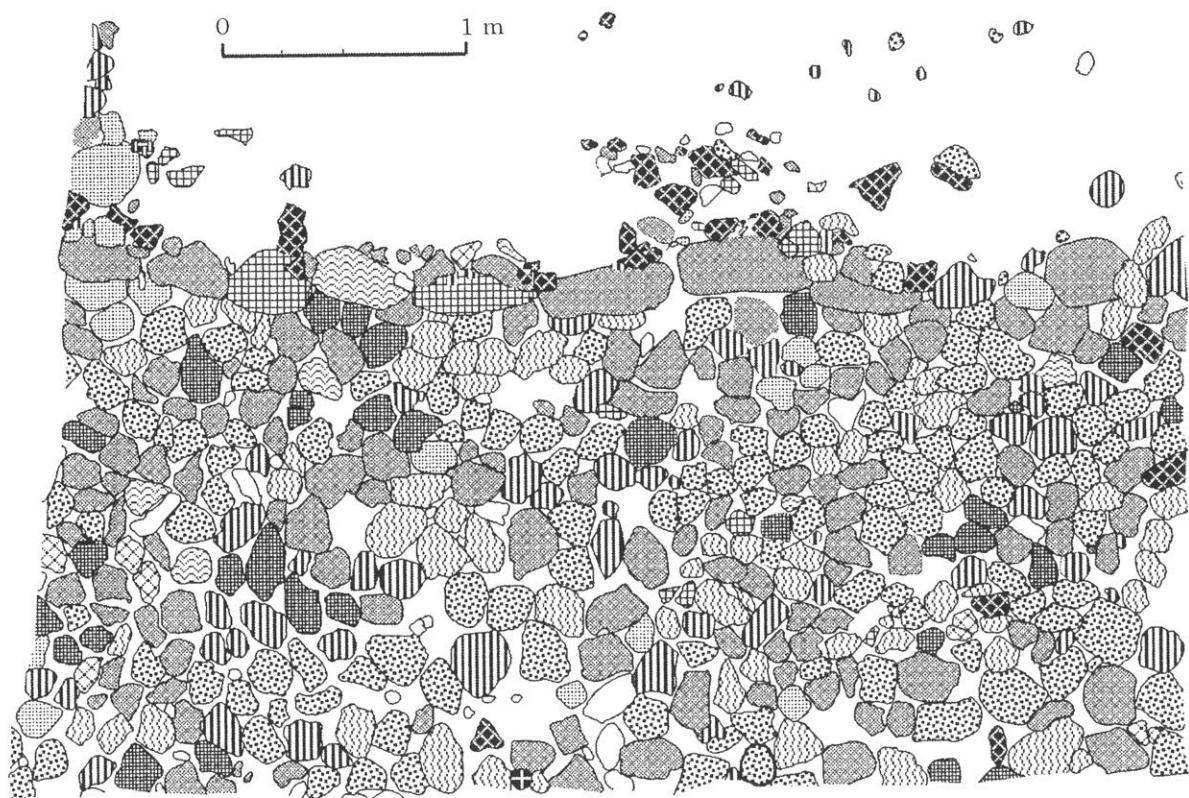
2 石材の使用傾向

列をなす基底石から北側には比較的小さな石が観察され、南側には敷石が観察される。観察した526個の石材の使用傾向について述べる。

使用されている石材の粒径は4～9cmのものが約1割4分、10～19cmのものが約6割、20～29cmのものが約2割4分、30～39cmのものが約2分、40～49cmのものが2個、50～59cmのものが3個である。長径が最大57cmである。石種構成は中粒アプライトが約2割3分、細粒黒雲母花崗岩が約4分、中粒黒雲母花崗岩Aが約3分、中粒黒雲母花崗岩Bが約2分、中粒斑糰岩が約2割9分、粗粒斑糰岩が約6分、片麻状粗粒アプライトが約1分、片麻状細粒黒雲母花崗岩が約1割3分、流紋岩質溶結凝灰岩が約7分、チャートが約1割2分、石英斑岩と石英が各1個ずつである。

基底石の石種は中粒黒雲母花崗岩A・中粒斑糰岩・片麻状粗粒アプライト・チャートで、他の使用個所の石種と同質であるが、大きな石が使用されている。

敷石は全面にみられ、割石が認められなく、自然石のみで、観察個数が401個である。石材の粒径は4～9cmのものが約5分、10～19cmのものが約6割5分、20～29cmのものが約2割9分、30～39cmのものが約1分である。10～30cmの粒径のものが約9割5分を占めていることから、意図的に同じ大きさのものが採石されたと推定される。石種構成は中粒アプライトが約2割8分、細粒黒雲母花崗岩が約3分、中粒黒雲母花崗岩Aが約1分、中粒黒雲母花崗岩Bが約2分、中粒斑糰岩が約3割、粗粒斑糰岩が約7分、片麻状粗粒アプライトが約1分、片麻状細粒黒雲母花崗岩が約1割6分、流紋岩質溶結凝灰岩が約1分、チャートが約1割、石英が1個である。敷石にみられる流紋岩質溶結凝灰岩は粒形が亜角～亜円で、川原石様であることから、初瀬川か宇陀川、あるいは吉城川の何れかの石と推定される。しかし、多量にみられる流紋岩質溶結凝灰岩の割り石は室生ダム北方付近で採石されたと推定されることから、この採石地近くの宇陀川の川原から川原石様の流紋岩質溶結凝灰岩も運ばれたと考えることが適しているだろう。他の石種の石材は南方の菩提仙川や北方の地蔵院川で採石されたと推定される。流紋岩質溶結凝灰岩の磚と川原石様の石が使用されている例としては、南河内郡河南町にあるアカハゲ古墳がある石室床面に磚、墳丘テラスの敷石に流紋岩質溶結凝灰岩(室生火山岩)の川原石様の石が使用されている。



凡例

中粒アブライト	中粒斑纏岩	W流紋岩質溶結凝灰岩
細粒黒雲母花崗岩	粗粒斑纏岩	石英斑岩
中粒黒雲母花崗岩A	片麻状粗粒アブライト	チャート
中粒黒雲母花崗岩B	片麻状細粒黒雲母花崗岩	未調査

第32図 黄金塚陵墓参考地 石列・石敷石種図 (1/30)

石種	粒径(cm)						合計
	4~9	10~19	20~29	30~39	40~49	50~59	
中粒アブライト	5	69	44	1			119
細粒黒雲母花崗岩	5	12	3	1			21
中粒黒雲母花崗岩A	3	10		1	1	1	16
中粒黒雲母花崗岩B	1	8					9
中粒斑纏岩	21	91	32	4		2	150
粗粒斑纏岩	1	18	10	1			30
片麻状粗粒アブライト		3	2		1		6
片麻状細粒黒雲母花崗岩	5	48	17	1			71
流紋岩質溶結凝灰岩	17	20	2				39
石英斑岩		1					1
チャート	16	33	14				63
石英		1					1
合計	74	314	124	9	2	3	526

第2表 黄金塚陵墓参考地 石材の石種と粒径

石種	粒径(cm)						合計
	4~9	10~19	20~29	30~39	40~49	50~59	
中粒アブライト	1	66	43	1			111
細粒黒雲母花崗岩			10	2			12
中粒黒雲母花崗岩A	1	4					5
中粒黒雲母花崗岩B	1	7					8
中粒斑纏岩	6	83	31	1			121
粗粒斑纏岩	1	18	10	1			30
片麻状粗粒アブライト		2	2				4
片麻状細粒黒雲母花崗岩	3	45	16	1			65
流紋岩質溶結凝灰岩			4				4
石英斑岩							
チャート	5	23	12				40
石英		1					1
合計	18	263	116	4			401

第3表 黄金塚陵墓参考地 石敷の石種と粒径

後鳥羽天皇火葬塚風倒木復旧整備工事に伴う立会調査

本火葬塚は、日本海に浮かぶ隱岐諸島「島前」と呼ばれる主要3島のうちのひとつ、中ノ島を行政単位とする島根県隱岐郡海士町にあり、諏訪湾に近い北西斜面上に位置する(第33図)。諏訪湾を臨む丘陵上には、弥生時代では銅剣を出土した竹田遺跡やV字環濠に囲まれた集落跡と考えられる西塔寺遺跡、古墳時代では異形刀子などを出土した新開古墳群が点在している。また、中世においては村上氏の拠点であった森城跡などがある。

火葬塚を中心とする陵墓地内には、隱岐に配流された後鳥羽天皇(上皇)の居所であった源福寺とされる行在所跡(図版12-1)などがあるが、平成16年9月の台風18号により、陵墓地内の杉が22本に渡って倒れ、工作物に著しい損害を与えた。また、根起きた箇所も多く、特に行在所跡内において顕著であった。このことから、根株を起こして元の位置に据え直す復旧工事と、それに併せて立会調査を行うこととなった。調査期間は、平成16年11月22日~26日で、遺構・遺物の状況を確認するとともに、必要に応じて図面の作成などを行った。また、調査に際しては海士町教育委員会から多大なご協力をいただいた。記して感謝申し上げたい。

行在所跡は外周を2段の石積で囲っており、基壇であることが容易に推察される。原位置を留めているか否か不明であるものの、現状で礎石も幾つか残っている。倒木復旧のため掘削を行ったのは4箇所であるが(第34図A~D)、根起きたため、すべて不定形な穴となっていた。そこを、断面の観察ができるように、平面が方形あるいは長方形になるように整形し、A・C地点の2箇所について土層断面図を作成した(第34図、図版12-2・3)。2箇所とも大きく分けて3層を確認した。I層はA地点で顕著に認められる厚い盛土である。礎石掘方を明らかに覆っている点、II層の在り方と大きく異なる点などから、基壇上面を平坦に整えるための比較的新しい時期の盛土と考えられる。II層は、基壇に顕著な版築状の盛土である。いずれも堅緻で、特にC地点においては、厚さ5~10cmの粘質土と砂質土を交互に積んだ状況が観察される。各層には炭や石の細片が多く含まれているという特徴がある。III層は地山と考えられる。A地点ではほぼ水平に検出され、極めて均質・堅緻である。C地点は、検出レベルがA地点に比べて約30cm低い。

また、A地点ではII層上面で礎石掘方、III層上面で土坑が検出された。土坑は基壇構築前のものであるが、埋土はII層の土質と同じであることから、基壇構築時期と大きく隔たるものではないと思われる。

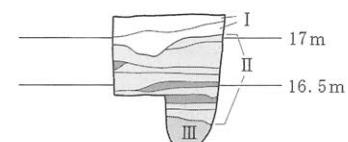
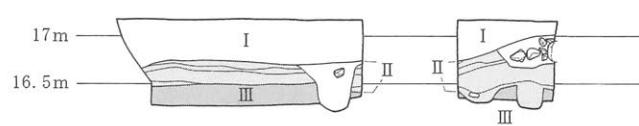
以上の結果を踏まえ、工事は予定通り実施した。

なお、遺物については、C・D地点から磁器の破片が5点出土している。細片のため図化の困難なものが多く、写真で提示した(図版12-4)。1のみI層出土で、2~5はII層中位からの出土である。1は火鉢の口縁部と考えられる。2~5はいずれも碗などの細片で、2のみ口縁部とわかる破片である。

(清喜裕二)



第33図 後鳥羽天皇火葬塚 位置図 (1/200000)



0 4 m

 粘質土	 地山
 砂質土	

第34図 後鳥羽天皇火葬塚 調査箇所位置図 (1/1500) および断面図 (1/80)

二條天皇 香隆寺陵見張所改築工事に伴う立会調査

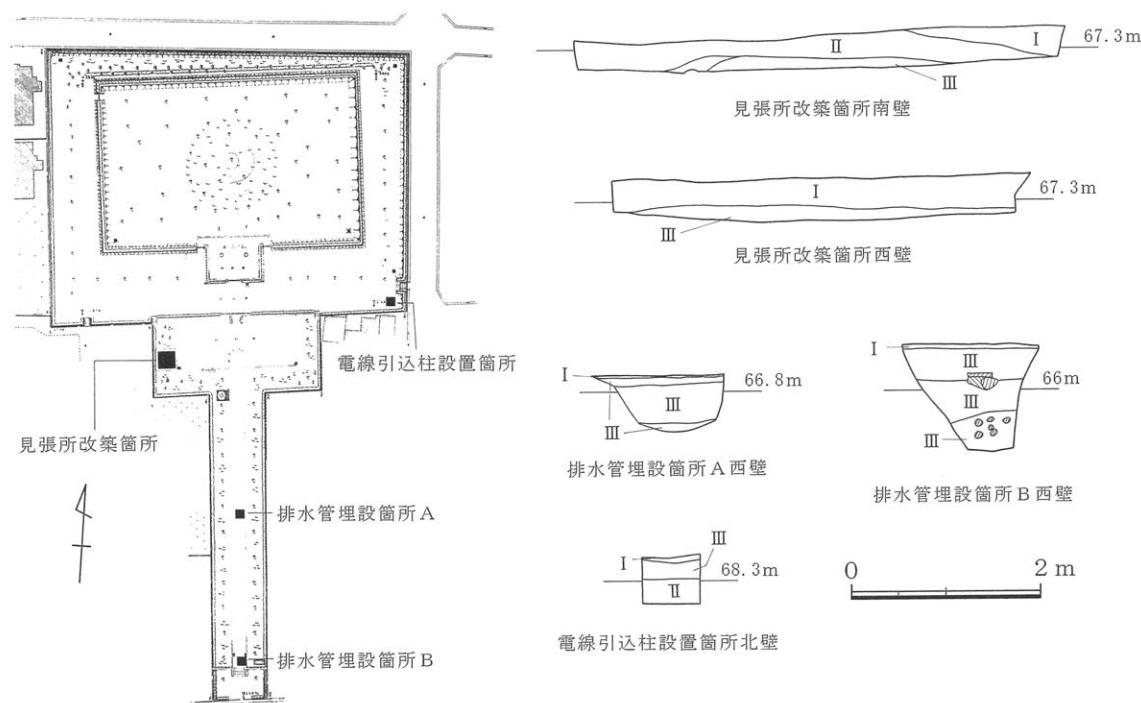
本陵は、京都市北区平野八丁柳町にあり、南に向かってごく緩やかに下る斜面地上に位置する。見張所脇にある見張所の老朽化に伴い改築工事が行われることになったため、平成16年12月6～9日の間、本部職員と監区職員が、それ以外の工事期間中は監区職員がそれぞれ立ち会った。

掘削箇所は、見張所改築箇所(長さ3.4m×幅2.9m×深さ0.4m)のほか、排水管理設置箇所(長さ70m×幅0.6m×深さ最大1.2m)および電気配線埋設箇所(長さ47m×幅0.4m×深さ0.5m)である。配管・配線箇所は掘削距離が長いため、土層観察の後、要所について断面図の作成を行った(第35図)。

各掘削箇所ともほぼ同様の土層が認められた。I層は見張所や参道の砂利敷である。II層は見張所改築箇所でのみ認められた、砂礫中心の砂質土である。III層は粘質土で、電気配線埋設箇所・排水管理設置箇所で広く認められた。これらの土層の性格であるが、排水管理設置箇所となった参道が周辺地よりかさ上げされて、明らかに高くなっていることから、II・III層とも参道・見張所を整備した際の盛土である可能性が高い。

遺構・遺物は認められず、上記の結果を踏まえ、工事は予定どおり実施した。

(清喜裕二)



第35図 香隆寺陵 調査箇所位置図(1/1500)および断面図(1/80)

神功皇后 狹城盾列池上陵整備工事に伴う立会調査

本陵では平成15年に事前調査が行われ、その成果については本誌56号に報告したところである。その結果も踏まえて、平成16年度に墳塁護岸を中心とする整備工事が実施されることになり、平成17年2月15日から18日までの間は本部・監区職員が立会い、その他の期間には監区職員が立会った。

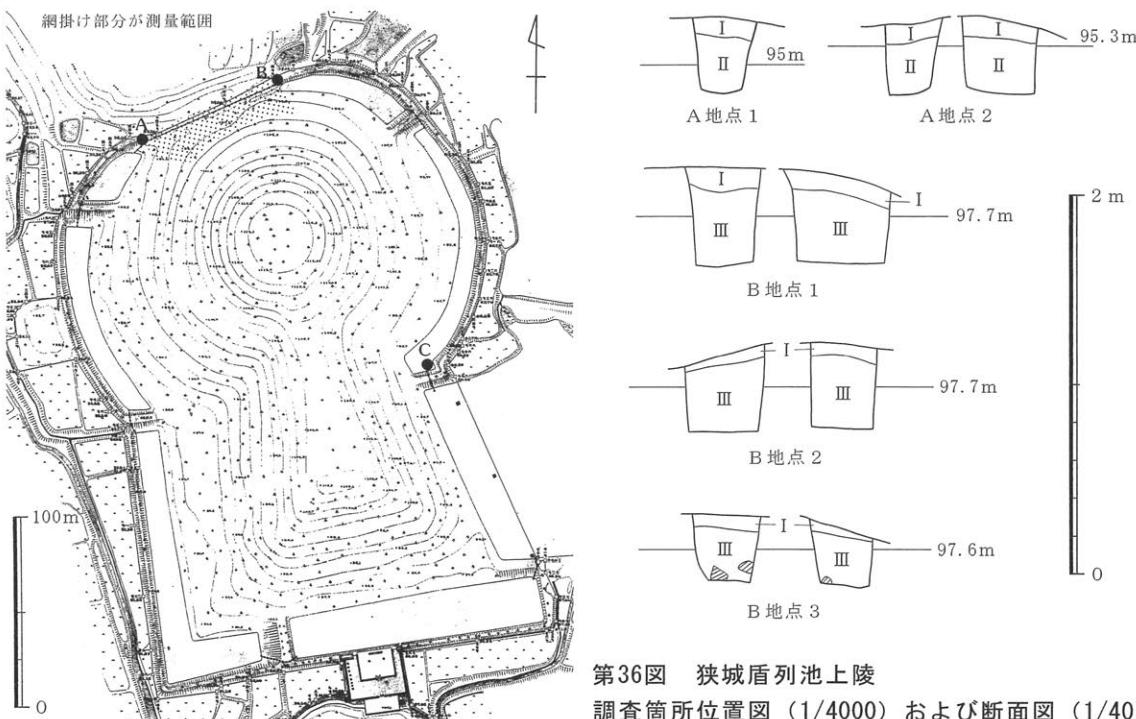
掘削箇所は、外堤上に設置された危険防止柵の基礎埋設箇所と6号濠の樋門改修箇所である。危険防止柵は、ほとんどが幕末から明治初期に造成されたと考えられる外堤上に設置されているが、これらの箇所の掘削深度はすべてこの外堤盛土内にとどまっており、工事に支障のないことが確認された。一方、後円部北側のいわゆる丘尾切断部付近については、本陵築造時の遺構が検出される可能性もあったため、慎重に立ち会った(第36図A・B)。危険防止柵の基礎埋設箇所の掘削規模は基本的に同じで、平面が40～50cm×30cm、深さ30～40cmである。A地点で2箇所、B地点で3箇所実測を行った。掘削の結果、分層の上では2層が確認された。I層は表土である。一方、下層に確認されたものには2種類あると考えられ、II・III層とした。II層は、外堤の掘削箇所で確認されたのと同じ黄褐色粘質土層で、粘土ブロックを多く含んでいる。幕末～明治初期の盛土と考えられる。III層は、均質な黄褐色砂質土層である。ちょうど、外堤が丘尾切断部に取り付く場所でもあり、地山の可能性が高いと考えられる。

6号濠の樋門改修工事は既設工作物を撤去した後、ヘドロ除去を行った(第36図C)。掘削箇所は既設樋門の設置範囲内にとどまっており、工事に支障のないことが確認された。

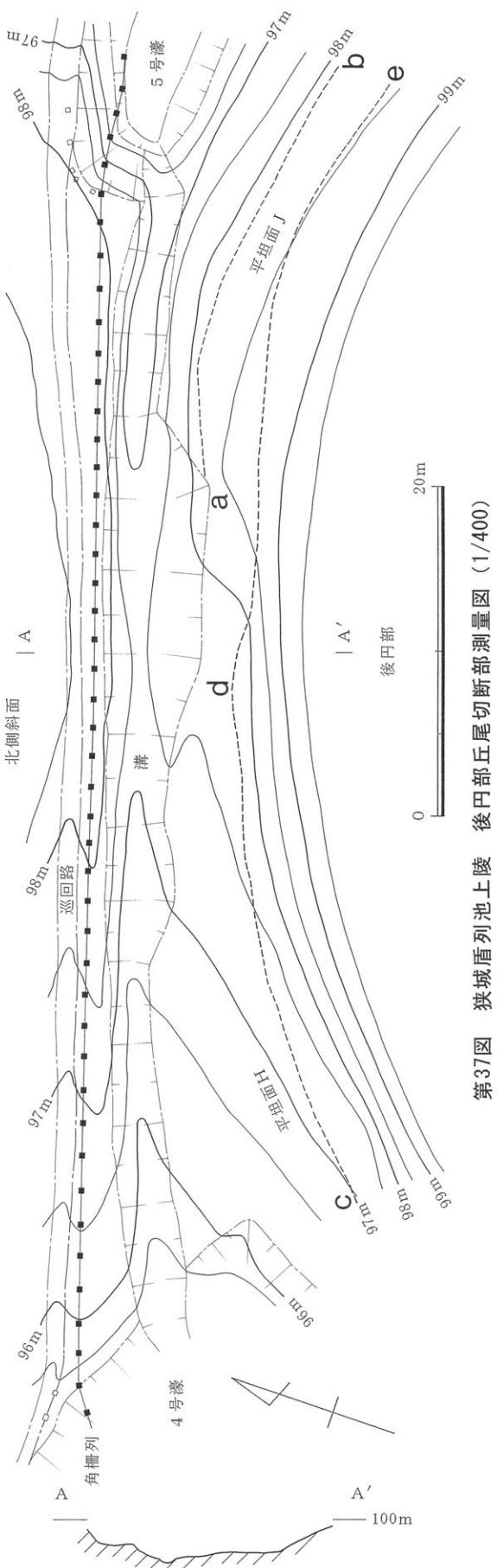
各掘削箇所とも遺構・遺物は認められず、上記の結果を踏まえ、工事は予定通り実施した。

なお、上記の工事に並行して林相整備工事も行われた。その結果、後円部北側の丘尾切断部の見通しが非常に良くなつたため、この機会を利用して当該地(東西約90m、南北15～25mの範囲)の地形測量(等高線50cm間隔)も併せて行った(第37図)。概要を以下に記していく。

墳丘の段築構造については、本誌第56号の墳丘外形調査の報文中に詳しく述べられているが、平坦面HとJの北端部を中心とする範囲が該当する。現状は、境界線に沿って巡回路が東西に走り、その北側はすぐ崖状に立ち上がる。南側には並行してコンクリート角柵列があり、角柵列のすぐ内側には幅3～7mの溝が掘られている。この溝は長さ70mに及び、端部がそれぞれ4号濠と5号濠に開口しており、埋土もないため比



第36図 狹城盾列池上陵
調査箇所位置図(1/4000)および断面図(1/40)



較的近年に掘られたものと推定される。

このように、溝から北側は後世の改変が著しい。巡回路には地山が露出しており、現地の状況からも北側斜面を削って巡回路を作ったものと思われる。よって、現在巡回路北側に残る崖状の立ち上がりは、築造当初の北側斜面を反映しているものの、本来の地形は大きく損なわれていると言わざるを得ない。

次は墳丘に目を向けてみたい。今回の測量範囲は、平坦面H・Jとそれを挟む上下の斜面である。平坦面Jは、a-bラインとd-eラインに挟まれた範囲となり、現地でも明瞭に視認できる。しかし a-bラインは a 地点で溝によって切られており、それより西側では認められなくなる。平坦面Hは、c-dラインが非常に明瞭な傾斜変換線として認められるが、北側に対応する傾斜変換線(a-bラインの延長線)は認められず、北西に緩斜面が続くのみである。

ところで、c-d-eラインには連続性が認められるが、a-d間では約1mの高低差があり、一見平坦面HとJはスムースに繋がらない。しかし、先述のとおり平坦面Hは、北側の傾斜変換線が失われているなど、付近の墳丘面の流失が考えられる。a-d間の高低差が本来の状況をそのまま反映しているとも言い難く、既に本誌第56号でも述べられているとおり、平坦面H・Jは一連のものと考えてよいだろう。

よって、平坦面H・Jの下にもうひとつ斜面があり、丘尾切断部における墳丘裾に至ると考えられる。しかし、そのすべてが溝により削られ、既に失われている可能性が高い。

(清喜裕二)

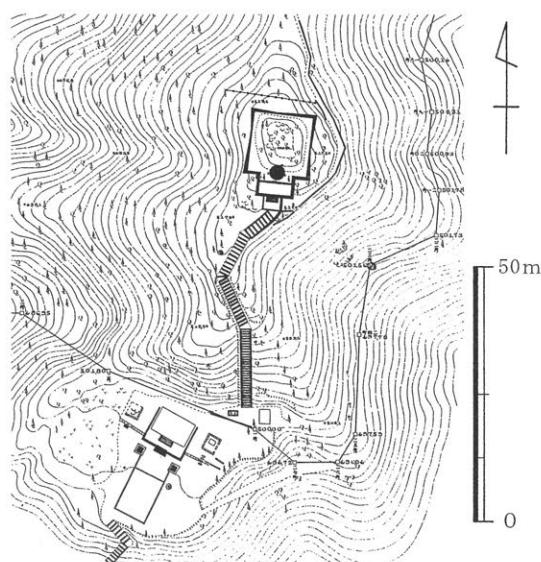
大碓命墓鳥居新築工事に伴う立会調査

本墓は、愛知県豊田市猿投町鶯取にある猿投神社西宮の後背地にあたる急峻な尾根上に位置し、現在は墳塁の周りを石垣と石壠で囲繞した状況となっている(第38図)。長らく鳥居が失われたままになっていたが、新たに石造鳥居を新築することになったため、平成17年1月17~21日の間、本部職員と監区職員で基礎埋設箇所の掘削に立ち会った。

掘削は基礎埋設の2箇所で、ともに平面は約1.3m四方、深さは約1.1mを測る(第39図)。掘削の結果、3層を確認した。I層は表土で、薄い腐植土層である。II層は旧鳥居設置の際の掘方の埋め戻し土である。III層は地山で、完全に土壤化していない堅緻な花崗岩バイラン土層である。また、掘削箇所内では、埋め殺しにされていた旧木造鳥居の部材や柱を支えた礎石などが確認された。遺物は出土していない。

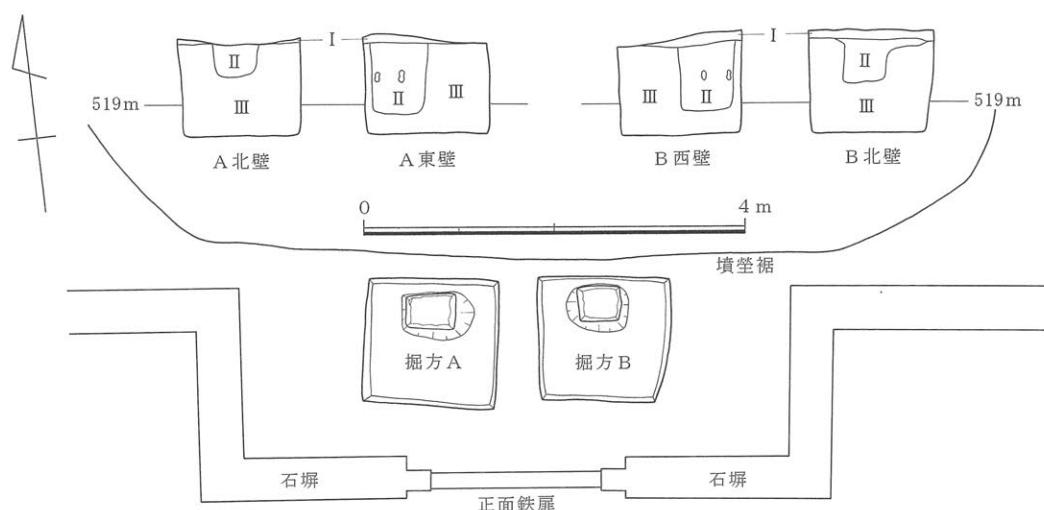
上記の結果を踏まえ、工事は予定どおり実施した。

(清喜裕二)



●印が調査箇所

第38図 大碓命墓 調査箇所位置図(1/1500)



第39図 大碓命墓 調査箇所平面図および断面図(1/80)

孝昭天皇 涼上博多山上陵見張所改築工事に伴う立会調査

孝昭天皇涼上博多山上陵は奈良県御所市大字三室に所在する。葛城・金剛山系から東に向かう緩傾斜面の先端にある独立丘陵上に位置し、形状は山形である(第40図)。近隣には弥生～古墳時代の集落や墓をふくむ鴨都波遺跡が存在することから、さまざまな状況を想定しつつ、慎重に調査にあたった。

今回の調査は一般拝所内に所在した見張所が経年のために老朽化し、改築されることになったためおこなったものである。調査箇所は見張所改築箇所や排水管・排水栓設置箇所など9箇所であるが(第41図)、内容が重複するため3箇所(A・B・C地点とする)について報告する。

基本層序はI層(表土)、II層(旧見張所建築時の盛土)、III層(参道整備時の盛土)、IV層(旧表土)、V層(花崗岩バイラン土の地山)となっている。

見張所改築箇所であるA地点では、西壁でI、II、V層を、北壁でII、V層を確認した。B地点ではI、III層を確認した。C地点では、I、III、IV、V層を確認した(第42図)。

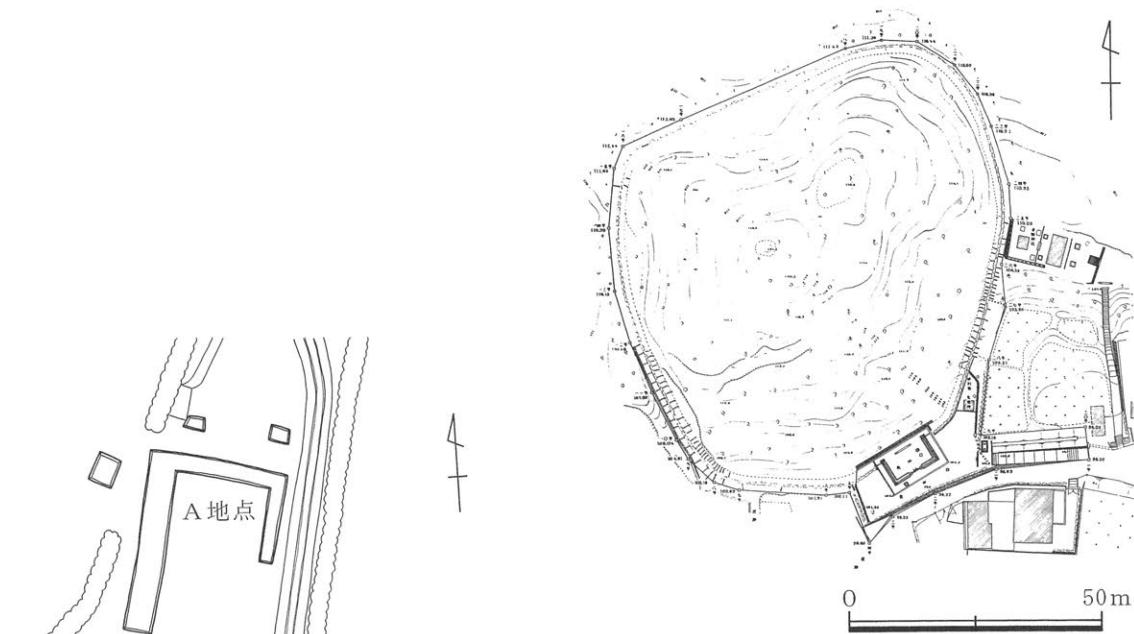
このように見張所周辺では旧見張所建築時に地山を整地して盛土をほどこしていることが確認できた。また、参道脇ではC地点で地山、旧表土(時期不明)の上に参道整備時の盛土がなされていることを確認した。C地点以外の参道脇では工事による掘削は参道整備時の盛土の範囲内にとどまることを確認した。A、B、C地点をふくむ全ての調査箇所において遺構・遺物は確認されなかった⁽¹⁾。

これらの結果を踏まえ、工事は予定通り施工した。

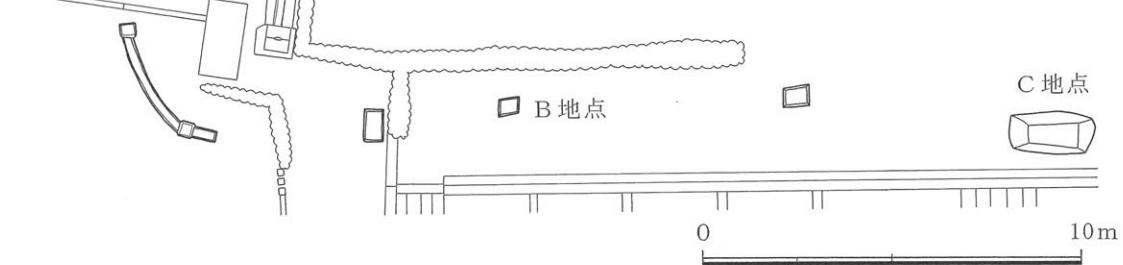
(加藤一郎)

註

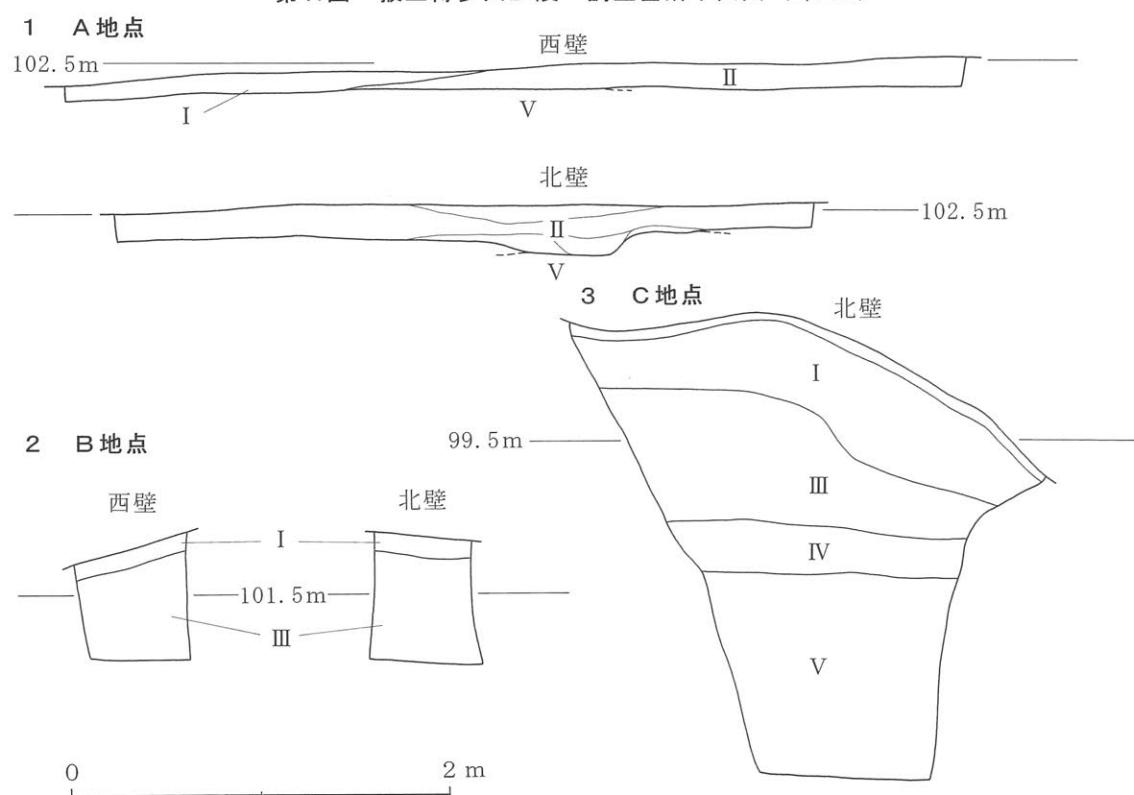
(1) 調査中、御所市教育委員会の藤田和尊氏、木許守氏が来陵され、ご確認いただいた。



第40図 披上博多山上陵 地形図 (1/1500)



第41図 披上博多山上陵 調査箇所平面図 (1/200)



第42図 披上博多山上陵 調査箇所断面図 (1/40)

仁徳天皇 百舌鳥耳原中陵飛地ほ号コンクリート擁壁設置その他 整備工事に伴う立会調査

仁徳天皇百舌鳥耳原中陵飛地ほ号は大阪府堺市南丸保園に所在する。本飛地は「菰山塚古墳」、「菰山古墳」とも呼ばれ、現状では不整形であるが、帆立貝形あるいは前方後円形とする意見もある。

今回の調査は隣接する市道側に陵墓地内の土砂が流出するのを防ぐために擁壁を設置するためのもので、古市陵墓監区事務所職員が立会調査をおこなった⁽¹⁾。

調査箇所は市道に隣接する約27mの部分で(第43図)、調査室職員の指示のもと、その一部の階段設置箇所について図化することとした(第44図)。土層は4層に大別でき、I層は表土層、II層はガラ混じりの客土(茶褐色砂質土)、III層は古墳盛土(黄灰褐色粘質土)、IV層は地山(上:黄褐色粘質土、下:黄灰色粘質土)と考えられる。II層からは埴輪片などが多数出土したが、原位置を保つものはなかった。以上のことから、調査箇所において墳丘面はすでに削平されており、盛土を一部に残すのみで葺石や埴輪列などの古墳の外表施設にかかわるような遺構はすでに失われていることが確認された。

これらの結果を踏まえ、工事は当初予定していたコンクリート擁壁を周辺景観との関係も考慮して化粧型枠工に切り替えて施工した。

II層より出土した遺物は埴輪、陶器など248点である。いずれも細片であるが、可能な限り図化につとめた(第45・46図)。また、この機会に当部所蔵の昭和44年採集品も図化することとした⁽²⁾(第47図)。

埴輪はすべて窯窯焼成によるもので、仕上がりは軟質のものが多い。色調は黄白色のものと黄橙色のものが多く、黄褐色のものが少量存在する。胎土に大きな差異はみられず、やや粗く、チャート、長石、石英などの鉱物を含む。仁徳天皇陵本体の埴輪と比べて小型で、器壁の薄いものの多いことが特徴である。

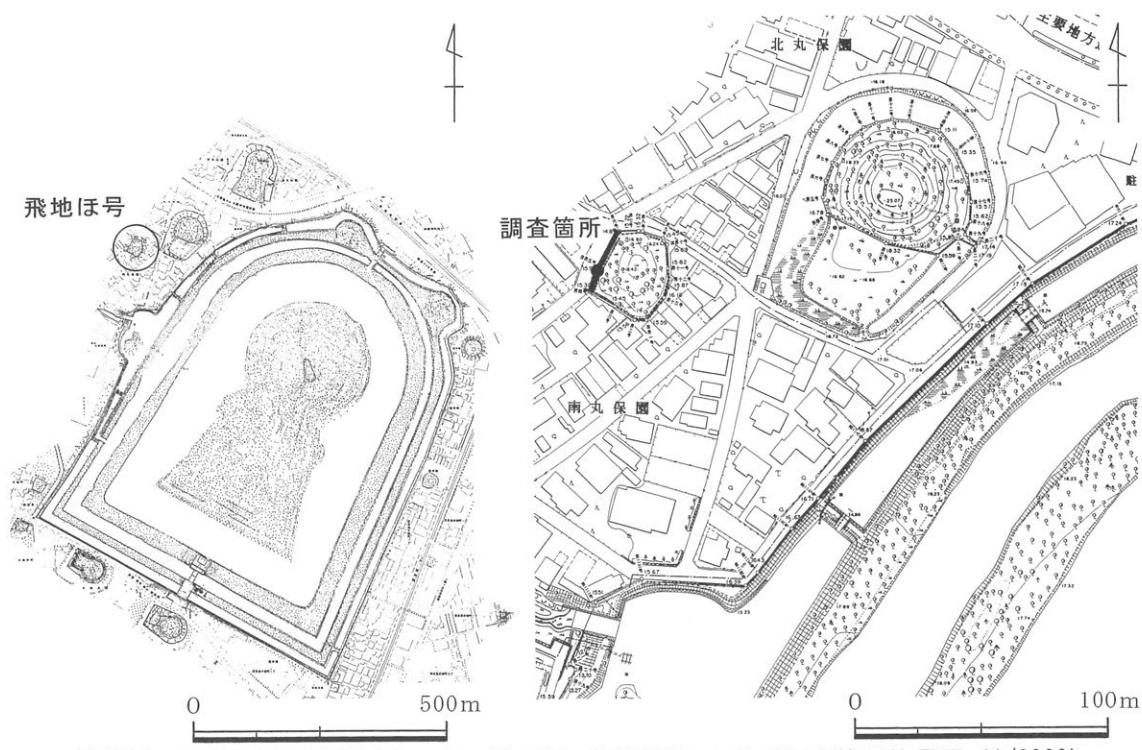
1～14は円筒埴輪、朝顔形埴輪の破片である。少数ではあるが13、14のようなやや大きめのものがある。器壁表面の摩滅しているものが多いが、外面調整としてタテハケの後にヨコハケをほどこしていることの確認できるものがある。6はB d種ヨコハケで、突帯剥離箇所では突帯設定の凹線が確認できる(写真1)。9は朝顔形埴輪の1次～2次口縁にかけての破片である。15は動物の鼻部の破片である。馬などの動物埴輪であろう。16の器種は不明で、片面に線刻がみられる。17は家形埴輪の破片となる可能性がある。18は片面に線刻や有段突帯がほどこされており、やや反り返っている(写真2)。2箇所ある有段突帯のうち1つは円形となるようなので、鞍形埴輪となる可能性も考えられる。19は朝顔形埴輪の2次口縁部の破片であろうか。器壁が非常に薄くなっている。23は円形の透孔をもつ。26は蓋形埴輪の立脚部の破片である。

(加藤一郎)

註

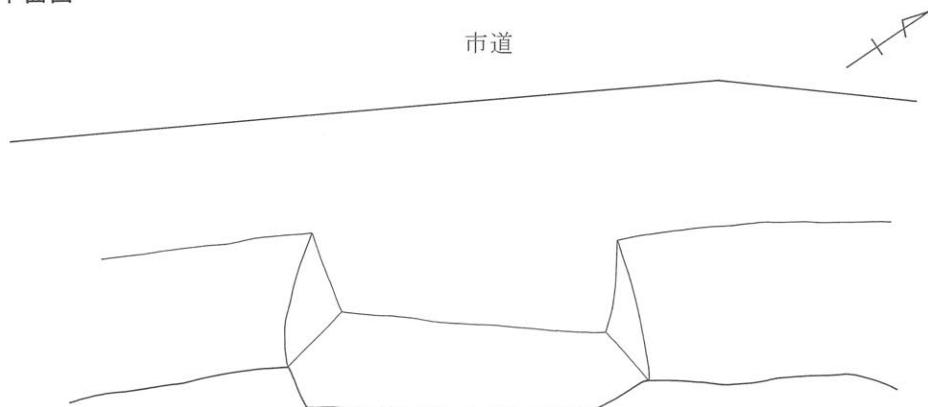
(1) 調査中、堺市教育委員会の十河良和氏、石田修氏が来訪され、ご教示賜った。

(2) 26以外は平成6年に当部が発行した出土品展示目録『埴輪Ⅱ』に掲載されている。

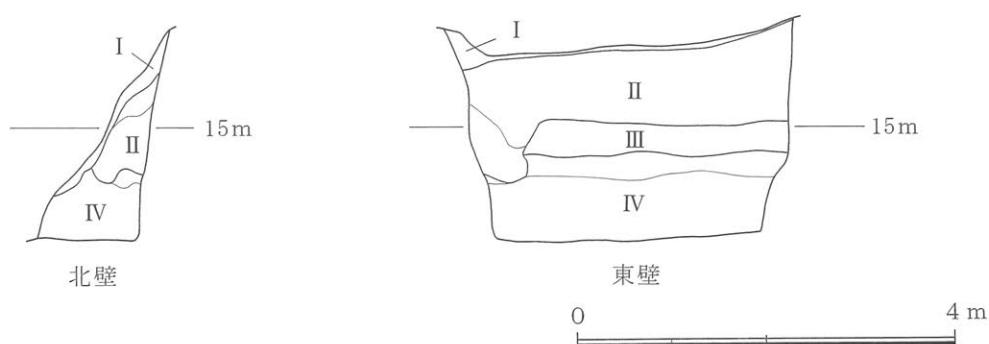


第43図 百舌鳥耳原中陵飛地ほ号 位置図 (1/15000) および調査箇所位置図 (1/3000)

1 平面図



2 断面図



第44図 百舌鳥耳原中陵飛地ほ号 調査箇所平面図および断面図 (1/80)

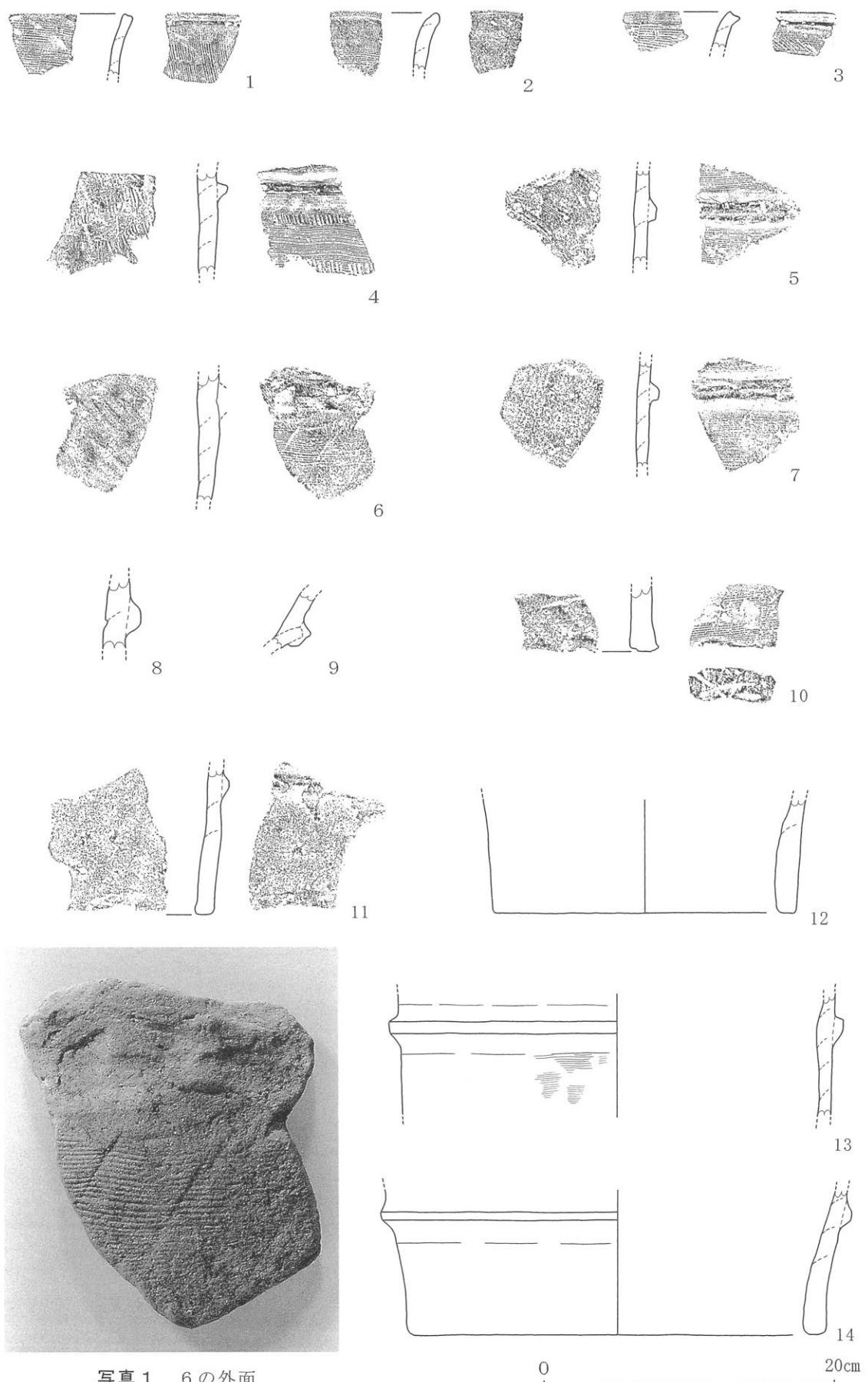
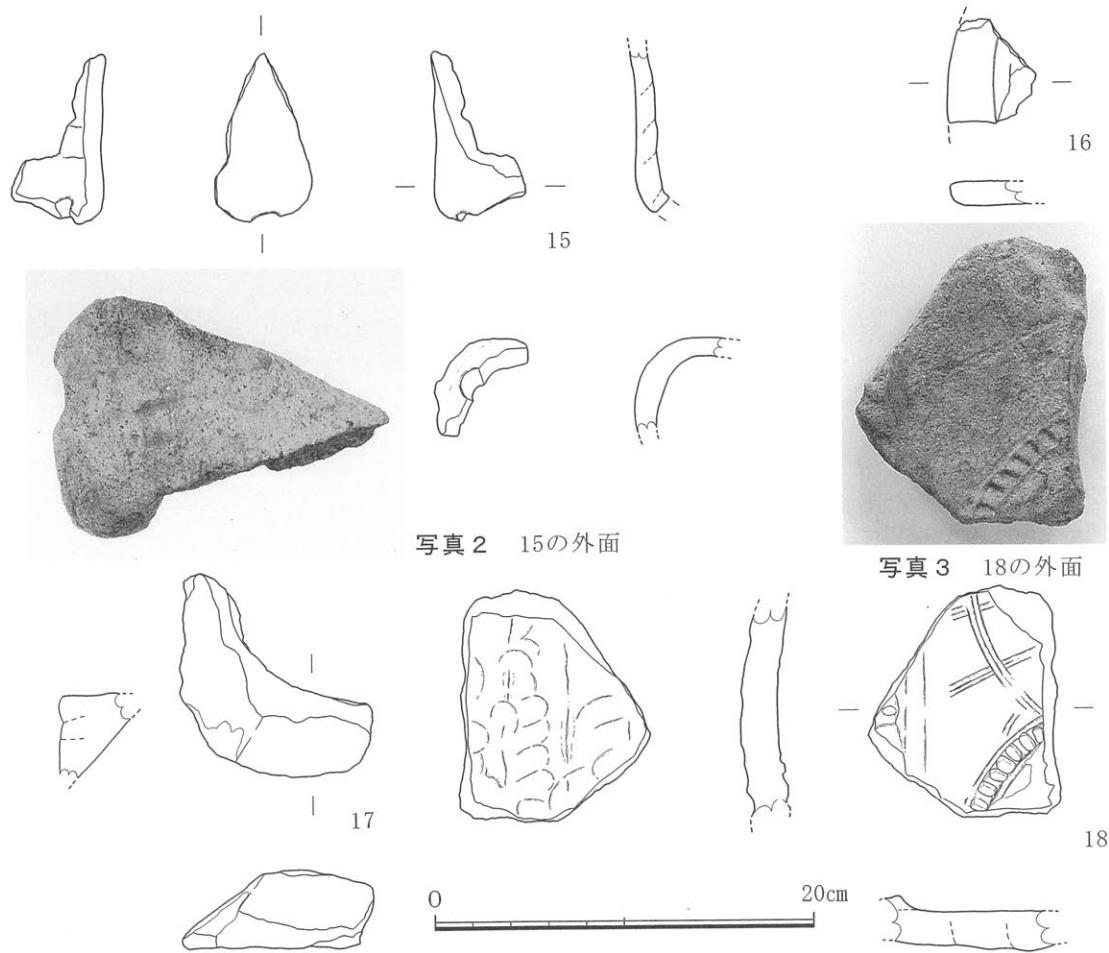
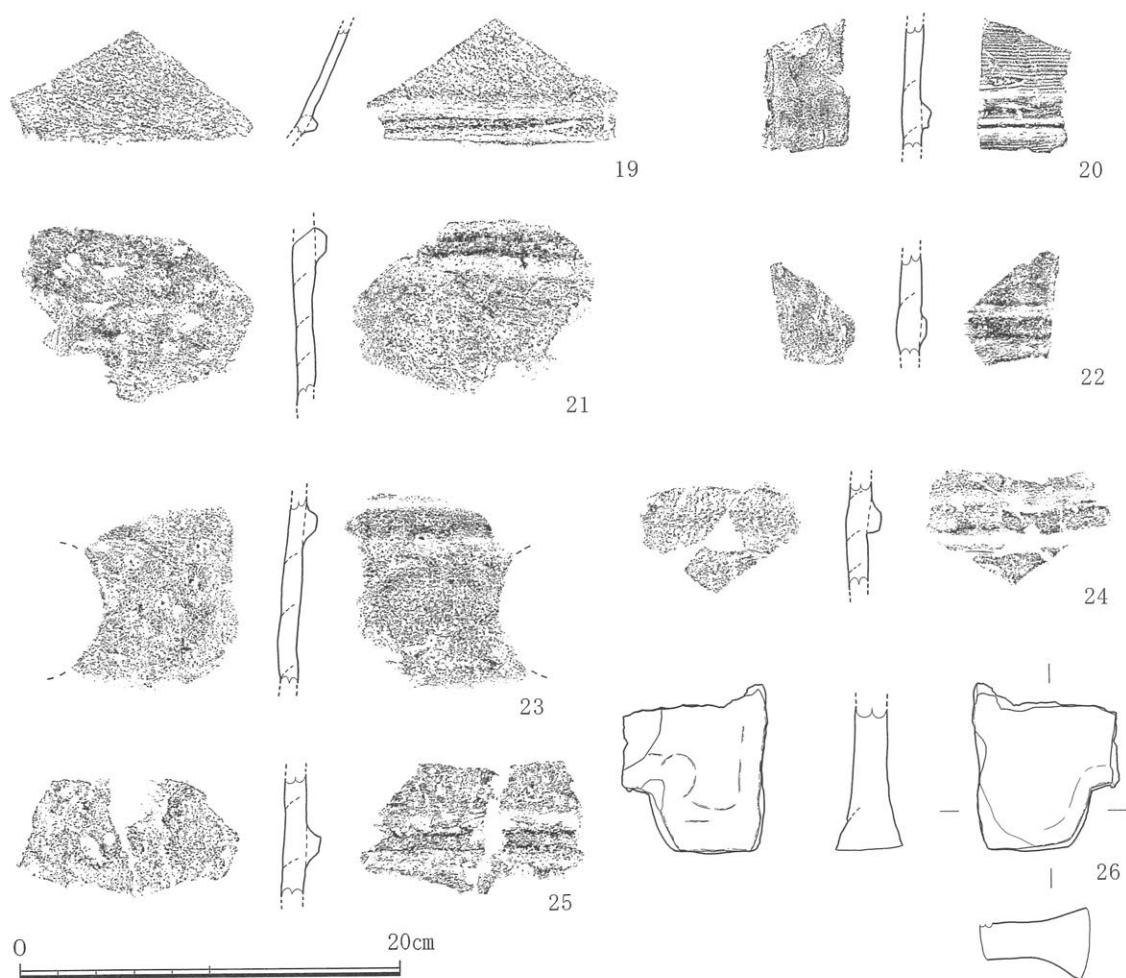


写真 1 6 の外面

第45図 百舌鳥耳原中陵飛地ほ号 出土品実測図 (1) 円筒埴輪・朝顔形埴輪 (1/4)



第46図 百舌鳥耳原中陵飛地ほ号 出土品実測図（2）形象埴輪（1/4）



第47図 百舌鳥耳原中陵飛地ほ号 昭和44年採集品実測図（1/4）

